

355-100-(1)

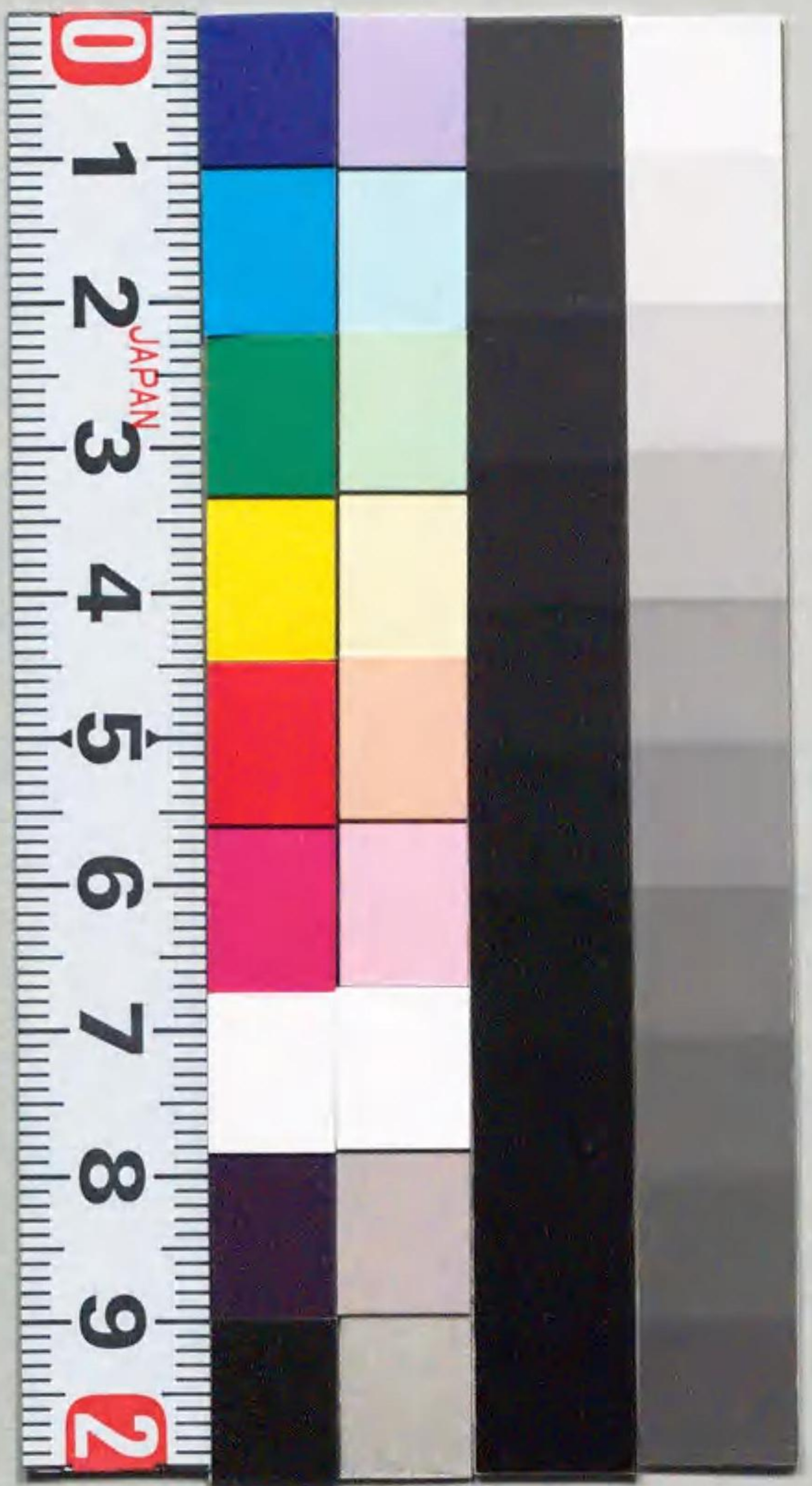


1200600109613

355

100

SCIENCE AND ART



全

著ルエウハンペヲヨシ

譯一政間久佐

集 文 論



社 秋 春

355
100人

内田魯庵・有島武郎
選 鑑
社翁紀念文庫
—1—

52.7.13
東京大学文学部図書印

77W26993

譯 者 序

一、譯者は本書を譯編するに當つて、本文庫の目的とするところを考慮し、いかなるものを收むべきかについては、下の諸書を参照した。

Mrs. Rudolf Dircks : Essays of Schopenhauer (The Scott Library).

Ernest Bellort Bax : Selected Essays of Schopenhauer (Bohn's philosophical Library)

Wm. M. Thomson : Essays by Schopenhauer.

Bailey Saunders : Studies in Pessimism.

一、譯者はこれらを準據として材料を集め、本書が包含する十五章を得た。其うち『婦人論』『自ら考ふる事に就いて』『讀書と書籍』『躁音に就て』『自殺論』『教育觀』『心理的觀察』『生存空虚の說』『偶感漫語』は『バレルガ・ウント・バラリボメナ』第二卷から。『狂氣に就いて』『性愛の形而上學』『天才論』『詩の美學』『歴史論』は主著『意志と表象としての世界』第二卷から採つた。

(『偶感漫語』の材料は Gleichnisse, Parhenla und Fabeln による)

譯者序

一、翻譯するに當つて、バレルガはケーベル先生校訂のものに據り (Berlin, Verlag von Moritz Boas. 1891)、主著の方はレクラム版のグリーゼバッハ本に據つた。意味の解釋に就いては、上掲の英譯書の外に、主著の英譯、

The World as Will and Idea, Translated by R. B. Haldane and J. Kemp, vol. III. (1891)

を参照した。これらの英譯書に對する譯者の批評は卷末の附録にある。

一、譯者は此書を出すに當つて、從來我國で出版されたショーペンハウエルの譯書に、可成り多くの誤譯と曲解とがある事を發見して驚いた(最近玄黄社から出た二冊はまだ見ない)。譯者は特に此點に留意して、大過なからん事を期した。此書が多少でもこれまでに誤り傳へられたものを訂正する事が出来たら、譯者の勞は報られる。但し本書に誤譯があらば、教示の勞を取られんことを大方の諸君に願して置く。絶対に完全な翻譯は容易に出来るものではないから。

一、原著に在る希臘・拉典・伊太利・佛蘭西等の他國語に就いては、譯者は既存の英獨譯に據り、これなきものは、すべて先輩又は同僚諸君の教示を仰いだ。此機會に於て、これらの方々、及び原書或は參考書を貸與又は惠與して下さつた方々に厚く感謝の意を表する。

一、なほ單行本としての性質上、或は一般に讀まれたいと云ふ目的の上から、又は他の關係上

から、若干の個所に於て少しばかりの省略と或云ひ換へ又は補譯を施した。然しこのために大體が害せられるやうな事は少しもなく、寧ろ却つて理解し易くなつたと思ふ。又『心理的觀察』と『偶感漫語』とに於ては、わざと二三項を省略した。これだけをあらかじめ讀者諸賢にお断りして置く。

仙臺に於て

譯 編 者 識

一九二〇年十月下旬

目次

譯者序……………一三
ショーペンハウエル小傳……………一三
婦人論……………二
自ら考ふる事に於て……………二
讀書と書籍……………四
躁音について……………五
自殺論……………六
觀相論……………七
教育論……………八
心理的觀察……………九
生存空虚の説……………一五

狂氣に就いて……………一六
性愛の形而上學……………一七
天才論……………一八
詩の美學……………二二
歴史論……………三三
偶感漫語……………三〇
附録……………一四

シヨーパーンハウエル小傳

アルトゥール・シヨーパーンハウエル (Arthur Schopenhauer) は、千七百八十八年二月二十二日ダ
ンチッヒのハイリゲンシュトラーセ百十七番地に生れた。父は富裕な紳商で、名をハインリッヒ・フ
ローリス (Heinrich Floris) と云ひ、千七百四十八年の生誕で、母はヨハナ・ヘンリテ (Johanna
Henriete) と呼び、千七百六十六年の生れであつた。兩人の結婚は千七百八十五年で、當時ハ
インリッヒは三十八歳、ヨハナは十九歳であつた。

シヨーパーンハウエル家の祖先は、和蘭人であつたが、アルトゥールの曾祖父の代になつて、ダン
チッヒに移つたと傳へられる。アルトゥールの父は慧敏な商才と鞏固な性格とを持つて居たが、
其外にまた英佛の文學に關する相應の智識を有し、特にヴォルテールを愛讀した。其政治上の
意見は自由民権的・共和制的であつて、自由を愛し、獨立を尊んだ。英國の政治と其家庭制度
とは彼の欣仰するところで、家具の類まで英國風のものを用した。アルトゥールが後年英國
に對して持つた好感は、或は既に幼年時代に無意識的にはぐくまれたものであつたかも知れな

い。且ハインリッヒは世界主義的の意見を持つて居たので、此長男を世界市民たらしむべく教
育しやうと企てた。アルトゥールと名づけた所以も、此名前が各國を通じて同一であるからで
あつた。

アルトゥールの母ヨハナは、舊姓をトロジイネル (Troisener) と呼び、父はダンチッヒの市
參事會員であつた。彼女はすぐれた知力を有し、且文學に對する好愛の念を持つて居た。後に
なつて若干の小説と旅行記とを出して、閨秀作家として世に知られるに至つた位であるから、
相當の教養を持つて居た事は解る。アルトゥールの後年の學說に従へば、人間の性格即ち意志
は父から傳はり、知力は母から授かるものである (本書『性愛の形』^{而上學}參照) が、彼自身が、恐らく此學
說の最確實な例證であつたであらう。

千七百九十三年、アルトゥールが五歳の時、これまで自由市であつたダンチッヒは、普魯西に
併合される事となつた。此事件は、自由と獨立と共和とを人間生活の理想とするハインリッヒの
堪え得るところではなかつた。彼は其家族と家業とを携へてハムブルヒに移つた。この市は以
前のダンチッヒと同じく自由市であつたのである。

「私の息子は實世間の書物を讀まなければならぬ」。世界市民として其子を教育しやうとしたハ

インリッヒは、また自己の職業の好個の後繼者を、アルトゥールに於て見出さうとしたので、此二つの目的から、彼は千七百九十七年（此年アルトゥールの唯一人の妹アデーレが生れた）九歳の少年を携へて巴里に赴き、暫らくハアヴル（Havre）に滞在した後、アルトゥールをその知人グレゴアール（Grégoire）の許に托して、自分は單身ハムブルヒに歸つた。アルトゥールはこゝに二年間とどまつて、此家の同齡の息子アンティームと共に私教授を受けたが、此時代は彼にとつて極めて愉快な時で、後年になつても此時の思ひ出は、彼をよろこばしたと云はれて居る。

千七百九十九年、アルトゥールはハムブルヒに歸來したが、佛國に於ける二年間の教育は、此國語を異常に習熟せしめたと同時に、母國語をほとんど全く忘却せしめた。彼は其後三年の間ハムブルヒで私教育を受けたが、此頃彼の兩親、——特に母は文學界の人々と交際して居たので、當時著名の文人は屢彼の家を訪れた。クロップシュトックも此家の饗應を受けた一人だと傳へられる。恐らく此等の事が因となつたのであらうが、此時代から學藝に對する憧憬と、商業生活に對する嫌惡とが、彼のうちに目覺めたのである。彼の父は此傾向を察して、一時はアルトゥールのために僧職を買はうかとも考へたが、費用のためにこれを斷念して、豫定の如く自己の事

業の後繼者たらしめやうと決心した。然し彼は、此目的を貫徹するために、強壓手段を探る事を避けて、一策を案出した。即ち彼は二個の提案を出し、アルトゥールをして其一を選ばしめた。それは學術研究の道に登るために、高等學校に入學するか、然らずんば、今兩親が企劃しつつある大旅行に参加するかであつた。さうすれば彼は舊友アンティームに會ふ事も出來やうし、英國の風物・伊太利の古蹟に接することも出來るであらう、然し此旅に出れば、學術の研究は、永久に斷念しなければならぬと云ふのであつた。第二の提案は、旅行を好み異郷の生活に憧れつつあつた少年の歡迎するところとなつて、ハインリッヒの巧計は忽ち成就したのであつた。

千八百〇三年の春、アルトゥールは兩親に従つて、大旅行の途に上つた。一行は和蘭からカレールに出て、英國に渡り、それから佛蘭西に轉じて、伊太利に出で、壞太利・瑞西等を歴遊して、二年の後ハムブルクに歸つた。此間にも兩親はアルトゥールの教育を閑却せず、父は英佛語の學習を、母は日記をつける事を命じた。殊に兩親が英國からスコットランドへ旅行した三月の間は、アルトゥールを倫敦の附近ウナムブルドンのさる牧師の寄宿學校にとどめて學習させた。

此間に彼の英語は頻りに上達したのである。此語學的素養を基礎とした彼の學力は、後年（第二

次伯林) カントを英譯しやうと云ふ自信を彼に得しめたのである(但し此計畫は實行されなかつ

時代) 然し同時に彼は英國の教職者の頑迷不靈なのに驚いた。當時の書翰はこの事を示して餘りある。後年彼は、英國と英國人とに對して、多大の好感を示したのにも拘らず、否英國人を以て歐洲の諸國民中に於て最インテリゲン(聰)な國民だと賞讃したにも拘らず(本書「噪音に就いて」參照)

其宗教方面の事柄に於ては、一切の機會を利用してこれを痛罵することを忘れなかつた。

アルトゥールが父母と共にハムブルクへ歸來したのは、千八百〇四年の秋であつたが、其後ダ
ンチヒへ行つて確信式を受け、翌年の初めから、約に従つて商業生活に入り、先づ父の知人の
商店に通つて事務の見習をした。然し彼は依然として此業務に興味を持たず、閑を偷んで讀書
や考察に耽つた。後年彼自身の云つた通り、恐らく彼は、最も不良な店員であつたであらう。

然るに間もなく、シヨールハウエル家にとつては、最大の不幸事が起つた。彼の父ハイン
リッヒは、其店をハムブルクに移した際に、多くの金銭的犠牲を拂はなければならなかつたし、
其後の商況も決して好良ではなかつた。此爲めであつたかどうか解らないが、ハインリッヒの
性質は著しく激烈になり、行爲にも風變りなところが増して來た。とかくするうちに、千八百
〇五年四月某日、彼は自身の穀倉に沿へる運河のなかから死體となつて引き上げられた。過つ

て落ちたのであつたか、或は自殺したのか、原因は一切不明であつたけれど、一般の風評は後
者だと認定したのであつた。

寡婦ヨハナは、亡夫の遺産を整理した後、アデーレを伴つてヴァイマル(Walmar)に移つ
た。これはハインリッヒの死後一年を経た時であつた。當時ヴァイマルには、獨逸文學界の巨
星ゲエテを中心として、シュレーゲル兄弟、ヴァーラント、ハインリッヒ・マイエル等の詩人文
學者が雲の如く集まつてゐて、眞に一代の偉觀であつた。少なからざる收入を携へて、此文藝
の中心地に轉じたヨハナは、間もなく文士詩人達と交を訂して、諸人の好愛するところとな
り、文筆に親しみつつ、華やかな生活を送る事が出來た。然るにアルトゥールは約を重んじて、
たゞ獨りハムブルクに止まり、父の遺業を繼續したけれど、商業生活に對する彼の憎惡と嫌忌
とは、日を追ふて益増進した。惟ふに此時代は、彼の生涯のうちで最悲しい時であつたらう。
當時彼は陰鬱にしてほとんど絶望的な氣分のうちに生活してゐたと傳へられる。彼は屢書を裁
して母に送り、此業務から退くべき許可を乞ふた。此申込は初めは彼女の許すところとならな
かつたが、其衷情の切なるを認めて、遂にこれを聽許したので、アルトゥールは父の死後二年
にして、初めて囚はれたる生活から解放せられ、新たに學術研究の緒に就くべく、欣然として

ヴァイマールに赴いた。

然し學術を研究するためには、彼には素養が缺乏して居た。彼は準備としてまづ古典語を學ばなければならなかつた。そこで彼は、母の友フェルノーの勸告に従つて、千八百〇七年夏七月、ゴータ(Gotha)に赴いて、拉典語を其初歩から學習し、兼ねて獨逸語學及文學を學んだ。時に年十九歳であつた。彼の熱心は、著しく速かに彼の學力を進歩せしめ、數ヶ月にして今まで後れたものを取り戻したかの觀があつた、然し同年十二月、詩を作つて某教授を嘲つた事に累せられて、居ること僅かに半歳にして、最早ゴータを去らなければならなかつた。

ヴァイマールに歸來した彼は、こゝで古典語の學習を續けたが、母の許には居なかつた。かねてから意志と感情との疎通を缺ける母子の間は、この時愈緊張して來たからである。華美な主活を好むヨハナと憂鬱にして思索的なアルトゥールとは、其性質上相容れなかつた事は勿論重なる原因であつたらうが、母の素行に對しても、息子は大きな疑を懷いて居たのである。彼の『婦人論』(本書の巻頭)を讀む者は、母子の間の不和の原因を、此うちから見出さうと企てる。鬼に角、彼は専心に勉強したので、二年ならずして、大學に聽講すべき學力を得た。

千八百〇九年九月、彼は母より父の遺産の三分の一を分與され(利子年收約五十磅位)、去つ

てゲッティンゲンに學び、醫科に籍を置いた。彼はこゝに拾一年まで居たが、其聽講するところは、自然科學、解剖學、礦物學、數學、歴史等に亘り、後に至つて、論理、生理及人種學をも包含した。また閑時には、音樂を樂んで、笛と四絃琴とを學んだ。第三學期(一學期)には、彼はカント派の學者として有名なシュルツェ(Gottlob Ernst Schulze)の心理學及形而上學を聽講したが、哲學研究の覺悟を定めたのは此時で、シュルツェは彼に向つて、哲學を專攻するやうに、特にプラトーンとカントとを攻究するやうにと勸告した。彼自身が後年云つたところに従ふと、これは『賢明な』勸告であつて、自分がこれに従つた事を少しも後悔しなかつたのである。拾一年の四月には、彼はまたヴァイマールに於て、ヴァーランドに會つた。當時七十八歳の高齡に達して居た此老詩人は、恐らくヨハナの依頼によつてであつたらうが、初めは彼の哲學專攻を中止せしめやうとした。其時彼は斷乎としてかう答へた。『人生は困難な問題です。私はこれを考へて一生を送らうと決心しました。なほ暫らく會話がつゞいた後に、彼の性質を觀破した老詩人は改めて彼に云つた。『君の性質は分りました。哲學をおやりなさい!』後日ヴァーランドはヨハナに向つて、アルトゥールの『偉い人』になる事を豫言したと傳へられる。

千八百十一年の夏の末つた、彼はベルリン大學に轉じて、自然科學の研究をつゞけ、兼ね

てヴォルフの希臘文學、シュライエルマツヘル (Schleiermacher) の「基督教時代の哲學史」及フィヒテ (Fichte) の「意識の事實と智識ワイセンシヤフツレ」を聴講した。彼はフィヒテに對しては、『先天的の尊敬』を持つて居たが、其講義を聴くに及びて、何の得るところもない事を發見し、從來の尊敬は忽ち『輕蔑と嘲笑』とに變つて仕舞つた。彼はフィヒテの唱ふる「智識ワイセンシヤフツレ」を「智識ワイセンシヤフツレの虚リヤフツレ」(學と云ふ字のレールと虚無と云ふ字のレール) だと嘲り、『此學の創始者は、法螺吹で猿か道化者に過ぎないものであつて、其原型たるカントの深遠なる學說をボンチ畫的に誇張し、笑ふべきものにした』と罵つた。シュライエルマツヘルの講義も、彼にとつては『無思想の記録』に過ぎなかつた。かくの如く大學の哲學に失望したる彼は、自然科學と希臘羅馬の作品の研究とに従事し、殊に後者を讀むためには、毎日二時間を割いたが、これは後年になつてもなほ歇めなかつた。

かゝる間に、彼の思想は漸次に圓熟して來た。此時既に『意志と表象としての世界』の思想が彼のうちに發芽し初めたのである。千八百十三年の彼のベルリンに於ける手記には、『一つの著作——倫理と形而上學とを合一すべき一つの哲學が』彼の心のうちに生長しつつあることを認め、此二つを『これまで人々が分離したのは、人間を精神と肉體とに分つ如く間違つた事だ』

と書いてある。即ち後年の主著によつて築き上げられた廣大な哲學體系は、『母が自分の體のうちの子供の出來たの知らないやうに』彼の知らぬうちに、彼の内部に於ていつしか生長しつつあつたのである。

此年、彼はベルリンでドクトルの稱號を得やうと考へたが、ナポレオン軍の來襲が目睫の間に迫つたので、彼は戰禍を避けてドレスデンに走り、つゞいてヴァイマルに歸つた。然しこゝで彼はまた母と衝突し、退いてルドルフシュタットに赴き、此地で彼の處女論文『充足原因の四根に就きて』(Ueber die vierfachen Wurzel des Satzes vom zureichenden Grunde) を綴り、これをイエナ大學に提出して、十月に博士號を得た。此論文は同じ年の末に自費で出版され、ゲエテの注目と同感とを得たのである。

彼がゲエテを知つたのは、これより以前の事であつたが、此年の十一月ヴァイマルに歸つて以來、二人の間には可なり親しい交際が結ばれた。當時のゲエテの日記や書簡のうちには屢シヨーンハウエルの名があらはれて居る。ゲエテが二三年前ニュウトンの說に反對して、公にした自分の色彩論を、此若い哲學者に説明して聞かせたのは此時であつた。彼はゲエテの意見に共鳴を感じて、直ちに研究を此方面に向け、其結果は『視覚と色彩とに就いて』(一八一六)

となつてあらはれた。―彼自身の告白するところに依ると、彼はゲエテとの交際によつて非常に大きな信ずべからざるほどの利益を得たのであつた。偶然として高く持し、傲岸人に下らなかつた此哲人も、ゲエテに對しては最後まで敬意を持し、いかなる場合にも、彼を尊敬し嘆美する事を忘れなかつた。

ヴァイマールで起つた出来事の中で、彼にとつてもつと意味の深かつたのは、東洋學者フリードリッヒ・マイエルと相知つた事であつた。彼はこの人によつて、初めて印度哲學の要綱を知つた。人も知る如く、シヨームンハウエルの哲學は、印度思想の影響を受けた點が少くはないが、後年に於ける此成果は、此時マイエルによつて彼の心のうちに種子を下されたのであつた。印度思想と彼の哲學との關係については、彼自身かう述べて居る。『私は自身の開展のうちで最良い部分を、まづ直觀世界の印象につゞいて、カントの著述と印度の聖典との印象に、それからまたプラトーンに負ふて居る事を自白する』『私の學說の歸着するところは、あらゆる世界觀のうちで最古いもの、即ち吠陀の世界觀と一致する。然し、私が説くものが既に吠陀のなかに存在するかのやうに理解してはならぬ』。

此頃になつて、今まで緊張してゐた母子の間の關係は遂に破裂した。彼は千八百十四年の夏、

ヴァイマールを去つて、ドレーズデンに赴いた。ヨハナは其後二十四年間生存して居たが、二人はこの時以後に面會した事はなかつた。(尤も通信だけはヨハナの晩年になつてから取り交すやうにはなつた。)此破裂に關して、いづれが責を負ふべきかの問題は、こゝでは其儘にして置く。唯當時のヨハナを思ひ起さしめる材料を、アンゼラム・フォイエルバッハの『覺書』の中から取出して見やう。『シヨームンハウエル夫人、富める寡婦、博識ぶる人物。女流作家、多辯・巧妙且利發。真情なし。獨りよがり。稱讚の渴望。いつでも自分に向つて微笑してゐる。云々。』然しアルトゥール自身も圓轉滑達な人物でなかつた事は言ふまでもない。

ドレーズデンに於て出來た最初の述作は、曩に述べた『視覺と色彩とに就いて』(Ueber das Sehen und die Farbe)であつた。これは千八百十六年に出版されたが、其内容はゲエテの色彩論を基礎として、これに科學的研究を加へ、若干の修正を施したものである。然しゲエテは此修正を否として、シヨームンハウエルをも自己の學說の反對論者のうちに加へた。

千八百十七年、彼は遂に筆を執つて、柏林時代から胸中に醗酵しつつあつた彼自身の哲學體系を書き下した。此著述は彼の名著『意志と表象としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung)で總數四卷、外にカントの哲學に對する批評が附けてあつた。世界を以てわれら

の表象に外ならずとなす彼の思想、意志を以て萬物の根源と見做し、一切の現象はすべて意志の客観化であると考へる世界觀、並びに人生の苦惱の原因は、無窮に求めて足るを知らざる意慾そのものであるが故に、此苦惱から解脱せんが爲めには、意慾を根源から斷滅しなければならぬと説く厭世觀と解脱論とは、此主著の根本思想をなすものである。

此書の完成したのは、十八年の三月であつたが彼は其出版を書肆プロックハウスに託して、九月の末伊太利漫遊の途に上つた。従つて最後の校正は此國でなされた。印刷が豫定より後れたために、書物が市場にあらはれたのは、此年の十二月の末であつたが、扉には一八一九と印刷してあつた。一般の受けは、書肆自らが豫期して居たやうに、悪かつた。十七年後に著者が書肆に賣れ行きを問合せた時、其返事には『その多數は反古同様の價で賣り捌いたが、なほ若干は在庫して居る』とあつた。然し彼はかゝる不快を償つてなほ餘りある大なる慰藉をゲエテに於て見出した。十九年の三月、ネーブルスに於て彼が妹がら受取つた書簡に依ると、ゲエテは寄贈された此書を『大喜びで受取り、直ちに此厚い書物の頁を切り、いきなり読み初めた』が一時間の後、アデーレの許に書を寄せて、彼が此書の著者に對して『深く感謝して居る事を告げ、且此著全體は甚結構だと考へる』旨を傳へた。彼はまた『重要な場所を列舉して、『それを

アデーレや其他の人々に『讀み聞かせ、そして非常に喜んだ』相であつた。アデーレは更に附加して云つた『私の考へるところに依ると、ゲエテが眞面目にその人の作を讀んだ著述家は、あなた一人だと思ひます、そして私は喜ばしく思ひます』と。

初め彼が伊太利に向つて旅立つた時、ゲエテは當時伊太利に逗留中のバイロンに宛てた紹介狀を彼に與へた。ヴェニスで二人は一緒になつたけれど、彼は此紹介狀を利用しなかつた。彼自身の云ふところに従ふと、バイロンの前にはれる勇氣がなかつた爲めだとある。當時伊太利には三人の厭世家が居た、それは『バイロンとレオバルディと私とだが、それでも誰れも互に知り合ひにはならなかつた』と彼は書いた。

シヨールベンハウエルはヴェニス、フロレンス、ローマを歴遊して、古代の文物の研究と、古美術品の觀賞とに耽つたが、翌年七月ミランに來た時、妹からの書翰に接して、シヨールベンハウエル一家の人々が投資して置いたダンチッヒの或商館が破産した事を知つた。彼は倉皇として伊太利を去つたが、それでも途すがらヴァイマルにゲエテを訪れて、舊交を温めることを忘却しなかつた。ゲエテは此訪問を以て『相互の教訓』になつたと日記にかきつけた。

千八百十九年の七月には、彼はハイデルベルヒに居たが、大學に奉職しやうと思ひついたので

で、ハイデルベルヒ、ドレーズデン及ベルリンの三大學に求職したが、此要求はベルリン大學の容れるところとなつて、翌年の三月からプライベートドクター私講師として開講する事を許された。然し此經驗は失敗に終つた。それは聴衆がなくて、學期を終ることが出来なかつたからである。此直接の原因は、彼の講義時間とヘゲルの講義時間と同じ時刻であつたために、聴衆は全くヘゲルの吸収するところとなつた事に在る。當時ヘゲルは普魯西の哲學界の主權を握り、名聲天下に布いて居たから、シヨーパーンハウエルがこれと駢進し得ざる事は寧ろ當然でなければならぬ。殊に其學説は共にカントを源流としてはるるが、其思考の過程を全然別にしてゐるから、其歸結も全く別種なものになつた(例へば、本書の「歴史論」を見よ)。かゝる異説が一般に認められなかつたのも、また當然でなければならぬ。——兎に角、彼は講義に全然失敗して、千八百二十二年五月、快々として伊太利に旅立つた。

之に先立つて、二十一年の八月には、マルケット事件と云ふのがあつた。聊滑稽味のある事件であるが、シヨーパーンハウエルの性質を知るのに都合がよいから、こゝに擧げやう。——當時彼は、ニーデルラーグシュトラーセの四番地ベケルと云ふ寡婦の家の二間を借りて居たが、或日歸宅した時、彼の部屋の前にある小室(これは共同の部屋であつた)の内で、三人の婦人達が談話してゐるの

を見出した。シヨーパーンハウエルは甚しく躁音を嫌忌する性質であつたから、かゝる事のないやうにと、豫め貸主に通知して置いたのであつた。それにも拘らず、今三人の婦人の雑談しつゝあるのを見て、彼は不愉快を感じて退去することを彼等に要求した。其うちの二人は直ちに立ち退いたのだが、他の一人は彼の要求に應じなかつた。彼は再度要求したが、無益であつたので、矢庭に腰を捉へて、彼女を引き摺り出し、其品物をうしろから投げ出した。彼女がすぐにまた残した品物を取りに入つて來た時、彼は再び——今度は猛烈に且罵詈雑交を交へて——室外に押し出した。其はづみに彼女は倒れて絶叫した。此婦人は同宿のもので、カロリーネ・ルイーゼ・マルケットと稱し、年齢四十七歳、裁縫を職とするものであつた。

翌日彼女は、此一件を事實以上に誇張して、法廷に訴へた。シヨーパーンハウエルは、罵詈雑交の非行であつた事だけは認めたが、其他の行動は寄宿人としての正當の権利を行使したに過ぎないと主張した。此事件は六ヶ月の後、彼に有利な判決が下つたが、原告が控訴したので、訴訟は久しきに亘り、彼が伊太利や瑞西を旅行しつゝある間に、漸く決定して、シヨーパーンハウエルは二十ターレルの罰金に處せられた。然し彼の不幸はこれだけではやまなかつた。マルケットは彼の留守中に更に一策を案出して、彼に倒された結果、一腕の自由を失ひ、其他の組織も悪影響

を受けた爲めに、仕事をする事が出来なくなつたから、賠償として相當の年金をもらひたいと云ふ事を伯休の法廷に訴へた。此訴訟にもシヨールベンハウエルは敗れて、三百タアレルの訴訟費用を負擔し、且年々六十タアレルを扶助金として此婦人に贈與すべく命ぜられた。それは千八百二十四年十月のことであつた。

かゝる間に彼は、千八百二十二年から二十三年にかけての冬をフローレンスで送り、春になつてから南に進んだが、六月にはミュンヘンに歸來した。こゝで彼は疾に罹り、暫らく療養の上、湯治のためガスタインに轉じた。

千八百二十五年五月、彼は伯林に歸來して、マルケト事件の判決を、彼の有利になるやうに轉覆しやうと努力したが無効であつた。翌年五月最後の判決は下されて、彼は矢張六十タアレルを毎年マルケトに贈與しなければならなかつた。彼女は其後二十年も生存したと傳へられる。二十六年の七月から、彼は再び伯林大學で講義を開いたが、此度もヘエゲルと同じ時間であつて、前回と同じく失敗に歸した。彼は其著作の到るところに於て、ヘエゲルを攻撃してゐるが(本書『讀書と書籍』『觀相論』『歴史論』等を見よ)彼に對する憎惡の一因は、講義の競争で敗北した事にあるかも知れない。

此第二次伯林滞在の間に、彼は先年の論文『視覚と色彩とに就いて』の拉典譯を公にし、又西班牙人グラーションの『處世の神託と處世術』を其原語から獨譯したが、これは彼の死後フラウエンシュテートによつて發行された。

彼は自己の生活に夥しい不満を懷きながらも、千八百三十一年まで伯林に居た。此年伯林ではコレラが猖獗を極めたので、恐れて彼はマイン河畔のフランクフルトに移つた。其後しばらくマイハイムに居たが、間もなく(一三八)フランクフルトへ歸つて來て、遂にこゝを永住の地と定めた。惟ふにフランクフルトが嘗つてのダンチッヒの如く共和制であつたことも、此選定の一因を成したであらう。かくして彼はもう二度とは伯林の土を踏まなかつた。

シヨールベンハウエルが、こゝで第一に書いたものは、『自然界に於ける意志に就いて』(Ueber den Willen in der Natur)であつて、これは一八三五年に成り、翌年公刊されたものであるが、彼の主著にあらはれた意志説を、自然科学のあらゆる方面から證明したものであつて、彼自身はこれを其學説の『焦點』と呼んだ。

千八百三十八年、諾威のドロントハイムの學士會(アカデミ)は、賞を懸けて『人間の意志の自由は、自意識より證明ざるゝや否や』と云ふ問題に對する解答を求めたが、彼は此懸賞に應募して、

『人間の意志の自由に就て』(Ueber die Freiheit des Willens)と云ふ論文を提出し、賞を得て、此學士會の一員となつた。

つゞいて彼はコーペンハーゲンの王立學士會の懸賞問題たる『道德の淵源・根柢は、意識(又は良心)のうちに直接に存在する道德觀念のうちに於て、及この觀念から生ずる其他の道德的根概念の分解のうちに於て求めらるべきか、或は他の認識根據のうちに於て求めらるべきか』に對して論文を書き『道德の根柢に就いて』(Ueber die Grundlage der Moral)と題し、必らず入選する事を期して提出したが(一八四〇)、豫想に反して丁抹の學士會はこれを落選せしめた。其理由とするところは、提案に對する理解が缺けて居ると云ふ事と、偉い哲學者(ロイヘケル)を取扱ふ方法が甚しく無禮だといふ事であつた。此不當な批判は、いたく彼を激昂させた。翌年此二個の論文は、『倫理學の兩根本問題』(Die beiden Grundprobleme der Ethik)と題して出版されたが、彼は後の論文にはわざ／＼『丁抹學士會落選』と云ふ言葉を添へ、且此書の序文に於て、丁抹學士會と其所謂『偉大』なる哲學者とを嘲笑し痛罵した。彼は實際、死に至るまで此學士會の彼に加へた無禮を怒つて居た。

彼の主著『意志と表象としての世界』は依然として賣行が悪かつた。従つて彼が大増補を加へて再版させやうとした時も、書肆は非常に思案した後、著者に對する報酬は、決定しないで置くと云ふ條件の下で、漸く承諾したのであるが、第一巻は僅かに五百部、第二巻は七百五十部を印刷したに過ぎなかつた。然し此増補版(一八四四)の賣れ行きは、依然としてはかばかしくなかつた。

千八百四十七年には、博士論文『充足原因の四根に就いて』が大訂正と大増補とを加へられて再版せられ、千八百五十一年には『補説と追加』(Parerga und Paralipomena)が出版された。此書は彼が五六ヶ年を費して著述したものであつて、彼の著述中で最廣く讀まれて居るものであるが、當時はいづれの書肆も、これが出版に指を染むるものなく、彼の最初のそして最熱心な弟子フラウエンシュテートの多大な盡力によつて、これが出版書肆を伯林で見出すことが出来たけれど、それは著者に對する無報酬を條件とするものであつた。實際シヨールペンハウエルは此出版によつて、單に此書を十冊だけ書肆から贈與されたにすぎなかつた。

結婚の問題も折々は、彼の念頭に上つたらしく、且關係した婦人も少しはあるやうであつたけれど、本當に結婚しやうと云ふ十分の覺悟が彼に生じないうちに、彼はいつしか自分を老獨身者の群れのうちに見出したのである。何故に十分の覺悟が出来なかつたかに就いては、小

い色々の原因もあらうが、主因は彼の人生觀のうちにある。これは本書を讀む事によつて、充分に理解されるであらう。

彼の生涯の最後の九年間には、彼は別に新しい著述をなす事なく、今まで公にしたものの改版にのみ従事して居た。『自然界に於ける意志に就いて』は、千八百五十四年に其二版を出したが、これも増補せられ、且大學の教授連(哲學科)に對する痛罵が附け加へられた。二月の後は『視覺と色彩に就いて』の第三版が出で、次いで千八百五十九年には主著の第三版、千八百六十年に『倫理學の兩根本問題』の二版が出た。

フランクフルトでは、初めは彼は有名な閨秀作家ヨハナ・ショーペンハウエルの息子として知られるに過ぎなかつたが、主著の第二版を出した頃から、漸次に景慕者を得、其左右には少數ながら熱心な弟子達が集まつた。彼は今や極めて規則的な生活を送り、愛犬を座側の伴侶として、靜かに晩年を暮らして行つた。

千八百六十年の二月、食後の散歩の折に、突然心悸動を感じ、其爲めにほとんど呼吸する事が出来なかつた。此症狀は漸次に開展して行くので、ドクトル・グヴァンネルは、彼の習慣とする冷水浴を廢し、且寢床の中で朝食を採るやうに勸告した。然しショーペンハウエルはこれ

に従はなかつた。九月十八日の夜、彼はグヴァンネルと談つて、伊太利へ今一度行きたいと云ふ希望を述べ、『パレルガ』に重要な増補をしなければならぬから、今死ぬのは残念だと語り、且彼の著述が極めて遠隔な土地に於て、暖かき歓迎を受けてゐる事をよろこんだ。かやうに熱心でまた溫籍な態度を、グヴァンネルは未だ嘗つて此哲人に於て見た事はなかつたと云ふ。越えて三日、ショーペンハウエルはいつもの如く起床して、例の通り冷水浴をし、朝食を採つた。従僕は朝の空氣を入れる爲めに、窓を開いて退いた。暫らくしてグヴァンネルがやつて來た。そして老哲學者が長椅子の隅にもたれて居るのを見出した。その顔にはいつもの通りの表情が浮んで居た。そこには何等の苦悶の痕跡もなかつたのである。彼は自分の希望した通り、何等の苦痛なくして長逝したのであつた。

彼の遺骸は、二十六日エヴァンゲリストの儀式で葬られた。平たい墓石の上には、只 Arthur Schopenhauer とのみ刻まれて居る。

* * * * *

筆者曰。此小傳を註すにあつて、筆者が参照したものは、ケーベル先生校訂の『パレルガ』の巻頭にある同先生の Schopenhauers Leben und kulturhistorische Bedeutung. スムットライプラーの

シヨーンハウエル小傳

Essays of Schopenhauer の巻頭と彼の Biographical Note 及 W. Wallace: Life and Writings
of Schopenhauer 其他二三の哲學史をみる。

論文集

シヨーンハウエル著
佐久間政一譯

婦人論

シルレルの詩『婦人の品位』は熟慮の作であつて、アンライイゼ對偶とコントラスト對照とによつて能く人を動かすけれど、これにも勝つて婦人を眞に讚美するものは、私の考に依ると、ジュウ(一七六四—一八四六佛國の著述)の述べた數語である。曰はく『婦人がなければ、われらの生活の始めに助けなく、其央には喜びなく、其終りには慰めがなからう』と。同じ事をバイロンは其作『サルダナバル』の第一幕第二場で、より感傷的に云ひあらはした。

『人間の生命のそもその初めは、婦人の乳房から湧き出でざるを得ない。おんみの最初の小さい言葉は、婦人の唇から教へられ、おんみの最初の涙は、婦人によつて抑へとどめられた。そしておんみらの最後の吐息は、あまりに屢一人の婦人の聞いてゐるところで吐き出された。男性の人々は、嘗つて自らの統率者であつた人の最後の時間に侍する賤しきつとめを忌み避けた時に』

此二者の言葉は、いづれも婦人の價値に對する正當な見方をあらはして居る。

既に婦人の形の外觀が、婦人の精神的ならびに肉體的の大なる仕事に適せざる事を示して居る。婦人は人生の債務を、行爲することに由らないで、受苦することによつて償却するのである。分娩の苦痛、小供の世話、夫に對する服従——夫に對しては婦人は常に忍耐の強い・快活な同伴でなければならぬ——などがそれである。最激烈な悲哀と歡喜と、そして力の強烈な表出とは婦人には授かつてゐない。却つて其生活は、男性のそれよりも本質的により幸福であるとか、より不幸であるとか云ふことなしに、より靜かにより目立たず、そしてより穩かに送られなければならない。

われらの最初の小兒期の養育者及教育者として、婦人が其役目に適合する所以は、婦人それ自らが小供らしく、愚かで、且近視眼的であつて——一言で云ふと、眞の人間たる成人(性男)と小供との中間の階段に立つものだからである。試みに少女が毎日毎日小供と戯れ、踊り、歌つて暮らす有様を見よ。そして一人の男が、よい心掛を持つてゐたら、此位置に置かれた時、いかなることをなし得るかを想像したまへ。

自然は少女に向つては、戯曲論に所謂クナルエフクト(花火の如くばつと見物の視を狙つて、聽を一時的に目ざます効果) 数年の間——残餘の歳月を犠牲にして——充分な美と魅力と豊滿とを與へ、此期間に或男性の空想を把握して、自己の世話を、一生涯の間或何等かの形式で正直に引き受けさせる。男性を動かしてこゝに至らしめるには、然し單なる理性的の熟慮だけでは十分確實な保證をすることが出来ないやうに見える。従つて自然はその創造物の他の一切に於てなす通りに、婦人にも、その生存を確實ならしめるに要する武器と器械とを、必要な期間だけ給與する。即ちこの場合にも、自然は相變らずの節儉的の處置を採るのである。雌蟻が交接の後、もはや餘計になり且産卵に對して危険な翅を喪失する如く、婦人も通例、一二回産褥についた後には其美を失ふものである。これ恐らく同一の理由からであらう。

此故に若い婦人は、心の中では、家庭的の或は其他の實務的の仕事、第二次的のものとして考へ、進んではまた純然たる戯れだと思惟する。彼等が、唯一の眞面目な仕事として考へるのは愛とか、男性を擒へる事とか及これに關聯せる仕事、即ち化粧舞踏の類である。

すべて事物は、それが優秀完全であればあるほど、成熟に達するのが遅々たるものである。

男子は二十八歳以前には、其理性と精神能力との成熟に達することはほとんどあり得ないが、女子は十八歳を以て成熟する。然しながらこれに相當して女子の理性なるものは頗狹隘なるを免れぬ。此故に婦人は其一生を通じて子供こどもであり、常に最近のものばかりを見、現在に執着し、事物の外觀を其真相と考へ、最重大な事件よりも瑣末な事柄を好むのである。

理性とは則ち、その力によつて人間が動物の如く單に現在にのみ生きるのではなく、過去をも未來をも通觀し熟慮するものであり、人間の先見・懸念・及屢起る憂悶の如きはこれによつて生れる。婦人は其理性が薄弱であるから、上述の事が齎らす利益と不利とにあづかることが、男性よりもすつと少ない。寧ろ婦人は精神的近眼者であつて、その直覺的理解力は、近いところを鋭く見るけれど、其狹隘な視野のうちには、遠距離のものが入つて來ない。それ故に眼界に存せざる一切のもの、過去又は未來に關するすべての事は、女性の心に憩えること、男性の心に作用するよりも遙かに強い。男子にもあるが、然し婦人に於てすつと屢發見せらるる——往々にして狂氣に近い——濫費癖は、此理由から生ずるので、彼等は心のうちに惟へらく、金錢を儲けるのは男子の職分であり、これを出來得るなら夫おつとの生存中に、或は少くとも夫の死後に於て蕩盡するものが自分達の役目であると。夫が獲得したものを、家計の爲めに、彼等に渡すといふことそれ自

身が、既に彼等の此信念を強める所以となるのである——上述のすべての事は、勿論多くの不利益を齎すけれど、然しまた利益なところもある。即ち婦人はわれらよりもより深く現在に没頭し、従つて苟も忍び得らるゝものである限り、現在をわれらよりもよりよく享樂すると云ふ長所を持つて居る。婦人は心勞せる夫を休めるために、——必要な場合にはまたこれを慰藉するため、一種獨特の快活さを所有するものであるが、此快活は上述の長所から生れて来る。

古への日耳曼人の風にならつて、困難なる事件に當つては、婦人にも相談するのは、決して非難すべき事ではない。何となれば婦人の事物理解法は男子のそれとは全然別であつて、殊に彼等が目的への最捷徑路を行くを好み、最近いところ存する事物を眼中に置く點に於てわれらとは異なるからである。われらは最近いところに存する事物を、それがわれらの眼前に存するといふことに由つて、大抵は觀過し去るもので、かゝる折には再び手近なそして簡単な考へ方を得るために、眼前に存在するものまで連れ歸られる必要がある。更らにこれには次の事が加はる。婦人はわれらより疑もなくより冷靜であり、従つて事物に就ても、事實存在する以上に多くのものは見ないのである。然るに男子は、其激情が動かされると、やゝもすれば存在するものを擴大し、或は想像的のものを附加する傾を有する。

婦人が男子よりもより多く憐憫を有し、従つて不幸な人々に對して、より多くの仁愛と同情を示すけれども、正義・正直・誠實等に於ては男子に劣る事も、同一の源泉から導いて考へ得る。何となれば婦人の理性が弱い結果、現在のもの、具體的のもの、直接に現實的なものが、その力を彼等の上に行使して、此力に對しては抽象的思想や、常在的格言や、堅い決心や、一般に過去・未來或は目前に存在せざるもの・遠隔なものに對する顧慮は、ほとんど多くなすところがないのである。されば彼等は徳そのものに對する第一次の主要な性質を持つてはるるが、これを展開せしむるに往々必須の器械たる第二次的の性質を缺如する。此點に於ては、婦人は肝臟を持つてはるるが、膽嚢を有せざる生物と比較され得る。——（私の『道德基礎論』第十七節を参照のこと）——此故に婦人の根本的缺陷として「不正」と云ふ事が發見される。此缺陷はまづ理性と熟慮とに於ける上掲の缺乏から生れ出でて、彼等がより弱きものとして、「力」ではなくして「狡計」を頼みとするやうに自然から定められて居る事によつて助長される。彼等が本能的の譎詐を有し、虚偽に對する亡ほしがたき嗜癖を持つのは此理に因る。蓋し自然は、獅子に爪と齒とを、象と猪とに牙を、牛に角を、烏賊には水を濁らす墨汁を與へたやうに、婦人に對しては、その自己防衛のために、「伴はる力」を賦與して以て、これを武裝した。即ち

自然は、男性に體力及理性として與へたすべての力を、女性にはかゝる天賦の形でもつて授與したのである。虚伴いっけいは夫れ故に婦人には生れつきのものであり、従つて賢女と愚婦との區別なく、婦人にはほとんど同程度に於て具はつてゐる。されば婦人が、あらゆる機會に際してこれを行使するのは、上記の動物が攻撃を受けた際に、直ちに其武器を使用すると同じく、極めて自然な事であつて、或程度までは自己の権利を行使するのだと感ずる。此故に全く誠實な・偽りなき婦人はおそらくあり得ないものであらう。だから彼等は他人の虚偽いっけいを極めて容易に洞観する。従つて彼等に對しては伴らうと試みざるが得策である。——上述の根本的缺陷ならびにその添加的缺點から、虚偽・不貞・裏切り・忘恩等が生れて來る。法廷に於ける偽證は、男子よりも、屢、婦人のなすところである。一體婦人の宣誓なることが認めらるべきものであるや、否やが抑の問題であらう。——何の不自由もない貴婦人が、商店で舐引する事實は、到るところで折々繰返されるではないか。

若い・強壯な・美しい男性は、人類の繁殖のために、自然から呼ばれたもので、種の退化を妨ぐことが目的である。これは自然の牢乎たる意志であつて、その表現は婦人の激情である。

此法則は、其歳時の古きことと力の強きことに於て、他の一切の法則を凌駕する。夫故に自己の権利と利益とを此法則に矛盾するものに置く人は殃わざはひである。此人は何を云つても、また何を行つても、最初の重要な機會に當つて、情けなくも滅茶滅茶に破碎されるであらう。何となれば婦人の秘密な・表はれてはゐない・無意識的な・生得的の道徳はかう告げるからである。「われらは、個體たるわれらの爲めに、少しばかり圖るところがあるといふことによつて、種族に對する権利を得たやうに誤想する如き人々を欺く権利がある。種族の構成と、従つて其幸福とは、われらから出づる次の時代によつて、われらの手のうちに置かれてあり、われらの世話に委ねられてゐる。われらは良心的にわれらの義務をやつて行かう。』婦人は然し此最高の原則を、決して抽象的に意識してゐるのではない。單に具體的な事實として意識するだけである。そして、此原則に對しては、機會が來た時に、行爲を以て發表する外に、何等の發表方法も持つて居ない。彼等が此行爲をなすに當つては、其良心は、われらの推測するよりも、ずつと多くの平靜を、彼等に與へる。これは蓋し個體に對する義務を損傷することによつて、種族に對する義務が——種族の権利は個體の権利よりずつと大きい——によりよく盡されると云ふ意識が、彼等の心の極暗い一隅にあるからであらう。(此事については『性愛の形而上論』を参照せよ)

詮するところ、婦人はたゞ種族繁殖の爲めのみで生存するものであり、其天分は全く此點に存するのであるから、彼等は個體の爲めよりも種族のために、より多く生活し、個體的事件よりも種族に關する事件をより眞面目に考へる。此事はまた婦人の全性質と全行爲とに或輕佻な色彩を與へ、男子の傾向とは全然異なつた傾向を授ける。結婚生活に於て随分屢見られる否・ほとんど通常と云つてもよいほどの不和合は、かゝる點から發生するのである。

男子と男子との間には、無頓着といふ事が生得的に存するけれど、婦人間には生れながらにして既に相互の敵意がある。所謂商賣敵がたきの憎惡は、男子にあつては其時其折の組合的關係にのみ限られて居るが、婦人にあつては、此性全體を包含して居る。何となれば、彼等はすべて唯一つの商賣しか持たないからである。彼等は、街上で行きあつてすら、互に相見ることゲルフ黨とギベリン黨の如くである。(前者は伊太利中世紀の皇帝反對黨にして法王を切け、後者は其反對黨で互に甚しく敵視し合つた。譯者註) 初對面の二人の婦人は、男子がこんな場合になすよりも、明らかに、より多くの嬌飾と虚伴とを以て相對する。従つて二人の婦人間の御世辭は、男子間のそれよりも遙かに滑稽である。また男子は、めした目下のものに對してすら、矢張り若干の遠慮と人情とを以て話をするけれど、高貴の婦人は、

身分の低い(然し自分の召使ではない)女と話すに當つて、大抵は倨傲にしていやしむべき態度を採るもので、ほとんど見るに忍びざるものがある。これ蓋し婦人にあつては、階級上のすべての區別は、男子に於けるよりも遙かに不定であり、より速かに變化しまたは消失する事から來るのであらう。また男子にあつては幾百の事項が考量のうちに入れられるけれど、彼等にあつては唯一つの事——いかなる男子の心を獲たかといふ事のみが決定を與ふるものであるからであらうし、更らにまた彼等の仕事の一面的であるために、男子よりも相互に甚近く接して居るので、階級によつてわけたる相互の區別を顯著ならしめようと欲する點からも出て居やう。

身長せうの低い・肩幅かみの狭い・臀おしりの大きな・脚の短かい連中(女性のこと)を『美しい性』(女性的美稱)などと命名するのは、男の知力が性慾にくらまされたからこそ出來たので、女性の美全體は實は此性慾のうちうちに存するのである。これを『美しい性』と呼ぶよりも、『非審美的な性』と名づけた方がずつと正當であらう。音樂に對しても、詩歌に對しても、或はまた造形美術に對しても、彼等は實際何等の感じも受納性も持つて居ない。彼等がこれを有するやうな振りをするなら、それは他人の氣に入らんがための單なる人眞似に過ぎないのである。兎に角上述の事は、婦人

が或事物に純然たる客觀的參與をなすことを不可能にする。私の考へに依ると、此理由はかうである。男性は何事に於ても、事物を直接に——或は理解により、或は征服することによつて——支配せんと努力する。然し婦人はいかなる時、いかなる處に於ても、單に間接の支配を、夫を通じてするやうに定められて居る。そして婦人は夫丈^{ちつと}けを直接に支配する力を持つ。されば婦人が一切の事物を、たゞ夫^{ちつと}を得る手段としてのみ見る態度は、婦人の天性そのものうちに根柢を持つて居る。婦人が他の或事に關與するのは、實はいつでも見せかけであり、また單なる迂路にすぎない。その終極するところは呈媚であり、模倣である。さればルソオも既に云つた。『婦人は一般にどの藝術に對しても何等の愛を持つて居ない。また何等の理解もない。そして彼等は少しも天才を持つてゐない』(ダランベルへの書簡)と。例へば音樂會やオペラや演劇などで、婦人達の注意の方向と方法を觀察するがよい。そして最大傑作の最立派な個所に於ても、其駄辯を繼續する小供らしい無邪氣さを見よ。若し、古代希臘人^{ギリシヤ}が婦人を觀劇に加らせなかつたと云ふ事が眞實であるとすれば、彼等は尤千萬な事をしたのである。かうしたら、劇場で少くとも何か聞えるであらう。現今では『婦女達は教會の中にて黙すべし』といふ箇條に(哥林多前書、一六ノ三)、『婦女達は劇場の中にて黙すべし』といふ箇條を加へるか、或は後者(四にあり)——譯者註

を前者にかへて、大文字で以て上幕^{おひさま}の上に書きつけるのが適當であらう。——婦人のうちで最もすぐれたものも、美術方面で、眞に偉大且純正で、また獨創的なものを制作することが出来なかつたし、又一般に或永久的價值のあるものを出すことが出来なかつたといふ事實から考へると、われらは婦人から前述以外のことを豫期する譯には行かない。この事實は繪畫に關して最顯著である。繪畫の技法は男性に適すると同程度で女性に適するものであり、従つて婦人達も熱心に繪畫をやつては見るが、然し彼等は只一つの傑作すら示さないのである。これ實に、婦人には、繪畫の直接に要求する「精神の客觀化」が缺けてゐるからである。彼等はいかなる場合でも主觀的に陥つてゐる。此缺陷から、普通の婦人は、繪畫に對する本當の受納性すらないと云ふ事が生れて来る。何となれば、『自然は飛躍をしない』からである。ウアルテ(フアン・ウアルテの醫者で著述家。一五二〇—一五九〇、馬德里)も三百年前から有名な其著『科學に對する頭腦の試験』に於て、一切の高等な能力は婦人にはないと斷じた。個々の部分的な除外例は、事實全體を變更することは出来ない。大局から見ると、婦人は最徹底なそして最治しがたき俗物であり、またいつまでも俗物たる境涯を脱し得ざるものである。それ故に、妻が夫の身分と稱號とを共有すると云ふ極めて不合理な社會組織に於ては、妻は夫の卑しむべき名譽心に不斷の刺戟を與へる。婦人が

かう云ふ性質を持つてゐるので、彼等が宰配を振つたり、音頭を取つたりすることが、近代社會の腐敗を醸すのである。婦人の社會的の位置をきめるに最よい標準は、ナポレオン一世が『婦人に階級なし』と言つた言葉である。其他の點に就いてシムフォールはかう云つてゐるが、これも正しい。『婦人はわれら自身の弱點とか痴愚なところとかと取引するやうに出来てゐるが、われらの理性と交渉するやうには出来てゐない。彼等と男子との間の同感^カは表皮的なもので、それは精神や感情や性格には觸れない。』女性は所謂セックス・セクイオール(第二等の女性的のセックスの義)で、いかなる點に於ても、人後(男性の後の義)に立つ。第二次的の性である。夫故に人は婦人の弱點を大目に見てやらなければならないが、これに對して過度に尊敬を拂ふのは滑稽であり、彼等自身の眼中に於て、われらの價值を自ら貶す所以である。自然が人類を二つに分けた時、これを眞二つに等分したのではなかつた。兩極性のものすべてにあつては、積極と消極との區別は、單に質的なばかりではなく、また實に量的なものである。——希臘・羅馬の人々及東方の諸民族は、まさしく斯の如き見方で、婦人を見たもので、かくして彼等は婦人に適當する地位を、われらより遙に正當に認識した。われらは夫の基督教^カ的・日耳曼的愚蒙の最上の産物たる古代佛蘭西の慇懃と愚にもつかぬ女人崇敬とを持つた。然しこれは唯、かのベナアレスの神聖な猿

を往々にして想起せしむる位に、婦人を横柄に且無遠慮にしたに過ぎぬ。此れらの猿は、自己が神聖視され且自己に對する殺傷の禁斷されてゐるのを知つて、自己の欲するあらゆることが許されると考へて居る。

西方諸國の婦人、特に所謂『淑女』(英レデー獨ダーメ)なるものは、其居るべからざる地位、即ち間違つた地位に居るものである。如何となれば、古へから第二流のセックスと呼ばれた婦人は、決してわれらの尊敬と崇拜との對象たるに適せず、男性よりも高く頭を擡げ、男性と同一の權利を持つに相當しないからである。われらは、此間違つた位地に置かれた結果を十分に見ることが出来る。従つて歐州に於てもまた、人間の第二號たる婦人には、それに相當する地位を指定し、現在の亞細亞全體が笑ふばかりではなく、過去の希臘羅馬も齊しく嗤笑したらうと思はれるかの『淑女』なるものに、終結をつけさせることが願はしい。其結果としては、社會的・公民的並びに政治的の諸關係に於て、計算し得ざるほどの利益が生れて來やう。そして「サラ」族法典の如きは、解り切つた贅物として、全く不必用であらう。歐州の眞の意味の『淑女』なるものは、全然生存すべからざる生物である。然し主婦・及主婦たらんとする少女はなくてはならぬ。後者は従つて、倨傲尊大にならぬやうに、而して家族生活と服従とに向くやうに教育されなけ

ればならぬ。歐羅巴に所謂「淑女」なるものが存在するといふ事は、女性中の大多數を占むる低い身分の婦人達を、東洋に於けるより遙かに不幸ならしめる原因である。バイロン卿すら云ふ。「古代の希臘人の間に於ける婦人の状態を考へて見ると、それは充分に都合よきものであつた。騎士及封建時代の蠻風の殘物たる現今の状態は、人工的でまた不自然である。彼等は家庭に留意しなければならず、また衣食を十分に供給されなければならぬけれど、然し社會に混る必要はない。また宗教に於ては充分の教育を受けなければならないが、詩も政治論も讀む必要はない。たゞ敬神と料理とに關する本を讀めばよいのだ。音楽と描畫と舞踏と、折にはまた少しの園藝と耕作とがよい。私はエピルスで婦人が、立派な成効を以て道路を修繕するのを見た。これらの仕事は、枯草を作つたり、牛乳を搾ると同様に、婦人の手でやられてはならぬ理由があらうか？」と。

歐州の結婚法は婦人を男子と同等の價值あるものと認める。夫故に此法は間違つた前提から出發してゐる。一夫一婦制の歐羅巴にあつては、「結婚する」とは、男子が自己の權利を半減して、自己の義務を倍加する意味である。然し本當ならば、法律が婦人に男子と同様の權利を

認容したと同時に、また男子と同様の理性をも婦人に附與しなければならなかつたのである。法律が婦人に承認する權利と尊敬とが、自然的な割合を越えれば越えるほど、實際に此特典にあづかる婦人の數は減じて行く。そしてこれら少數者に與へた特權と同量のもものは、他の多數者の自然的に有する權利から剝奪されるのである。何となれば、一夫一婦制と、それに附隨する結婚法とが、事實の眞に反戻して、婦人を男子と全く等價なものとして認め、これを基礎として婦人達に賦與した反自然的に婦人に便利な地位は、聰明にして深慮ある男子をして、かゝる大なる犠牲を供し、かゝる不均等な契約を結ぶ前に（現行制度の下の結婚をする前に）の義（甚屢躊躇逡巡せしむるからである）。一夫多妻主義の諸民族にあつては、いつれの婦人も扶養されてゐるが、一夫一婦制の民族にあつては、結婚せる婦人の數は少なく、扶助者を有せざる婦人が澤山残つて居る。彼等は上流社會に於ては、無用の老嬢として座食し、下層社會にあつては、不適當な困難な仕事を課せられるが、さもなくば賣春婦となるのである。後者は、喜びと名譽とを缺く生活を送るのであるが、かゝる世態にあつては、男性を満足せしむる爲めに必要缺くべからざるものであり、夫故にまた、既に夫を持ち、又は夫を持つことを期待し得る如き幸運な婦人達を、男子の誘惑に對して保護する特殊の目的を持てる公認された一階級として現はれて來る。倫敦だけでも此種

の婦人は、八萬人を算する。これらの人々は、一夫一婦制の爲めに最恐ろしい不運に陥つた婦人でなくて何であらう。實際彼等こそ一夫一婦主義の祭壇に供せられた人身御供でなくて何であるか？ こゝに述べられた・かゝる悪い境遇に陥つたすべての婦人達は、虚飾と尊大とを持つてゐる歐洲の『淑女』に對する避け難い對當物である。されば女性を全體として考へれば、一夫多妻主義の方が實際彼等に有利である。他の方面から言つても、其妻が或慢性病に罹つて居るとか、石婦うますぶであるとか、或は段々に彼の妻としては老い過ぎて來た時に、更らに第二の妻を迎へてはならぬと云ふ事は理性的には認められぬ。モルモン宗が多くの歸依者を得たのは、反自然的な一夫一婦の撤廢といふ事が多くの共鳴を見出したに因るらしい。——且又婦人に不自然な權利を與へたことは、延いてまたこれに不自然な義務を課することとなつた。此義務の背反は婦人を不幸ならしめる。多くの男子に對しては、階級とか、財産とかに對する顧慮は——それらに附帶する著大な條件がない限り——結婚を懲罰する資料とはならない。彼等は妻を選択するのに、妻及其生むべき子供達の運命を確保する他の條件に依らうとする。さて此條件がいかに正當で合理的でまた事態に適合して居ても、婦人自らが結婚のみによつて與へられる不相當の權利を放擲してこの條件に同意するならば、結婚は市民社會の基底をなすものであるから、此

同意のために或程度まで自分自身の名譽を失ひ、悲しむべき生活を送らなければならなくなる。蓋し人間の天性は、他の人々の意見の上に、その意見には全く相應ふたひしからぬ重い價値を置く習はしを持つからである。然し婦人が同意しなければ、止むを得ずして自己の嫌忌する男子に嫁するか、さもなくば老嬢として枯凋する危険を冒す事になる。これ適婚期間は甚短かいからである。歐洲の一夫一婦制に就いてのかゝる方面に關しては、トマジウス(一六五五—一七二二)の該博な『蓄妾論』は、次の事實を教ゆるが故に、充分に讀まるべき價値を持つ。この論文に據れば、蓄妾はすべての文明民族の間に於て、またルテルの宗教改革に至るまでのすべての時代に於て、許されたる——否或程度までは法律的にすら承認された制度で、いかなる不名譽をも伴隨しては居なかつたが、此制度がかゝる階段から突き落されたのは、單にルテルの宗教改革の爲めであつた。而して此制の撤廢は、僧侶の結婚を是認する爲めの更らに一箇の手段として承認された。茲に於て舊教側も、此點に於て後れを取るわけには行かなかつた。

一夫多妻の是非に就いて議論する必要は全くない。これは到る處に存在する事實として考へらるべきものであつて、問題はたゞ其調整をいかにすべきやである。一體何處に眞の一夫一婦制を實行する人があるか？ われらすべては、少くとも暫くは、——然し大抵は常に、——一

夫多妻の生活をしてゐるではないか？ 斯くの如く男子は皆多數の婦人を必要とするものだから、多くの女性を世話するのは、男子の自由であり、或は進んで男子の義務であるより、より以上に正當な事はない。かくして婦人は、從屬的のものとして其正當なる且自然的なる立脚地へ引戻され、歐州文明と基督教の日耳曼的愚劣さの怪物たる、滑稽にも尊敬と崇拜とを要求する所謂『淑女』は世界から其姿を消し、只『婦人』のみが存在することとなり、今日の歐羅巴に充満する、不幸な婦人は最早全く其跡を絶つに至るのである。

ヒンドスタンに於ては、いかなる婦人も決して獨立ではない。摩努の法典第五章第四百八節によつて、いづれの婦人も父或は夫、兄弟又は息子の監督の下に立つて居る。寡婦が夫の屍と共に自焚するのは無論見るに忍びざる事であるが、夫が子供の爲めに働くといふ事で自ら慰めつつ、其全生涯に亘つての撓まざる勤勉によつて獲得した財産を、夫の死後、寡婦が其情夫と共に蕩盡するのと同じく見るに忍びざる事ではないか。『中間が最幸福である』——原始的の母の慈愛なるものは、動物に於ても人間に於ても、純然として本能的である。従つて子供が肉體的に補助される必要がなくなると共に此愛情は消失する。此時以後に於ては、習慣と理性とに

基づく母の愛が原始的のそれに代つて現はれなければならぬ。然しかゝる愛は往々にして出現しない。特に母たる人が其夫を愛さなかつた時に然りである。父の子に對する愛は、これと別種なもので、すつと耐久的の性質を持つ。これは子供の内部に於て自らの最深い自我を再認するからで、夫故に形而上的の起源を有する。

地球上の、ほとんどすべての新舊民族——例へばホッテントットに至るまで——に於て、財産は男子の子供にのみ傳はるが、歐羅巴だけは此例に外れて來た。然し貴族は別であつた。——夫が大なるそして永い勤勞と辛苦とによつて辛うじて得た財産が、婦人の手に落ちると、其淺常識のために、僅かの間に蕩盡され又は浪費されるやうなことは、極めて見苦しい事件だが、然し屢起る事柄である。かゝることは、婦人の相続權を制限することによつて豫防されなければならぬ。私の見るところに依ると、婦人は、寡婦と娘とに論なく、土地又は資本を相続することをしてしないで、一生涯の間、抵當的に保證された利子のみを相続するのが最良の制度だと思はれるが、然しそれも男性の相続者が皆無なる事を必要とする。財産を取得し得べきものは男子であつて、女子ではない。婦人は従つて財産を絶對的に所有する權利もなく、それを管理する資格もない。婦人は相続せる眞の財産、即ち資本・家屋・土地等を自由に處分してはならない。いか

なる場合にも後見者が必要である。夫故に婦人はいつも自分の子供の後見役となるわけには行かない。婦人の虚榮は、よしそれが男子の虚榮より大きくない場合でも、全く物質的の事物——即ち彼等自らの美と、次いで浮華・街耀・虚飾と云つたやうな方面に向つてゐるので、社交界は彼等の最もすきな天地となる。此事はまた——特にまた其理性の貧弱な爲めでもあるが——婦人を『浪費』に傾かせる。だから希臘人は云つた。『大體に於て、婦人は生れながら浪費的である』と。男子の虚榮心はこれに反して往々非物質的美質、即ち理解力・博學・勇氣の如き方面に赴くのである。——アリストテレスは其『政治論』第二卷第九章に於て、スバルタ婦人は遺産及持參金を所有する権利や其他多大の自由を持つて居たので、其許された範圍は餘りに廣く、そのためにスバルタ人にとつての非常な不利が生じたこと、並びにこの事がスバルタの没落を促進した事に就いて詳論して居る。——佛蘭西に於てルイ拾三世以來漸次に増大し來つた婦人の勢力は、宮廷と政府とが段々と腐敗して來たことに對して責を負ふべきものではなからうか？ 此腐敗は第一革命を喚起したもので、此第一革命は後のすべての革命を誘致したのであつた。兎に角歐州の『淑女』に於て其最鮮明な徴證を見る如き、誤れる婦人の位地は、社會狀態の根本的缺陷であつて、此缺陷は其中心から、すべての部分の上に有害な影響を波及するのである。

婦人が其天性上、服従するやうに出來てゐることは、次の事實によつて認められる。充分に獨立不羈な位置に、即ち女性の自然に背反する位置に置かれたるすべての婦人は、間もなく、自己を指揮し・統御する或男子に結びつくもので、これは婦人が、支配者を要するからである。此際其婦人が若ければ、支配者は戀人であり、年を取つて居たら、懺悔聽問の僧侶である。

自ら考ふることに就いて

いかに豊富な図書館でも、不整頓であるならば、甚小さい・然し整理の行届いた書庫ほどの利益も與へない。同様に、いかに多量の智識でも、自己の思慮がこれを咀嚼したのでなければ反復熟慮した僅かの智識より、其價値は遙かに乏しい。何となれば、人が自己の智識を完全にわがものとし、且これを充分に驅使し得るのは、自己の知れるものを諸方面に於て結合し、或眞理を他の各の眞理と比較することによつて初めて出来る事であるから。又われらが沈思熟考し得るものはたゞわれらの知れる事柄に限られてゐる。故に人は學ばねばならない。然し人の本當に知れるものは、既に自分の熟考を経たものに限られてゐる。

さて、讀書や學習は、實際自分の欲するがまゝに、これに従事し得るものであるが、本來の意味での「思考」はさうは行かない。それは恰も火が風に煽られ・保たれるやうに、對象に對する興味によつて刺戟され且維持されなければならぬからである。そして此興味は、純粹に客觀的なこともあれば、單に主觀的な事もあらう。後の場合はわれらの個人に關する事件に際して

のみ存在する。前の場合は然し自然について思索する人々にだけ存在するもので、これらの人にとつては、思考は呼吸と同じく、自然的なことであるが、かやうな人達は稀れにしか見當らない。大抵の學者にあつてすら、眞に思考する事は甚稀れである。

自分で考へることが、精神に及ぼす作用と、讀書が精神に及ぼすそれとは相異つたもので、其間の距離は信じ難い程大きい。本來われらの頭腦には各相異があつて、或ものは讀書に傾き、他のものは思考に傾いて居るが、上述の距離は、此本來的の相異を益々擴大する。讀書は、精神が其瞬間に持つて居た方向と氣分とは縁の遠い且異種的な思想を、精神に押しつけるものであつて、それは恰も印章が自らの形を封蠟の上に捺押するのと同じである。讀書の際には、精神は何等の衝動をも興趣をも感ぜざるものを考へるやうに、外部的に充分に強制される。――然し自ら考へる場合には、精神は其瞬間に外界或は記憶によつて定められた自己自身の衝動に従ふのである。われらの知覺する外界は、決して讀物のやうに、特定の思想を精神に押しつけることはしない。單に當事者の資性と其時の氣分とに適應せる事を考へるやうな材料と機縁とを與へるだけである。――夫故にあまり多く讀むと、精神の彈力性がなくなるのは、永く重

自ら考ふることに就いて

いもので壓しつけて置くと、發條の弾力が失はれると同一である。されば自由な時間さへあれば、いつでも直ちに書物を手にするのは、自己の思想を持たざる爲めの最適確な方法である。

博識多讀が、大抵の人を其天性以上に愚鈍蒙昧ならしめ、其著述を全く不成功ならしめる理由は、まさしく上述の方法を實行したからである。彼等はボーブの云つた通り「いつも、讀まれるためではなく、讀む爲めに」(Tuncad III, 194) (自分の著は人によまれないで自分) (は人の書を讀んでばかりゐる義) 居るのである。

學者とは、書物を讀んだ人々のことで、思想家や天才や、世界の啓發者や人類の恩人は、直接に世界と云ふ書物を讀んだ人達である。

實際、眞理と生命とを有するのは、自分自身の根本思想だけである。何となれば人が眞に而して全く理解し得るのは、自己の根本思想のみだからである。吾等の讀んだ他人の思想は他人の食物の残滓であり、知らない客の脱ぎ棄てた衣である。

讀んで知つた他人の思想と、われらの心のうちに浮び來つた自己の思想との關係は、石に残つた前世世界の植物の印象が、春の花咲く植物に對すると同じである。

讀書は單に自己の思索の代用物たるにすぎない。讀書に當つては、人は自分の思想が他人によつて、引繩(往時幼兒に歩行を教へるために用ゐし繩)で導かれることを許すのである。且又多くの書籍の効能は、世にいかにも多くの邪路があるかを示し、輕々しく書物に誘導されると、いかに甚しく迷ふかを教へるにとどまる。然し彼の守護神によつて導かれるもの、——即ち自ら・自由に且正當に思考する人は、正道を發見すべき磁針儀を持つのである。——夫故に人は、自己の思想の泉の停滞した時のみ讀書するやうにしなればならぬ。思想の流れの停滞することは、實際最良の頭腦に於ても屢在る事である。之に反して書籍を手にながため、自己の思想を逐ひ拂ふのは聖靈に對する罪惡である。此場合かくの如き人は、乾醋植物標本を見るために、或は銅版彫刻の美しい風景を眺める爲めに、自由な自然から逃遁する輩に酷似する。

往々人は、自分の思索と思想の聯絡とによつて、非常に骨を折り且長い時を費して考へ出した或眞理又は見解が、或書を開けば既にちやんと出來てゐるのを容易く見つけ得る類のものである事があるが、そう云ふ場合でも、該眞理又は見解は自分の思索で得たものであるから、其價値は百倍である。何となればかくして初めて、これらのものは、完成的部分として又生ける

自ら考ふることに就いて

一員として、われらの思想の全系統のうちに入り来り、これと完全にして且堅固な結合をなし、其理由も結論もはつきりと理解され、われらの全思考法の色彩と色調と極印とを有するものとなるからである。それは其必要が感ぜられた瞬間に、丁度折よくやつて来たもので、従つて堅固な位置に座し、二度と消え去ることはない。従つてゲエテの詩句、

『おんみがおんみの祖先たちから相續したものを、

おんみは自己のものとせんがために獲得せよ』

と云ふ言葉はこゝで完全に適用され得る。否むしろこゝで完全に説明されるのである。自ら思索する人は、自分の意見に對する權威ある證例を、後になつて知るのであるが、其時にはオーソリテイは單に彼の意見と彼自身とを力強くするに役立つばかりである。然し書籍哲學者は、自分の読み集めた他人の意見を一つのものに纏めて、オーソリテイを出發點とする。かうして出来たものは、解らない材料から出来上つた自動人形のやうなもので、前者はこれに比べると自然の生める生きた人間にたぐへられる。如何となれば、外界は、思考する心に胎種を下し、此心は受胎し、妊娠して遂に分娩するに至つたからである。

單に學んで知つた眞理が、われらに附着する有様は、義手・義足・義齒・蠟細工の鼻、或は、せい

ぜい、他人の肉で出来た造鼻などが、われらに附着すると同じ程度のもので、これ以上に出るものではない。然し自己の思索に依つて得た眞理は、自然の四肢體軀と同じく、これのみが眞にわれらの所有に係るものである。思索家と學者との區別はまさにこゝに存する。それ故に自ら思索する人の精神的收得物は、正確な光と蔭、整つた調子、色彩の調和を以て、生氣濺潑として浮び出づる美しい繪畫のやうに見える。これに反して單なる學者の精神的收得物は、いろいろな顔料に充ち又系統的に配列されてはるるが、調和も聯關も意味もない大きな調色板に酷似してゐる。

讀書とは、自己の頭腦の代りに、他人の頭腦を以て考へるといふ意味である。自ら思索することとは或脈絡ある總體が——たとへ厳密に完全でなくとも、兎に角或體系がそこから開展することとを企圖するのであるが、これに對しては、絶えざる讀書によつて他人の思想が力強く流れ込むよりも、つと有害な事はない。何となればこれらの思想は、各別な精神から湧き出て、他の體系に屬し、他の色彩を持つもので、決して自ら思考と智識と識見と確信との一總體を作るやうに合流する事はなく、寧ろ頭腦のうちに軽いバビロンの言語の混亂(バビロン塔の完成を、イエホヅア神が嫌つて、人々の言葉を混亂さ

自ら考ふることに就いて

せて、これを不可能にしたと云ふ故事に因る。——を引き起し、かゝる思想を過度に詰め込んだ精神かたじけなくでは單に思想の混亂を意味する。——) 一切の明瞭な識見を奪ひ、かくしてその精神の秩序をほとんど紊亂させるものだからである。此状態は、ほとんどすべての學者に於て認められる。彼等が健全な理解と正常な批判と實行上の分別とに於て、學問なき多くの人々に劣る所以は實にこゝに存する。これら學問なき人は、經驗と會話と零碎な讀書とに依つて、外部から與へられた僅かな智識を自己の思想の下に服従させ、或はこれを合併するのであるが、學術的思索家も實はこれらの人のなすところを、大きな尺度で行ふにすぎない。これらの人々は、多くの智識を必要とするが故に、多く讀まなければならぬが、然し其精神は充分に強いから、これらすべてを克服し同化し、彼等の思想的體系のうちに併合し、かくしてこれを、彼等の愈擴大して行く大規模な識見の有機的に聯關する全體の下に隷屬せしめるのである。この場合、彼等自身の思想は、オルガンに於ける主調低音グランドバスの如く、いつも一切を支配し、決して他の音調によつて壓伏されることはない。然し單に物識りと云ふべき人の頭腦では、云はゞあらゆる調子の斷屑が入れ亂れて、基本調グランドトーンは最早發見されないと云つたやうな有様になつて居る。

讀書を以て其生涯を送り、其智識を書籍から汲み取つた人々は、或國土に就いての精確な智識を多くの旅行記から得た人達に似て居る。かゝる輩は多くの事について教示することが出来るけれど、然し實は此國土の状態についていかなる聯絡ある・明瞭な根本的な知識をも所有してゐない。これに反して其生涯を思索で送つた人々は、身みづから其國土に居た人達と同じで、彼等だけが、話頭の上つてゐる事柄の真相を知り、其事物の總體的關係を知り、そして真にこれらの事物に精通してゐるからである。

普通の書籍哲學者が、自ら思考する人々に對する關係は、歴史研究者が、事實の目撃者に對すると同じで、後者はいつも事物についての自己の直接な理解から話すのである。夫故に自ら考へる人々は、根底に於ては相一致するものであつて、その相違は、單に立脚地の相違から生ずる。然し此の立脚地が何等の變化をも事件そのものに與へないとすれば、彼等すべては同一の事を云ふ。何となれば彼等は、彼等が客觀的に把握した事のみを云ふからである。私は私自身、説のあまりに奇論的なのを氣にして躊躇たもとひつつ公衆に談つた議論が、後になつて古來の偉人の書籍のうちで見つかつて、其ためによるこぼしい驚愕を経験したことが屢ある。——書籍哲

自ら考ふるこゝに就いて

學者は、これに反して甲が何を云ひ、乙が何を考へ、そして丙が何を抗論したかを語る。これを彼等は比較し・考量し・批評し、而して事物の眞理に到達しやうと努める。此點に於ては彼は批評的の歴史家述家に似て居る。かゝる人は例へばライブニツが或時代に暫くの間スピノザ派であつたか否かを研究するであらう。この事の甚明瞭な例證を好事家達に供給するものは、ヘルバルトの『道徳及自然法の解剖的説明』ならびに『自由に就いての書簡』である。——かくの如き人々が自己に課する勞の多大なる事に就いては、誰れしも喫驚するであらう。何となれば、かやうな人達が、只事件そのものだけを眼中に置かならば、僅かの思索で、すぐに目的に達するやうに見えるから。然しこゝには少しの故障がある。一體坐つて讀書するのは、いつても出来ることであるが、思索する方はさう行かない。思想と人間とは同じやうなもので、自分の勝手な時に、いつでも人々を呼び寄せやうとしても、出来る事ではない。彼等のやつて來るのを待つ外はない。或事についての思索は、外的機縁が内的の氣分や緊張と、工合よく・調和的に適合することによつて、自然に來なければならぬ。然しこれこそ、決して彼等のもとには來ることなきものである。この説明はわれわれが自分の利害得失に關する事を考へる場合にすら發見される。即ちかう云ふ個人的の利害に關する件で、或決定をしなければならぬとする

とわれらは任意に撰んだ時間に於て、この事件を考へるために靜座しその理由や原因を熟考し、その後決定するやうなことは出来ない。何となれば、かゝる場合には當該事件に就いてのわれらの考察は、安定して居ないで、他の事物に移り行くからである。加之此事には、往々にして事件其ものに對する嫌惡もあづかつて一因を構成する。かゝる場合には、われらは無理強に考へやうとしてはならぬ。思考しやうとする氣分が自ら來るのを待たなければならぬ。此氣分は屢唐突に且繰返へしてやつて來るものである。いろいろの時間に於けるいろいろな情調は事件に對して全く別な見方を授ける。この徐々たる成行きは『決心の成熟』と云ふ言葉のもとに理解されるものである。何となれば思考課程は分割されなければならず、之れによつて以前に觀過した多くの事が、われらの眼前にあらはれ來り、且事物はより明瞭に解つて來ると、大抵はずつと耐る易いやうに思はれるが故に、當初の嫌惡は消失するからである。——理論的方面の事も同様で矢張良好な時間の來るのを待つて居なければならぬ。且いかにすぐれた頭腦でも、すべての時間に於て思索に適するものではない。夫れ故に思索以外の時間を讀書に利用するのはよい事である。讀書とは既に前に述べた通り、自己の思考の代用物であり、且われらの方法とは異つた或方法に於てではあるが、他人がわれらの代りに考へて呉れるから、精神に材料を

自ら考ふることに就いて

給與するものである。讀書の性質が既にかうだから、人はあまりに多く讀んではならない。さもないと精神は代用物に慣れ、其ために事物そのものを忘れ、既に踏み拓かれた道路を行く習慣が出来て、他人の思索の経路を辿る爲めに自己の思考の道を行く事を忘却するやうになる。少くとも人は讀書の爲めには、其眼を全く現實の世界から轉じなければならぬ。然し思考すべき機縁と氣分とは、書を讀むよりも現實世界を見る事に依つて遙かに度數多く與へられる。何となれば其原始性と力を有する眼前實在の事物は、思考する精神の自然的對象であつて、此精神を最たやすく動かし得るものであるから。

かう觀察して來れば、自ら思索した人と書物哲學者とは既に其演述に於て容易く認識することが出来るのは、少しも怪しむに足りないのである。即ち前者は眞摯で、直接的・原始的であつて、すべての思想と表出とが獨自的だと云ふ特徴を有し、後者はこれに反して一切が他人の手から來たものであつて、傳承的概念であり、掻き集めた屑物であり、押された印形を更に押し寫したやうに、力もなければ鈍くもある。そして其文體は傳承的な常套的な辭句や、流行語などから成つてゐて、その状態も、自國で貨幣を鑄造しないから、他國の貨幣を通貨とする國に似てゐる。

單なる經驗は、讀書の如く、思索の代りをする事は出来ない。純粹の經驗が思索に對する關係は、食物が消化及同化に對すると同じである。若し前者にして、自分丈けがその發見によつて人智を進めたのであると誇るならば、それは口が身體の存續は自分の仕事だと誇らうとするやうなものである。

凡べての眞に能力ある頭腦の作物は、確實とそれから生ずる明晰と云ふ性質によつて他のものと峻別される。蓋しかゝる頭腦はいつも、自分が云ひあらはさうと欲することを確實明晰に知つてゐるからである。——散文を以てでも、詩を以てでも、或は音樂を以てでも。——他の人々の作には此確實と明晰とが缺けて居る。此點によつてすぐに作者の頭腦の能不能が認識される。

第一流の精神の特徴は、彼等の一切の判斷が直接な事にある。彼等が生み出すものはすべて彼等の自己の思索の結果であつて、其發表によつて、どんな場合にも、第一流の精神から出た

自ら考ふることに就いて

ものである事が認められる。従つて彼等は精神的國土に於て、諸侯の如く帝國に直屬し、其他のすべての他の人々は陪臣の位置に立つものである。此事は何等獨自の特色をも示さざる彼等の文體によつて認知される。

眞に自ら思索する人は、夫故に次の點に於て一個の君主に等しい。彼は直屬で自己の上は何人をも認めない。彼の判斷は君主の斷定の如く、彼自身の完全權力から生じ、彼自身から出て來る。何となれば君主が他からの命令を受けないやうに、彼もまた他に權威を認めないで、彼自身が是認したものにのみ權威を與へるからである。——これに反して流行せる諸種の意見や權威や偏見に囚はれたる頭腦の平民は、法律と命令とに默從する人民に似てゐる。

論争せられつつある事件を、權威ある言葉を引用することに依つて、決定しやうと熱中し且急ぐ人々は、乏しい自己の理解と見識との代りに、他人のそれを戰場に引出し得ると、(大した應援を得たやうに)甚しく悦ぶものである。かう云ふ人々の數は夥しい。何となれば、セネカの云ふ通り『各人は批判するよりむしろ信じやうとする』からである。彼等が論争するに當つて、共に選んで用ゐる武器は權威ある言であつて、彼等は此武器を以つて互に襲ひかかる。だ

から論争に陥りでもしたら、理由を述べたり論據を挙げたりして自ら禦ぐのはつまらない事である。自ら考へたり、批判したりする力のなくなつた彼等は、かう云ふ武器に對して、不死身であるからで、彼等は相手の尊敬心に憑ふる論據として、彼等が權威とする(偉人などの)言葉を振りかざして對抗し、そして勝利を叫ぶであらう。

現實の世界に於ては、それがいかに美しく、幸福でまた愉快なところだと證明されても、われらは常にたゞ重力の影響の下に動くにすぎない。そしてわれらはいつでもそれに打克つて行かねばならぬ。然るに思想の世界に於ては、われらは肉體なき精神であつて、重力の法則もなければ、困窮に苦しめられることもない。だから美しい豊饒な心が、仕合せな瞬間に、自己のうちに見出すほどの幸福は世のなかにない。

思想が眼前にあるのは、戀人が目前に居るのと同じで、われらは此思想を決して忘れることなく、此戀人は決してわれらに對して冷かになることはないと思ふ。然しそれらが眼前から去り、心のうちから消えた時にはどうであらう! 最も美しい思想すらも、若しそれが書き下されな

自ら考ふることに就いて

ければ、とり返へしのつかないやうに忘却される危険があり、戀人とても、若しわれらに配せられなければ、われらから引き離される危険がある。

世には、その方面を考へて人にとつては、若干の價値を有する思想が澤山ある。然し此思想のうちで、反跳的又は反射的作用によつて働く力——即ち此思想が書き下された後、讀者の同感を起す力を持つものはほんの僅かしかない。

然し此場合、眞の價値を有するものは、人が初めは自分の爲めにのみ考へた思想である。一體思索家はこれを二種に分つことが出来る。一は第一に自分の爲めに考へる人で、他はまづ他人の爲めに思考する人々である。前者は、言葉の二重の意味での自己思索家であり(自分でために考へる)、眞の哲人である。何となれば彼等だけが事件を眞面目に考へるからである。實際また彼等の生存の快樂と幸福とは思索することにある。これに對して第二の人々は詭辯派とも云ふべきで、他人から思索家だと見られやうと欲し、其幸福を自らのうちではなくて、他人から得やうと希望してゐるもののうちに置く。こゝに彼等の熱心がある。或る人が此二つのク

スのうち、いづれに屬するかは、その人のやり方全體ですぐ解る。リヒテンベルヒは第一の種類のものゝ標本であり、ヘルデルは明らかに第二の種類に屬する。

生存の問題が——此曖昧な・苦しみの多い・須臾な・夢の如き生存そのものゝ問題が、いかにわれらに重大でまた切實であるかといふ事を考へるならば——人が此問題に氣が着くや否や他のすべての問題と目的とはこれによつて蔽ひかくされる位に重大切實であることを考へるならば——そして僅少の稀有な人々は例外として、すべての人々が此問題を明瞭に意識せず實際これを感じたやうな様子は少しもなく、此問題よりもむしろ他のすべての事件に頓着して、只今日と彼等の將來の僅かな近い部分しか考へないで暮して行き、生存の問題は、或は明白にこれを避け、或はこれに關して、好んで俗間哲學の一體系を取り來つて満足するやうな事を考へると、——人間は思考する生物だと云ふ言葉も、甚廣い意味で解釋さるべきものであるといふ意見を持つやうになる。而して爾後は無思想とか、愚昧とか云ふ事のどんな有様にも特に驚かないやうになり、寧ろ普通人の知力的視野は動物の視野よりも——動物は將來と過去とを意識せず、其全生存は云はゞ只現在のみである——無論廣いけれど、然し一般に人が考へる

自ら考ふることに就いて

ほど、そんなに廣闊なものではないことを知るであらう。

會話に於てもまた、大抵の人の考へは、丁度刻薬イキヤクのやうに、短かく切られたもので、従つていかなる長い糸をも、これから紡ぎ出すことが出来ないのは上述の事實に相應する。

若し此世界が、本當に思考する人達ばかりで満されてゐたら、あらゆる種類の噪音が、かくも無制限にゆるされてゐることは不可能であらう。——然るに最驚くべき最無目的な噪音すら無制限にゆるされてゐるではないか(「噪音に就いて」を見よ)。——また自然が人間を思考するやうに定めたのなら、自然はこれに耳を與へなかつたであらう。或は、少くともわれらの耳に、蝙蝠の如く、空氣の通過しない覆皮フキを附けたであらう(私は實際此點で蝙蝠を羨むものである)。然し人間は、他の動物と同じく憫むべき生物にすぎない。其力は生存を維持するに足るだけにしか算定されてゐない。それ故に人間は、いつも開いて居て、夜も晝も・また諮詢されないで、迫害者の接近を報告して呉れる耳を必要とするのである。

讀書と書籍

無識は、それが富に随伴して見出さるるとき、初めて其人の價値を落すものである。貧者は自己の貧困によつて束縛される。彼の仕事は彼の智識の位置を占め、彼の思想を役する。これに反して無識の富者が、單に逸樂を逐つて生活し、獸類と選ぶところなきは、われらが日に日に目堵する通りである。その上になほ、彼等は自己に最大の價値を與ふる所以のものに對して、富と時とを用ゐなかつたと云ふ非難が加へられる。

われらが讀んで居る時には、他の人がわれらの代りに考へる。われらは單にこの人の心的過程を繰り返へすに過ぎない。それは丁度書き方を習ふ際に、生徒が其筆を以て、教師が鉛筆でつけた線條を辿つて行くと同じである。従つて讀書に當つては、思考作業の大部分がわれらから取り除かれる。さればわれらは自らなす思考作業から讀書に移る時、負擔の輕減されたことを明かに感得する。然し本來的に云ふと、讀書してゐる間は、われらの頭腦は、われら自身の活

動場でない、それは他人の思想の闘場である。されば甚多く読み、ほとんど終日をこれに費して、只合間合間に思考のない閑暇を得てそれで休養をする人は、自ら考へる能力を漸次に喪失するものであつて、それは丁度、常に騎馬する人が、終には歩行そのものを忘却すると同じである。かゝる事は然しながら、甚多くの學者達に於て見られる事實で、彼等は讀書によつて自ら愚昧にしたのである。絶えざる讀書、いかなる自由な瞬間に於ても直ちにまた初められる讀書は、絶えざる手工よりもより、甚しく精神を不具ならしめる。何となれば手工作業に當つては、人はなほ自己の思考に耽ることが出来るからである。發條が他の物體の壓を絶えず受けて居ると、遂には其弾力を失ふと同じく、精神も亦他人の思想の壓を不斷に受けるとその弾力を喪失する。あまり多くの營養物によつて胃が損はれ、従つて身體全部が害を蒙ると同様に、餘り多くの精神的食物によつて、精神は過度に滿され且窒息せしめられる。何となれば多く讀めば讀むほど、讀まれたものは愈少なき痕跡を讀者の心に貽すからであつて、心はかくして、その上に幾度も幾度も重ねて書かれた石板のやうになる。それは沈思考察の境地に達するとならない。しかしながら人は沈思し考察するによつてのみ、讀んだものを自家藥籠のものとなし得るのである。絶えず讀書して、後になつてから考察する事がなければ、讀んだ材料は根を生ぜず、

大抵は消失する。總じて精神的營養物は肉體的のそれと同様で、攝取したものの漸く五十分の一位の部分が同化せられ、殘餘は蒸發・呼吸・其他の作用によつて消散する。

上述のすべての事に加ふるに、なほ次の一事がある。紙上に書かれた思想は、砂上に印した徒歩者の足跡に過ぎないもので、人はそれによつて徒歩者の取つた道を知るとは出来るけれど徒歩者が途すがら目堵したものの何であるかを知る爲めには、人は自己の眼を使用しなければならぬ。

著述家としての諸特質、例へば人を説服する力、文辭の絢爛、比較の才能、表出の大膽・辛辣・簡潔・優雅或は輕快、更にまた機智或は驚くべき對照を示す力、簡明・素朴の如きものをわれらは單に、これらの性質を所有する作家の著述を讀む事によつてのみ獲得する譯には行かない。だが然し、われらが如上の性質を既に天賦として、即ち潜在的に所有するならば、讀書に依つて、これらの諸性質をわれらのうちに喚び起し、これを意識に齎らし、これを以ていかなる事がなし得べきかを知り、われらの傾向を強め、また實にこれを使用せんとする勇氣を奮ひ起すことが出来、これを實際に適用した時の効果を、いくつかの例證に據つて判定し、かくし

て正當な用法を習得することが出来るのである。これらのすべての事が達成されて後初めて、われらは上述の諸性質を本當に自己の所有とするのである。われらは斯くしていかに自己の天賦を使用すべきかを教へられるのであるから、かゝる過程のみが、讀書より著作への修養の唯一の道である。然し天賦の存在が此場合いつでも前提たることは云ふまでもない。天賦なければ人は讀書によつて、死せる冷たい習癖を學び、淺薄な模倣者となるより外に行きどころはない。

地層が過去の時代の生物を順序正しく保存して居るやうに、圖書館の書棚は順序正しく過去の迷妄と其解説とを保管してゐる。これらのものは前者と同じく、彼等の時代に於ては生氣に横溢して著しく世を騒がしたものであつたが、今や枯死し化石して存在し、單に文學的古生物學者によつて觀察されるばかりである。

ヘロドート(希臘の史家)の云ふところに依ると、クセルクセス(波斯王)は自己の無數の軍勢を見た時、これらの人々のうち只の一人でも百年後には生き残つて居ない事を考へて涕泣した相である。書籍市の厚い目録を見た時、これらの書籍のうち只の一冊でも、既に十年後には生き残つ

て居ないであらうと考へる時、泣くを欲せざる人があらうか。

文學に於ても人生と同じく、いづれに向つても直ちに人類の度しがたい賤民に遭遇する。彼等は隨處に數限りなく生存してゐて、すべてを満みたし、すべてのものを汚す事恰も夏の蠅の如くである。小麥から滋養を奪つてこれを枯死せしめる文學的惡草たる惡書の數も同様に限りなく多い。これらは單に金錢を得んがために、或は地位を獲得せんが爲めに書かれたものであるのに、當然良書と其高貴な目的とに屬すべき時と金とを世人から剝ぎ取るのである。さればこれらは單に無益である計りではなく、却つて積極的に有害である。われらの近代文學全體のうち十中の九までは、世人の衣囊から若干の金錢を欺き取るより以外に何等の目的も持たず、此目的のために、著者・發行者及批評家は堅く黨を結んで居る。

文士・賣文者流及濫作家達は、時代の良趣味と眞修養とに逆さかつて、高雅な社界を誘導し、彼等が調子を揃へて一齊に同じものを、即ち最新の作を、彼等の社會に於ける會話の材料の爲めに讀むべく巧みに教へ込んだのであつた。これは狡猾でまた惡性的ではあるが、馬鹿にはならぬ詭計である。此目的に役立つのは、嘗つては有名であつた諸家の筆に成る惡小説及類似の作

品で、例へば以前のスピンドラア(獨逸の小説家、一五七九—一六八八)バルヴァア(リットン、卿のこと)及エーゼン・シウウ(佛の小説家一八〇四—一八五七)の作の如きものである。然し、單に金錢のために書き、従つていつでも無數に存在する。極めて凡庸な頭腦の生むだ新作を常に讀むやうに、そしてその代りにあらゆる時代と國土との稀有優秀な大家の傑作を、たゞ名前だけで知るやうな義務を負はせられる讀書界の人々の運命よりも、もつと憫むべきものが世にあらうか。特に日刊の文學新聞なるものは、美を愛好する人々から、その眞の修養のために、此方面に於ける純正なる作物に捧げらるべき時間を奪ひ去つて、平凡な頭腦の常套な愚作に與へしめるために、狡猾に考案された方法にすぎないのである。

されば、われらの讀書といふ事に關しては、讀書せざる術が最重要である。此術はいかなる時に於ても、世人の大多數が恰もその時、持て囃してゐる作物を、其ために直ちに手に取るやうなをしないところに存する。例へば丁度その時、喧しい世評に上り、或は更らに其最初の而して最後の年(二年とは生命が續かぬ意味)に於て數版に達するやうな政治上又は宗教上の小冊子・小説・詩等を直ちに手に取らざる事に在る。かゝる時には、愚者のために書く人は、いつでも多數の讀者を見出すものなるを考へ、いつも切り詰められた讀書時間を、専ら偉大なる思想家の作に

——既に世に定評ある、すべての時代と民族とが有する偉大にして嶄然他を抜ける思想家の作に用るよ。かゝる偉人の作のみが、眞にわれらを教養するものである。

悪書はこれを讀まなくとも、讀まないとの非難があるべき理由なく、良書はいくら度々讀んでも、讀み過ぎたと咎められる譯はない。悪書は知的の毒藥であつて、精神を破毀する。——世人はあらゆる時代の最良のものを讀む代りに、常にたゞ新しいものを讀むが故に、著述家は循環的思想の狭い範圍内に止まり、時代は自己の糞土のうちに愈深く沈むのである。

いかなる時代にも、文學には二種あつて、兩者は可なり疎遠な關係を以て相並んで行く。眞の文學と、單に其外觀を有するものとがそれである。前者は久遠の文學に生長するものであり、學術或は詩のために生活する人々のあづかるところで、自己の道を眞摯靜肅に、しかしながら極めて緩漫に歩んで行く。此方面では歐洲に於て一世紀のうちに、僅かに十二冊出るか出ないかの寡産であるが、然し永遠の生命を持つて居る。さりながら學術や詩などを、衣食の資として生きて居る人々の文學は、關與者の騷擾と喚聲との間を疾驅して募進する。そして年毎に數千の作を市場に出す。然し數年後には次の如き質問が起る。『どこにそれらの本があるか？』ど

ここに彼等の夙く而して高かつた名聲があるか？」と。さればわれらは後者を流轉の文學、前者を常住の文學と名づけて差支へない。

世界史に於て、半世紀なるものはいつでも注目に價する期間である。何となれば、歴史を形作る材料はいつでも流れ去りつゝあると共に、また實に或事件が常に起りつつあるからである。これに反して文學史に於ては、此年數は屢全く打算に入らない。何となれば此間に格別何事も起らず、いくつかの拙劣な試みは文學史そのものに何の關係も持たないからである。かくして人は五十年前に居たと同一の場所に居るのである。

此事を明かにするが爲めに、人類に於ける知識の進展を、惑星の軌道の形で想像して見やう。そして知識が或顯著な進展をなした後で、間もなく陥る迷路を、プロレメオス(紀元二世紀のアレキサンドリアの有名な天文學者)の周轉圓であらして見やう。惑星は周轉圓の各を通過した後に、出發前に居た舊位置に復歸する。此惑星の軌道の上で眞に人類を導き進める偉大なる人々は、然し決して反覆して起る周轉圓に入るとはしない。後代の名聲なるものは、多くは當代の喝采を犠牲にするによつて得られる理由及其反對の事實の理由も、上述の事から説明が出来る。かかる周轉圓の一例は

其最後にヘーゲルの漫畫的哲學を有するフィヒテやシェーリングの哲學である。此周轉圓は抑カントによつて描かれた圏線の終點から出發したもので、私は後に出でよこゝを起點として、更らに正統の前進を続けしめたのである。其間に然しながら前述の・及他の二三の似而非哲學者は、彼等の周轉圓を通過し、今や遂に其運動が完成されたので、彼等と共に走つた人々は、今に至つて元の出發點に歸着せるとを認めるのである。

事物のかゝる成行と關聯するものであるが、われらは科學的・文學的・ならびに藝術的の時代精神が、約三十年目毎に破産の宣告を受けるのを見る。蓋し此らの年月のうちには、新たに生じた迷誤が、いつも自己の背理の重さの下に倒れざるを得ないやうな程度に上つて行くとともに、この迷誤に對する反對も漸次に強烈になるからである。斯くして局面は全く轉換する。然しまた、反對の方向に於ける或迷妄が後續することも屢ある。周期的に復歸する事象の道程を示すことは、思ふに文學史の正當にしてまた實用的な題目であらう。然しそれについては文學史そのものはほとんど考へない。其上、この期間は比較的短かいから、遠い時代からその實際的事實を蒐集することは困難である。さればわれら自身の時代に於て此方面についての實際を観察するのが一番便宜である。今若し其例を實際科學から探らうとするなら、まづヴェルネル(一七五〇—一八一〇)

七獨逸の鑛)の岩石水成論的地質學を擧げるとが出来やう。然し私は上に掲げた・われらに縁の近
 物地質學者)の例證にとどまらう。獨逸哲學に於ては、光輝あるカントの時代の直後に、これと異つた時代
 が來た。こゝでは人を確信せしめる代りに、あつと感させ、深遠明晰である代りに、華美で誇
 張的で、特にまた難解であることが、加之、眞理を索むる代りに奸策を廻らすことが努められた。
 かゝれば、哲學は一步も進むことが出来なかつた。遂に此派全體と其方法とは破産した。何となれ
 ば、ヘゲル及其一派にあつては、一方には、無稽な事を案出する大膽さと、他方に於ては、無良
 心的に自ら推讃するところが、彼等の敬服すべき(反)行爲全體の明白な目的と共に、終には恐ろ
 しく膨大したので、すべての人達は其大風呂敷に對して眼を開くやうになり、次で或露現の
 結果、上流社會からの保護が撤廢されることとなつて、すべての人の口もまたこれに對して開かれ
 た。ヘゲル一派は、今まで存在した似而非哲學中でも最憫然なものであるが、此ためにヘゲ
 ル派の起源をなしたフィヒテやシェーリングまで迷惑を受けて、不信川の谷底へ引ずり込まれた。
 これによつて考へても、カント直後の時代、即ち十九世紀の上半に於ける獨逸哲學の全稱的不完
 全は明白な事である。それにも拘らず、われらは他國人に對して——特に英國の或著述家が惡
 意あるアイロニーで、獨逸國民を思索的民族だと呼んで以來——自ら獨逸人の哲學的天賦を誇

つて居るのである！

既にあげられた周轉圓の一般的理論に對して、更らに其例證を藝術史から得やうと欲する人
 は、彫刻界に於て前世紀に、特に佛國で發達し繁榮したベルニイニ(伊太利の十七世紀の建築家)派
 にして畫家・彫刻家をを觀察するだけでよい。此派は古代の美の代りに、凡庸な自然を、古代の簡朴と優雅との代りに、
 佛國のメヌエツト(一種のゆるやかな舞踏)の趣をあらはしたものであつたが、ヴァンケルマンの提唱の下に、
 古代派への復歸が初まつた時、此派は遂に破産して仕舞つた。——更に此世紀の初めの二十五
 年間に於ける繪畫史は、別に一箇の例を供給する。當時は藝術を以て、中世紀的の信仰心の單
 なる手段或は器械と考へ、従つて宗教的の主題のみが、藝術の唯一の題材として選ばれたので
 あつた。然し今やこれを取扱ふ畫家には、中世紀的の信仰の本當の眞面目はなくなつて居るが、
 たゞ上述の妄想の結果として漫然とフランチェスコ・フランチャ(本名はフランチェスコ・ライボ
 リニイ、伊太利ボロニヤの畫家。一四四六—)アンヂェロ・ダ・フ
 一四五〇—)ピエートロ・ベルグイー(本名ピエートロ・ヴァヌチイ。一四四六—)アンヂェロ・ダ・フ
 一五一七—)有名なるフラ・アンツェリコ(の如き人々を模範とし、またこれらの人々より後に出
 イエーソレ(こと、一三八七—一四五四)の如き人々を模範とし、またこれらの人々より後に出
 た眞に偉大な人達よりも、彼等を却つてより高く尊崇したのである。ゲエテは此誤想に關して
 且つは詩に於ても同じやうな努力が當時行はれて居たので、其譬喩『僧戲』を書いたのである。

上記の一派も其後また、出来心に基くものと認められて破産した。これに續いて來たものは、自然への復歸の運動で、これは風俗畫や實生活のあらゆる種類の描寫にあらはれた。——但し平凡常套の域に迷ひ込むとは折々あるけれど。

上に述べた人間の進歩の徑路に相應して、文學史も其大部分は、畸形兒の陳列室のカタログに過ぎないものである。これらの畸形兒を最長く保存して行くアルコールは、此場合には（幀裝に用ゐられた）豚皮である。正しい形を具備して生れたものを、こんなところで捜す必要はない。それらは生存してゐる。世界の到るところで、われらは生ける彼等に逢遭する。彼等は不死のものとして、永遠に潑刺たる青春を保有して世に出てゐるからである。前述の「眞の文學」を構成するものは、只彼等だけである。人數に乏しい眞の文學の歴史は、われらは既に若い時から凡べての教養ある人々の口を通して聞いて居る。決して片々たる綱要書の如きものを讀んで初めて知つたのではない。——或事を本來的には知らないで、只すべての事について喋舌り得るがために文學史を讀まんとする目下流行の偏執狂に對しては、私はリヒテンベルヒの舊版第二卷三十二頁に在る極めて熟讀に價する章句を推薦しやうと思ふ。

（註）リヒテンベルヒは物理學者でまた文學的の著作もある人、一七四二—一七九九、ゲッティンゲン

の教授であつた。

シヨールマンハウエルの指示したところにはかうある、『現時、人々は科學史をあまり精細に研究して、科學に大なる損害を及ぼしつつあると私は信ずる。人々は好んで科學史を讀む。然し實際、この事が頭腦を空虚にすることはないけれど、本當の力を失はせる。歴史が頭腦を充してゐるからである。頭腦に詰め込むのではなくて、これを強くし、力と天賦とを發達させて、自己を大きくしたいといふ衝動を、嘗つて心のうちに感じたことのある人は、科學に於ける所謂文學學者と談話するより、もつと力なきものはないと云ふ事實を見出したであらう。かゝる人々は科學に於て、何れ自分で考へたところはなく、單に無數の歴史的・文獻的の事項を知れるだけである。かゝる人の談話を聞くのは、恰も飢饉に瀕せる時、料理書を朗讀してもらふやうなものである、自己と眞の科學との價値を知れる人々の間に於ては、所謂文獻史は決して重んぜられないだらうと私はまた信ずる。これらの人々は、文學學者とは異つて、いかに他人が判斷したかといふ事に氣を留めるよりも、より多く自分で批判をするのである。或科學に於ける文獻的研究に對する好愛が増加するにつれて、其學問を開拓する力が減少し、自分が學術を所有してゐると云ふ信念のみが増大する。これは最悲しむべき事である。かゝる人々は學問を眞に所有してゐる人よりも、より高い程度で、自己を眞の學問の所有者であると信ずる。

眞の學問は其所持者を倨傲ならしめることは決してない。科學を自ら開拓する力がないので、其臚るげな歴史を鮮明することに従ふ人々や、大部分は器械的なる此方面の仕事や、科學そのものの演習だと心得て、先人の既になした事を列述する人々などが、却つて傲慢になるものだと言ふのは、確かに根底ある意見である、云々。以下略』

——譯者補——

私は然し、實はいつかは人あつて次のやうな悲劇的文學史の著を試みんことを希望するものである。其文學史には、諸國の國民が、今は自己達の最高の矜持として提示する古來の偉大な著述家や藝術家を、その生前に於ては、どんなに待遇したかと云ふ事實が記され、またあらゆる時代とあらゆる國々に於て、善と正とが、いつも勢力を占めてゐる惡と逆とに反對して切り抜けなければならなかつた限りなき戰鬥が描かれ、或はまたほとんどすべての眞の人類啓發者や、一切の部門と藝術とに於けるほとんどすべての大家巨匠が受難し殉道した顛末が述べられなければならぬ。そして一方では、名聲と名譽と富とが、斯道に於ける無價値な人々に、與へられたのに、他方では前述の人々は——其僅少の例外を除いて——世人の承認と同情とを得ることなく、門下生すらなくして貧苦の裡に窮困したことは、恰も父のために獵して野獸を斃したエザウが、彼の外套を着て變裝したヤコブの爲めに、家で父の祝福を盜まれたと同様であ

ることが敘述され、これらの出來事があつたに拘らず、彼等が自己の道に對する愛は常に彼等を支へ保つて、終には人類の教育者としての最困難な戦ひを終つて、不死の桂冠が彼を摩ねき、彼にも次の意味を有する時が來るに至つた事が記されてなければならぬ。

『重き鎧は、羽衣となりつ。』

苦みは短かく、喜びは限りなし。』

(註) これはシルレルの戯曲『オルレアンの乙女』にある詩で、ツヤンダルクの最後の言葉である。

躁音に就いて

カントは『活力』に就いて一篇の論文を書いた。然し私は活力に對して哀悼歌を綴らうと思ふ。何となれば、敲音・槌音・打音などの形で、活力があまりに屢使用されるために、私は私の生涯ぢう、日に日に苦しめられて來たからである。勿論世間には、躁音に對して無感覺であるが故に、私のかう云つたのを聞いて微笑する人があらう、否甚多くあるであらう。然しこれらの人々はまた、論證・思想・詩又は藝術品に對して、約言すれば、あらゆる種類の精神的印象に對して無感覺な人達である。此原因は、彼等の頭腦の質が強靱で、組織が堅固な事に存する。これに反して躁音が思索する人々に與へる苦痛についての愁訴を、私はほとんどすべての偉大な著述家の傳記や、或は其他自分で發表した報告のうちで發見する。例へば、カント、ゲエテ、リヒテンベルヒ、ジャン・パウルの如きはこれで、若しこの方面に言及しない人があつたら、それはたゞ、文の前後の關係が、著者の筆をこの方向に導かなかつたのだといふ事に止まる。自分はこれを次のやうに解説する。一の大きなダイヤモンドを細かく打碎くと、その價はこれ

らの小さい破片の價の總和以上に出ないと同じく、又軍隊がいくつかの細かい部隊に分けられると、最早何事もなし得ないと同様に、偉大なる精神も、それが中斷せられ・攪亂せられ・破壊せられ・轉向させられると、普通の精神よりより多くの事をなし得るものではない。何となれば彼の優秀は、其精神が一切の自己の力を、恰も凹面鏡がすべての光線を集中する如く、一個の點・一個の對象に集中することによつて生ずるものであるが、躁音によつての中斷は、此點に於て精神の妨害をなすからである。夫故にすぐれた思想家は、常にあらゆる攪亂・中斷・轉向等を嫌忌し、殊に躁音によつての亂暴な中斷を嫌つた、然しこれと同一な事でも、普通の人々を特に惱ませはしないのである。歐洲諸國民のうちで最恰憫・慧敏な國民(英)は、『決して中途で邪魔させるな』と云ふ事を、第十一戒として算へた位である(モオセスの十戒に次いで大切な戒と云ふ意味である——譯者註)。躁音は、われら自身の思想を中斷し、或は進んで破壊をさへするものであるから、あらゆる中斷のうちで最無作法なものである。然し中斷さるべきものが全くない時は、躁音が特に感じられないのは勿論であらう。——折々或低い・しかし絶えざる躁音が、私のはつきりとこれを意識する前に、しばらくの間、私を苦しめ・邪魔することがある。この場合、私はその何たるか々解るまでは、丁度脚先へ石塊をのせたやうに、私の思考の歩みが絶えず困難になつてゐるのを

躁音に就いて

感するだけである。――

然し今や概論から各論に移つて、私はまづ最恕しがたき且最耻づべき躁音として、都市の狭い・響きわたる小路で鳴らさるゝ本當に忌々しい鞭の音を挙げなければならぬ。此音は人生から一切の安靜と思慮とを奪ふものである。鞭を鳴らす事が許されてあるといふ事ほど、人類の愚鈍と無思慮とに就いて、極めて明瞭な概念を與へるものは外にはない。此突然の・鋭い・頭腦を麻痺せしむる・一切の思慮を奪ひ・思想を殺す響は、苟も思想に類似する何かを頭腦のうちに有する人なら、誰れだつても苦痛に感ずるに違ひない。夫故にかゝる音は、幾百の人を其精神的活動に於て――たとへ其活動がいかに低級な種類のものであつても――攪亂するに違ひなく、思索家の冥想裡に闖入しては、斬首の劔が頭と胴との間を通過する如く、これに苦痛と破壊とを與へるのである。いかなる音でも、此忌々しい鞭の音ほど、鋭く頭腦を截斷しはしない。此音を耳にすると、人は直ちに鞭について居る革紐の末端を頭腦裡に感得する。これが頭腦に及ぼす働きは、接觸が含羞草に及ぼす作用と同一で、其影響はともに後々まで持續する。實益といふ最神聖な事に對して私は十分の尊敬を持つてはるるが、一車の砂或は肥料を運んで行く男が、市街を三十分ほど通行する間に、一萬ばかりの腦裡に浮び出でつゝある思想を、其萌芽

のうちに枯死せしめるやうな特權を、「運搬」と云ふいくらか實益ある行爲によつて、獲得したとは、どうしても信じ切れぬ事柄である。成程槌の音・犬の吠聲・小供の泣聲などは、恐るべきものではあるけれど、本當の思想殺戮者は鞭を鳴らす音で、人々が時折持つ思念的の結構な瞬間を、滅茶々に滅却するのが、此音の使命である。車を引く獸を驅るためには、あらゆる響のうちで最忌はしい此音を使用するより外に、何等の方法もない時だけは、餘儀ない仕誼として辨疏する事が出来やう、然し事實は全く反對である！ 此咀はしい鞭の鳴る音は、單に不必要であるのみならず、また無益である。と云ふのは、元來鞭を鳴らすのは、馬匹に及ぼす心的作用を主眼としたのであるが、これは此音を不斷に濫用する習慣のために、鈍くなり且失はれて仕舞つた。馬は此音を聞いて歩みを早めはしない、此事は特に、乗客をさがしつゝある空の傭馬車が、ごく緩々と行きながらも、馭者は絶えず鞭をならしつゝあるので解る。鞭で一寸、馬體に觸れた方がすつと多くの効力がある。若しまた此響によつて鞭の存在を絶えず馬に想起させることがどうしても必要だと假定しても、其目的のためには普通に出す響の百分の一丈けの強さで十分であらう。實際動物は人の知れる通り、極めて輕微な、或はまたほとんどわれらの氣が着かない位の聽覺的又は視覺的の合圖にすら注意するもので、此事實については既に調

躁音に就いて

教された犬やカナリヤが驚嘆に價する適例を示して居る。此故に鞭を鳴らすのは、純然たる悪戯であり、或は更に、腕を以て勞働する社會部分が、頭腦を以て勤勞する人々に對して加へる厚顔しい嘲弄であると思はれる。かゝる憎むべき事が都市に於て宥されるのは、大なる野蠻であり、不正である。これは革紐の末端に結節を附けよと云ふ警察令で、極めて容易に除かれ得る事だからなほ更ら此感を深くする。賤民をして彼等の上に立てる階級の頭腦作業に對して注意させるのは少しも悪い事ではあるまい。何となれば彼等は一切の頭腦の仕事に對しては極端な畏れを懷いて居るから。然し非番の郵便馬匹を連れたり、車から解かれた荷車馬に乗つたりして、人口稠密な都市の狭い小路を、一尋もある鞭を一生懸命に鳴らしながら行く奴は、直ちに馬からおろされて、杖で正直に五つもなぐられるがよい。たとへ世界中の博愛論者が、立派な理由から體罰全部を廢止せんとする立法團と共に、鋒をそろへて此所罰を非難しても、私は説服されないつもりだ。然しもつと激しい例を十分に度々見ることが出来る。それは、馬を連れずに單身で往來を行く馬丁が絶えず鞭を鳴らすことである。不都合な寛大のお蔭を以て此男には鞭を鳴らすのが、これほどひどい習慣になつたのだ。肉體とすべての其満足との爲めには一般に非常に柔さしい取扱がなされてゐるに係らず、思索する精神そのものは、尊敬を受けるなどは

さて措き、最僅かな願慮をも保護をも與へられざる唯一つのものであつてよからうか？ 馭者(荷馬車) 荷擔夫、辻待人足などは人間社會の馱獸である。彼等は全然親切に、正義・公正・寛大・用意を以て取扱はれなければならない。然し恣ほしむに躁音を立て、人類のより高い努力の邪魔をすることは決して許されてはならぬ事である。此鞭の鳴る音が、既にどの位多くの偉大にしてまた美しい思想を世間から追ひ拂つたかを私は知りたい。私が命令する権力を持つなら、私は馭者たちの頭に、鞭の鳴る音と答刑との間には、斷つべからざる關聯のあることを染み込ませてやるだらう。——より多くの知力と、より微妙な感じを持てる先進諸國が、この點でもまた範を垂れ、これに倣つて獨逸人もまた同様な點までやつて行く事を私は期待する。一方ではトーマス・フードは獨逸人についてかう云つてゐる。『音樂的の國民としては、彼等は、私がこれまで會つたなかで、最騒々しい國民である』と。獨逸人がかう云ふ民族である原因は、彼等が他の國民よりより多く騒々しさを好むからではなくて、騒々しさを耳にした人々の管鈍から來る無感覺に基づくのである。彼等は格別何事をも考へないで、たゞ喫煙ばかりしてゐるのだから——いや喫煙が思考の代用物になるのだが——思考に於ても讀書に於ても妨げられるところがない。不必要な音——一例をあければ、戸を非常に無作法に且野鄙に音高く閉すとであるが——

に對する一般人の寛大な態度は、即これ彼等の頭腦が一般に魯鈍にして無思想である事の一徵證である。獨逸に於ては、何人も躁音を氣にかけないやうに或方法が講ぜられてあるかのやうに思はれる。例へば無目的に太鼓を打つなどは其一つであるが。

最後に此章で論じられた問題の参考書に關しては私は推薦すべき只一冊の——しかも立派な只一冊の——詩的作品を持つてゐる。それは即ち有名なる畫家ブロンツィノオ(伊太利の肖像畫家。一五〇一—一五〇七)が三韻脚法で作つたエピステル(書簡體の詩文)「デ・ロモリー・ア・メセッル・ルカ・マルティニ」である。これには、伊太利の或町の種々の躁音のために、人々が蒙つた苦しみが、悲喜劇的方法で、詳細に且甚面白く描かれてゐる。

自殺論

私の見る限りに於ては、もろくの宗教のうち、其信者が自殺を一個の罪惡と認めるのは、たゞ一神教的宗教即ち猶太の諸宗教だけである。而して舊約全書に於ても新約全書に於ても、自殺に對する何等かの禁止、若しくは單に或非認さへ發見されないのは、更らに驚異すべき事である。夫故に宗教の教師達は、自殺に對する禁止の基礎を、彼等自身の哲學的根柢の上に置かねばならないのである。然し此根柢は甚脆弱であるから、彼等は其議論に於て力の缺如するところは、彼等の嫌惡の表現の強さに依り、即ち罵詈によつて補填しやうとするのである。従つてわれらは、自殺が最大の卑怯であるとか、それは亂心せる場合に於てのみ可能であるとか、或は同じやうな愚劣な言説を聞かなければならず、更に進んでは自殺は不正であるなど云ふ全然無意味な文句を耳にさせられるのである。然し各人は世界に於て、自己と其生命とに對する權利より、もつと確實な權利を何物に對しても持たないのは明白な事ではないか。上に述べたやうに自殺は罪惡の一つに算入されてさへある。これに關聯するのは——特に賤民的に頑

其な英吉利に於ては、——自殺者の不面目極まる埋葬法と遺産の没收とである。此故に陪審官は、自殺者に對しては、ほとんど常に狂氣と云ふ判決を與へる。自殺について、判定を下さうと思ふなら、人はまづ自己の道德的感情に懇えるがよい。そして或知人が或罪惡を——即ち殺人とか、慘酷とか、詐欺・竊盜などをなしたといふ報知が吾人に與へる印象と、自殺の報知が與へるそれとを比較せよ。前者は激しい憤慨と、極度の不快と、懲罰或は復仇に對する要求を引き起すけれど、後者は悲哀と同情とを喚起し、且惡行爲に伴ふ道德的否認がこれに混入するよりも、寧ろより、屢自殺者の勇氣に對する嘆賞の念が加はり來るであらう。自ら進んで世を辭した(自殺した)知人とか友人とか親戚とかを有する人はいくらでもある。——かゝる人々は嫌惡の念を以て自殺者を考へること、恰も他の犯罪者を考へると同じでなければならぬであらうか。私はそんなことは全然否定する。私の意見に従へば寧ろかうである。僧職に居る人々は、何等の聖書の典據を示すことも出來ないのに、のみならず又何等の堅固なる哲學的論據をも持たないのに、いかなる權利を以て、或は説教の壇上から、或は其著述に於て、われらからは敬愛せらるゝ多くの人々の行つた一行爲に罪惡の烙印を施し、又自ら進んで世を去つた人々に對して、正當の禮を以てする葬送を拒むのであるかに就いて辯明するやうに、一度は要求せらるべきも

のであり、且此場合に求められるのは、理由であるから、空疎な言説や罵詈の類は其代りとなり得べからざる事がまづ確定されなければならぬ。刑法が自殺を禁ずればとて、それは宗教的に何等有力な理由ともならない。その上、この禁止たるや甚笑止千萬である。何となれば、死をだに怖れざる人が、どんな懲罰を怖れるであらうか？——自殺未遂を罰するならば、それは自殺遂行法の拙劣さを罰するに止まるのである。

希臘・羅馬の人々もまた決してかくの如き見方で此事件を眺めはしなかつた。ブリニユウス(二三—七九、有名なるヴェスグエヤス山の大噴火の時窒息して死した)は云ふ。『われら思ふに、人生なる人、老ブリニユウスと云はる。其著に *Historia Naturalis* がある。』(二)は云ふ。『われら思ふに、人生なるものはどんな形でもよいから曳き摺つて行かなければならぬほどに、願はしいものではない。汝の性質がどう作られてあらうと、汝は他の人と同じ方法で死ぬのである。不品行なそして瀆神的な生活をして來てもまた同様である。されば、自然が人間に賦與する一切の財實のうち、適當な時機に死ぬことより勝つたものはなく、しかもそのうちで最すぐれた財實は、各人が自殺し得る事である』と。彼はまた曰ふ。『神すら萬能な譯ではない。何となれば神は自ら欲しても自殺することが出來ない。然るに(人間は自ら殺し得るから、)これこそ人生の多くの不快な事のなかで、最上の賜として神から人間に與へられてゐるものだ』云々。マッシリア(マルセルイの舊名)

とケオス島(希臘の二島)とでは、自殺に對する十分な理由を陳述し得た人々に向つては、市長から公然にすら毒人參の飲料が交附された。

(註) ケオス島に於ては、老人が自ら進んで自殺するのが風習であつた。

而して事實いかばかり多くの古代の英雄や賢者は自殺によつて自己の生命を終つたであらうか！ 無論アリストテレーレスは自殺を以て自己に對する不正ではないが、國家に對する不正であると云つたが、ストーベオス(希臘の著述家で紀約五百年頃)は、其アリストテレーレス派倫理の解説に於て、次の如き文章を引用してゐる。『自殺は、最大不幸の裡に在る善人と、最大幸福のうちに居る惡人とに取つて一個の義務である』と。同じく彼は引用して曰ふ。『此故に人は結婚し・兒を生み・政治的生活に参加しなければならぬ。そしてまた全體として徳の練磨をなさんがために、自己の生命を維持する要があると共に、必要に應じてはまた生命を放棄しなければならぬ』云々。更に進んでストア學派になると、自殺を高貴にして勇敢な行爲だと嘆美する。それは無數の章句——特にセネカの著作からの最力強い章句によつて證明されるであらう。また世人の知る如く、印度人にあつては自殺が屢宗教的行爲として行はれる。特に寡婦の自焚とが、ヤッゲルナウト(印度の毘瑟拏神の第八化身たるクリーシュナの偶像を云ふ。此像は毎年車に載せて牽き廻られ信徒はこれに轢殺せらるれば極樂に行き得ると信じ、従つて自ら轢死するもの毎年多し——譯者註)

の車輪の下に身を投ずること、或はガンヂス河や寺院の聖池に住む鰐魚に自己を犠牲として捧げる等がそれである。同様に、人生の鏡たる劇場に於ても、われらは——例へば有名なる支那劇『支那の孤兒』が其一證であるが——高貴な性格を有する人々のほとんで凡べてが自殺するのを目撃するが、然しこれによつて彼等が罪を犯すのだといふ事はいかなる方法によつても示されて居らず、觀衆もまたさう云ふ考へを起さない。われらの劇場に於ても究極するに同じである。例へば『マホメット』曲中のバルミラ、『マリア・シュツァルト』曲のモルティマア、オセロ及テルツキイ夫人(シルレル作『ヴァレシ』などかわれらの舞臺に於ける例證である。ハムレットの獨白は、一つの犯罪についての冥想であるであらうか？ 否彼はたゞ、もし人間が死によつて絶對に滅びることが確實であるなら、世界の本性を考察した結果から考へると、死んだ方がまさつてゐる事を述べるにすぎない。『然しこゝがまゝならぬところだ』——一神教即ち猶太的諸宗教の僧侶や、これに迎合する哲學者達によつて作られる自殺反對論は、實は薄弱で、他愛もなく論伏さるべき詭辯にすぎない。此詭辯の根本的駁論を、ヒュームは其『自殺論』に於てなした。これは彼の死後初めてあらはれたが、英國に於ける例の不面目な頑冥と耻づべき僧侶的專制によつて直ちに抑壓されたものである。それ故に甚僅少な部數が秘密に且高價で賣ら

れたに過ぎない。そして今此偉人の該論文及他の一論文(靈魂不滅論)が保存されてゐるのは、バアゼルの復刻のおかげである。(Essays on Suicide and the Immortality of the Soul, by the late

David Hume. Basel, 1799 Sold by James Decker, pp. 123, 8vo)然し冷靜なる理性を以て、一代の

自殺反對論を駁撃したる——英國第一流の思想家にして著述家たる——人の手に成つた純然たる哲學上の一論文が、外國に於て保護されるまで、不正品のやうに故國を潜行しなければならなかつたのは、英吉利國民の大なる耻辱でなければならぬ。此事はまた同時に、教會が此點に於ていかなる種類の曇りなき良心を有するかを明示してゐる。——自殺に反對する唯一の有力な論據を、私は私の主著第一卷第六十九節で述べた。それは、自殺が悲哀の此世界から眞正に解脱する事に換ふるに、單に外觀的の解脱を以てするから、最高の道德的目標に到達する邪魔となるので、これに反對しなければならぬと云ふ事に存する。然し此誤想から、基督教の僧侶が目して以てそれだとしやうとする罪惡へ至る間の道は甚長く且遠い。

基督教は、其深奥な根柢に於ては、「受苦」といふことを人生の眞の目的だとする眞理を持つてゐる。従つて自殺は、此目的に背戻するものとして非難される。然し希臘羅馬の古へに於ては、より低い見地からして、自殺は是認され・尊敬されたのである。自殺に反對する上述の

(基督教的の本義的の)理由は、然しながら一個の禁慾的な論據のもので、歐洲の道德學者がこれまで占め來つた立場より、より高い立脚地からのみ唱へられ得るものである。しかしわれらが此甚高い立脚地から降ると、自殺を咎むべき何等の堅固な理由もない。されば此事に反對する一神教の僧侶達の異常に旺盛なしかし聖書によりても或はまた他の有力な論據によりても支撐せられざる熱心は、或隠れたる理由に基くに相違ないかのやうに見える。生命を自發的に放棄することは、思ふに、『すべては慥かに美しい』と唱へた人にとつては、下手な挨拶だと云ふ事が或は此理由ではあるまいか。——もしさうだとするなら、これまた一神教的諸宗教の義務的樂天論の一例で、自殺から非難されないやうに、先手を打つて、こちらから自殺するのである。

生の恐れが、死の恐怖に打克つや否や、人間は自己の生命に終結を與へるものだと云ふ事は、通例發見される事實である。然し死の怖れの抗争は頗大きく、これは云はゞ生の出口に守衛として立つものである。若し人間の最後が、純粹に消極的なものであり、生存の突然の終熄であるなら、何人と雖も、恐らく自殺しない人はあるまい。——然しそこには積極的な事がある。即ち肉體の壞滅がそれである。これが人を恐れ・たゞろかせるもので、それは實に、肉體は「生

きんとする意志』の顯現だからである。

然し通常は、これらの守衛との闘争は、遠距離からわれらが眺めてゐるやうに、そんなに困難なものではない。殊に精神の苦惱と肉體のそれとの間の衝突の結果として、さう困難なものではない。例へばわれらが肉體的に非常にひどく或は永く苦悶して居るならば、われらは他の一切の苦惱に對して平氣になるもので、疾病の回復のみがわれらの心に懸つてゐる。これと同じく、強い精神的苦悶は、われらを肉體的のそれに對して無感覺ならしめる。即ちこれを輕蔑せしめるのである。のみならず、肉體的の苦惱が優勢を占めるとしても、それはわれらにとつては都合のよい注意の轉向であり、精神的苦悶の休憩時である。自殺に關聯する肉體的苦痛は非常に大きい精神的苦惱によつてなやまされてゐる人達の眼中に於ては、すべての重味を失つて仕舞ふから、自殺を容易ならしめるものは、まさしく精神的苦悶である。この事は純粹に病的な・深い不愉快な氣分によつて自殺するやうに促進される人々に於て特に顯著である。かゝる人々は自殺を遂げるに、何等の克己をも要しない。彼等に附せられた看視人が一分間も離れると、彼等は手早く自己の生命に終焉を與へるのである。

苦しい・恐ろしい夢に於て、恐怖が最高度に達すると、恐怖それ自身がわれらを覺醒させ、此覺醒によつて、夜の怪物どもは消散する。人生の夢に於ても、恐怖の最高度が、この夢を破るべくわれらを強める時には、同じ事が起るのである。

自殺はまた一種の實驗であり、人間が自然に向つてこれを課し、それに對する答案を強要せんとする一種の質問である。其質問に云ふ『人間の認識と生存とは、『死』によつていかなる變化を受けるであらうか?』然し此實驗は甚拙である。何となれば、質問した意識と、解答を待つ意識との同一性は、死によつて失はれるからである。

觀相論

外部が内面を描き出し、顔貌が人の性質全體を表現し又表明すると云ふ事は、すべての人の有する假説であつて、其先天性と、従つて其確實性とは、善にまれ、惡にまれ兎に角何事かに依つて表はれた人物、又は或異常な仕事をした人を目睹したいと云ふ慾望、或はこの望がとけられないと、せめては他人から其人の風貌を傳へ聞きたいと云ふ慾望のうちに明白にあらはれてゐる。且此慾望は機會さへあれば、いつでも現はれて來るのである。だから一方では、かやうな人物が居ると推測されるところへ人々が押し寄せるのであり、他方では新聞——特に英國の新聞の努力は、まづ其人物を詳細凱切に記述し、之につゞいて間もなく、畫家や銅版師がこれをありありと見せて呉れるやうになり、最後には、かゝる目的のために非常に尊重さるる寫眞が來て、此需要を完全に充たして呉れるやうになるのである。同じ理由から、日常生活に於ても、人々は自己の遭遇するすべての人を觀相法的に檢査して、其道德的及智力的性質を、私かに相手の顔から豫め知らうとする。然し若干の論者の云ふ如く、精神と肉體とは全然別なもの

であつて、體が心に對する關係は、衣服が身體に對すると同じだから、人間の外貌は少しも重要でないと云ふなら、上述のすべての事件が起り得るわけではない。

然し、人間の顔はむしろ象形文字であつてたしかに解讀され得るもの、其アルファベットは既にちやんとわれらの胸中に備はつてゐるのである。しかのみならず、人間の顔は通常其口よりも、より多くの・そしてより面白い事を云ふものである。何となれば、顔は口からいつかは出るであらうものすべてを摘要して居て、其人物のすべての思考と企圖との組合文字だからである。また口は單に或人間の思想を云ひあらはすけれども、顔面は自然の思想を云ひあらはす。此故に、人は誰れでも相手がまはすにこれと談話する要はないが、誰れでも相手がまはすに注意深くこれを觀察するだけの價值はある。——個體が既に、自然の個々の思想として、觀察さるべき價值を持つてゐるなら、美はこの價值を最高の程度で有する。何となれば美は自然のよりの高い・より一般的な概念であるからである。美は種族についての自然の思想である。美がわれらの眼を力強く捉へるのは此譯である。美はまた自然の根本的にして且主要なる思想である。これに反して個體は副次的思想であり、一個の随つて生れ來る歸結にすぎない。

すべての人は、口には云はないが内心には、「各人は見える通りのものだ」と云ふ原則を持つ

てゐて、これを出発点とする。此原則は正當でもある。然し困難なのは其適用の方法である。これに對する能力は、或部分は生れつきで、又或部分は經驗から得られる。然し何人も餘蘊なく知悉することは出来ない。最熟練せる人すら、なほ且つ誤りをなすからである。それでも顔は人をあざむくものではなくそこにあらはれて居ないものを讀むやうな過ちおやまを犯すのはわれらの罪である。勿論顔を讀むのは大切な而して困難な仕事であつて、此術の原理は決して抽象的に習得することは出来るものではない。これに達する最初の條件は、人を純客觀的な見方を以て理會することであるが、これはさう容易い事業ではない。と云ふのは若し嫌惡・偏愛・恐怖・期望などの極僅かの痕跡でも、或はまたわれら自身が今いかなる印象を彼に與へつゝあるかと云ふ事を考へるだけでも、——簡短に云へば或何等かの主觀的な事が少しでも加はると、象形文字は混亂し且變造される。——言語の音を聞くのは、其言語の意味を理解し得ざる人に限られてゐる通りに——何となれば、言語が理解されれば、意味が直ちに符號（語）を意識から追ひ出すからである——或人の人相を見得るのは、其人とは未だ親しくない人、換言すれば、其人と度々會つたり、或は談話したりして、其顔に慣れるやうな事のなかつた人だけである。されば人が或顔の純客觀的印象と、從つて其顔を讀解する可能性とを持ち得るのは、嚴密に云ふと、初對

面の時に限られてゐる。香ひは其れが入り來つた時ばかり刺戟を與へ、葡萄酒の味は第一の杯に於てのみ本當であるやうに、顔もまたその充分な印象を與へるのは第一回の時だけである。夫故に人は第一の印象に注意深く着眼し、此印象を記憶して置かねばならぬ。もしわれらに個人的に重要な關係を持つて居る人なら、其印象を書き留めて置くがよい。——勿論これは自己の觀相力を信賴し得ることを前提とするのであるが。——其後の相識關係即ち交際は此印象を流し去るであらう。然し後になつての結果は、此印象の誤りでなかつたことを確證するやうになるものである。

併し、われらはこの場合、次の事實を隠蔽しやうとしてはならない。第一印象なるものは大抵甚不愉快なものである。——然しまた大多數の顔はどれ丈けの役に立つか!?——美しい・善良な・聰明な顔を除いては、即ち極めて少數の極めて稀れに在る顔を除いては、どの新しい顔も繊細な感じを有せる人々には、大抵驚愕に近い感じを呼び起すにとどまるではないか! それ新しい・人を驚かさやうな結合を示して、不愉快の感じを起さしめるのである。實際、それらは通常に情けなき顔附である。加之、其性質の朴素的卑俗や下劣や、或は更に悟性の動物的に淺薄狭少なことが、顔面にはつきりとあらはれて居て、どうしてかやうな顔を持つて外出す

ることが出来るだらうか、なぜ寧ろ覆面マスケを掛けないだらうかと訝アツクからせるやうな連中が世間にはある。否、一步をすゝめて、唯一目見たばかりでも、見た人の方が汚瀆クワツクされたやうに感ずる顔面もある。だから、世を隠遁して、人を近づけないでも濟む特殊の地位に居る人達が、新らしい顔を見る苦痛を全然回避して面會を拒んだからとて、これを悪く取る譯には行かない。——此事を形而上學的に説明すると、かう云ふ考察になる。即ち各人の個性なるものは、其人か生存する間、それによつて引き戻され・訂正さるべきもの其ものに外ならぬと。然し心理的説明で満足しやうとするなら、次のことを自ら尋ねて見ればよい。一生涯中、心の中には、小さい・低い・憫むべき思想と、いやしい・利己的な・嫉妬深い或は意地悪き願望とより外にはほとんど何物もあらはれなかつた人物の顔としては、どう云ふ人相が豫期されるだらうかと。かゝる思想や願望の各は、それが存在した間は、顔面に其表現を浮べたもので、すべてこれらの痕跡は屢しばしば反復せらるることに依つて、時の経過と共に、顔面上に深い皺シワを刻みつけ、これをすつかり凹ぼく凸こぼにして仕舞ふのである。夫故に大抵の人は、初めてその顔を見た時に、おそろしく思はれるのである。然しこの顔も慣れるに従つて、言ひ換へるとわれらがその印象に對して鈍感になるに従つて、その印象はもはや何等の作用をも及ぼさなくなる。

聰明慧智な人の顔は、年月を経て徐々に出来たもので、或はあまつさへ老年に至つて初めて高い表情に達することすらあつて、若い時代の肖像畫には、かゝる表情の僅かの端緒しか見られない所以は、上述の理由——即ち顔面の表情は、無数の一時的且特徴的な緊張によつて徐々につくられて行くものだと言ふこと——によつて解釋される。他方に於て、人が初めて見た顔に對して驚愕を感ずる所以は、或人の顔面が正しい而して十分な印象を與へるのは最初の時のみであると述べた前記の意見と相應する事である。故に他人の顔の印象を純粹に客觀的に且何等のまざり物なき形で受け取る爲めには、其人とどんな關係もあつてはならない。そして若し出来得るなら、其人と一度も談話を交換したことの無いのがよろしい。談話そのものが既に話者双方をいくらか親しくするもので、或種の融合フサヒルを導き入れ、相互的主觀的關係を齎すか、理解の客觀性はこのために傷けられるのである。其上、誰れでも他人から尊敬を受け、友情を得やうと努力するものであるから、觀察される人の側では、既に自分達の熟知せる虚伴術を直ぐに應用して、其顔面によつて偽善・諂諛の手管を弄し、これによつてわれらを買収するから、初めにはつきりと見えたこともちぎにもう解らなくなる。この結果は、普通には『大抵の人は、よか近く知り合ふと、得るところがある』と云ふけれど、實は『大抵の人は、より近く知り合ふと、

われらを欺くものだ』と云ふ方が正しからう。然し後になつてよくない事情があらはれて來ると、大抵は第一印象の下した判断は其正しいことが認められ、又往々自己の正しいことを嘲笑的に主張する。これとは異つて『より近い知り合ひ』が直ちに敵對的關係となる事もあるが、此時はかゝる知り合ひによつて、何等の得るところもなかつたことがすぐに解らう。より近く知り合ふことによつて利益が得られると云はるる今一つの理由は、初めて會つた時には、われらに警戒の念を起させた人物も、これと談話を交へると、彼自身の全性格があらはれて來るばかりではなく、其人の持てる修養もあらはれて來るもので、換言すれば、其人が實際に・また自然的にそれであるものばかりではない、全人類の共有財産から得たものまでもあらはれて來て、其云ふところの四分の三は、彼自身のものではない、外部から入り來つたものであることも見出される場合もあるからで、實際われわれは、かゝるモノタウル(牛人半牛の怪物)が意外にも人間らしく談話するのに驚くことが屢ある。然し、こゝで止めないで更に一步を進めて見よ。即ち『より近い知り合ひ』を今一層より近く進めて見よ。さうすれば、第一印象の時其人の顔面が期待させたところの『獸的性質』が、十分明瞭にあらはれて來るであらう。——夫故に觀相的炯眼を授けられた人は、此眼の下す判断、即ちあらゆる後來の相識關係に先行し、従つて純

眞無雜なる此判断を十分に注意しなければならぬ。蓋し人の顔面は、その人が何であるかを直截に云ひあらはすもので、若しそれがわれらを欺くならば、顔其ものの罪ではなくて欺かれたるわれらの側に罪がある。また一方、人間の言語なるものは、單に自分の考へることを云ふものであり、或はより屢只自分の學んだことだけを云ふものであり、もつと進むと、考へてゐないことを考へてゐる振りをして云ふのである。その上、われらが或人と話す時、否、たゞ或人が他の人と話すのを聞く時でも、其人の眞の人相に注意しない。これはわれらが相貌を單に基質ベーストとして、即ちたゞ與へられてあるものとして放抛し、専ら人相の感情的方面、即ち談話の際に於ける顔面の表情にのみ注目するからである。然し話者の方では、此場合よい側が表面を向くやうに心掛けて行つてゐるのである。

ソクラテースが、そのものの能力を検するやうに紹介された一青年に向つて、『君は私に君が見えるやうに話して呉れ玉へ』と云つたのは（此場合ソクラテースは「見る」といふ言葉を、只『聞く』と云ふ意味で使用したのではなかつた）正鵠を得た言葉である。何となれば、話しする時のみ、人間の顔の諸機關殊に目が活氣づいて、其人の精神的資産と能力とが顔面にあらはれ出づるものであり、かくしてわれらは其人の叡智の程度とその能力とを差しあたり評價し得

るものであるし、ソクラテースが此場合に狙つたのは、事實これに外ならなかつたからである。然し、他の點から見ると、かう云ふ議論が主張される。第一に、此規則は人心の深奥に横はる道德的性質には適用することが出来ぬ。第二に、人は話しをする際に、顔面筋肉の運動によつて其顔容はつきりと開展して行くのであるが、此開展によつて客觀的に知り得たものを、われらは間もなく、其人とわれらとの間に生ずる個人的關係によつて主觀的に喪失すると云ふ事である。此個人的關係が引き起す魅力は甚輕微なものではあるが、それでも既に云つた通り、われらを公平無私にしては置かない。此終りの方の見方から云つたら、『君は私に君が見えるやうに黙つて居玉へ』と云つた方が、一層正當であらう。

或人物の眞の人相を純正に且深刻に理解するためには、其人が孤居して自分を自分自身にうち任せて居る時に觀察しなければならぬ。あらゆる會合や、他人との談話は、既に他の人の反映を其人の上に投げるものであつて、且大抵はこれが其人に有利になる。何となれば、彼は起動と反動によつて動かされ、又このために高められるからである。然るに孤居して自己を自己に委まかされて居り、自らの思想と感情とのうちに游泳する状態にある時は——彼は全く彼自身である。かゝる時には、深刻に洞察する觀相眼は、其人の性質全體を一般に亘つて直ちに捕捉

し得るものである。何となればそれ自身丈の顔の上には、其人のすべての思想と努力との基調や、其人が將來それであるべきもの及其人が孤居する時のみ感ずる事などに就しての取消すべからざる判定が刻まれてゐるからである。

狹義に於ける人相は、人間の騙伴的の技術が、そこまでは到達し得ない唯一のものであるから、觀相は慥かに人間を知る爲めの主要なる手段である。騙伴的の技術の働き得るのは單に感情的の方面、擬態的動作の範圍に限られてゐる。かくの如く人相は騙伴的の技術の及ばざるところにあるものだから、それで私は人を見るに當つては、其人が孤居し、自己に沈潜して居る時を選び且談話しないうちに研究することを推舉するのである。其一の理由は、上述の場合に於てだけ、人間は純な・偽りのない人相を示すもので、會話が初まると、感情的方面が直ちに流れ込み、習得せる騙伴的技術が行使されるからである。今一つの理由は、一切の個人的關係なるものは、それがいかに輕微であつても、人を拘束するもので、そのためわれらの判斷が主觀的に不純になるからである。

なほ云はねばならぬ事がある。一般に觀相の道に於ては、人間の知的能力は、道德的能力よりも遙かによく解るものである。これ思ふに前者の方がより多く外部に浸出するからであら

う。即ちそれは顔と其表情とにあらはれ、歩容に示され、且いかなる小さい運動にも發露するもので、恐らく人は、或人の馬鹿か、痴呆か、天才なるかを、背後から見て判別する事が出来るであらう。運動の鉛のやうな鈍重は愚昧をあらはし、痴呆は其印章を一切の態度に捺し、才氣と思考とは同じく外部に現はれる。ラ・ブレイエールの言葉の基づく所はこゝにある。彼は曰ふ「われらの興動の、どんな細かいどんな目につかぬものでも、われらの本性を示す或ものがそこにあらはれてゐないものはない。馬鹿は入つて來ても、出て行つても、座つても立ち上つても、黙つて居ても、立つてゐても、天才ある人とはまるで違ふ」と。序に曰へば、ヘルヴェチウスに依ると、常人は天才を見つけ出し且これを回避する確かな・素早い本能を持つて居る相だが、これは上掲の意見から説明がつく。しかし天才と愚人との相異が、かく一舉手一投足の間にもあらはれる所以は、まづ第一に次の事實に基づくのである。一體頭腦が大きく且發達して居れば居るほど、また頭腦の割合に脊髓と神経とが細ければ細いだけ、知能ばかりでなく、同時に四肢の可動性や柔順さもまた増大する。何となれば、この場合、四肢は頭腦からより直接に且より、截然と支配せられ、従つて凡べてがより多く、一本の糸によつて繰られることになつて、あらゆる運動のうちには、其目的が精密にあらはれるからである。これは、動物が進化の階段

上、高等になればなるほど、より容易く、唯一個所を傷けることによつて殺すことが出来ること云ふ事實に類似する、否、これと聯關してゐる。例へば蝦蟇類を見よ。彼等の運動が鈍重で怠惰で緩慢である如く、彼等はまた愚鈍であり、同時に非常に執着的の生命を有する。これは彼等が非常に貧弱なる頭腦と、甚太い脊髓と神経とを有することから説明がつく。然し一般には歩行と腕の運動とは、主として腦の作用によるものである。何となれば四肢は、脊髓神経を介して腦髓から其運動と運動の修正（いかに小さい修正であつても）とを受けるからであり、これがまた自意的の運動はわれらを疲らす理由となるのである。そして疲労の感は、苦痛の感と同じく、腦髓のうちに其席を有するもので、われらが考へるやうに、手足のうちにあるのではない。それ故に疲労は睡眠を促進する。然るに有構的生活の運動で、腦髓から喚び起されたのではないも、即ち無意識的の運動は、疲れることなく繼續する。心臓・肺臓の運動がそれである。思考と手足の運動とは共に同じ頭腦の働らきであるから、個人の性質の如何に従つて、頭腦の働らき方の特質は、此兩者にあらはれる。愚昧な人々は木偶像デュードールのやうに運動し、英才の人のあらゆる「節はもの」を云ふ。——知力的性質は其の態度や運動よりも、遙によく顔面によつて認知される。詳しく云へばそれは顔の形、額の大きさ、顔面の諸道具の緊張と運動、特に眼のそれから認知される

——眼にも許多の階級があつて、下は豚みたいな小さい。曇つたつかれた眼から初め、幾多の中間階級を経て、天才の爛々爛々たる眼まで上つて行く。——伶俐な眼付は、いかに上等なもので、天才のそれと異なる所以は、前者が意志に奉仕してゐる事の歴然たる證據を示すに對して、後者はこれから全然離脱せるところにある。

(通常人の知力は意志に奉仕してゐるが、天才がシヨールペンハウエルの根本的見解である。の知力は意志の願使から離れてゐると云ふのなほ悉しくは天才論を見よ。——譯者註)

——夫故にスクウァルザフィキイが、其著「ベトラールカ傳」のなかで、自分がベトラールカと同時代人なるジョセフ・ブリヴィウスから傳へ聞いた事として載せてある逸話は、全然信を措くに足るものである。それに依ると、或時ベトラールカが多くの紳縉貴人の間に立ち交つて、ヴィスコンティの宮廷に出て居た時、ガレアゾ・ヴィスコンティは、當時まだ少年であつたが後にはミラーノの第一の公爵となつた子息を顧みて、臨席せる人々のなかから、最賢明な人を選び出せと命じた。少年はすべての人達をしばらく眺めて居たが、遂にベトラールカの手を握つて、父の許へ連れて行つたので、一同は非常に驚嘆したとなつてゐる。思ふに自然は、人類中の傑出者には其品位の印章を明瞭に捺押するので、子供にすら認められるのであらう。此故に私は、私の明敏な同國人諸君に忠告したい。曰はく諸君にして今一度、或平凡人を三十年間も偉大なる思想家として吹聴したくなつたら、其折にはど

うぞへエゲルみたいにビーヤホルの主人然たる人相の持主を、此對象物として選擇なさらぬやうに願ひする。自然は此男の顔の上に、讀み易い手蹟を以て、自分の得意な『平凡人』と云ふ文字を、ちやんと書いて置いたではないか。

然し人間の知力的方面に關する事は、其道德的方面即ち品性には當筈あてはまらない。後者を觀相的方法で認定するのは遙かに困難である。何となればそれは形而上的のものとして、非常に深いところに存し、身體と關係はあるけれど、知力のやうにこれと直接に結びついてはゐず、又その或部や系統と關聯してゐるでもない。且各人は自己の悟性を——一般に人間はそれに甚満足してゐるものであるが——公然と示し、且あらゆる機會に際してこれを示さうと努力するけれど、道德的方面を全く自由にさらけ出す事は甚稀れで、大抵は故意に隱匿するものだからである。そして長い練習は此隱匿を甚上手にする。また一方既に述べた通り、悪い思想と無價値な努力とは、漸次に顔面に其痕跡を残して行く。特にそれは眼に残るものである。夫故に、觀相的に批判して、われらは或人が決して不朽の作を出し得ざることを容易に保證し得るけれども、其人が決して大罪を犯さぬであらうといふ保證を與へる事は出來ないのである。

教 育 観

われらの知力の性質上、概念は抽象作用によつて直観から生ずるもので、従つて直観は概念に先立つものだと云はれてゐる。若し此過程が、例へば單に自己の経験のみを師とし、書とする人に於けるやうに、實際に行はれるなら、人は自己の概念の各に隸屬し又概念によつて代表さるゝものは、いづれの直観なりやを熟知して居て、直観と概念との兩者を精確に知り、従つて彼の前にあらはれて來る事物を、正しく取扱ひ得るのである。われらはかゝる道行を、自然的の教育と名づけることが出来る。

これに反して人為的の教育にあつては、直観世界に對する或何等かの廣い智識の存在する前に、頭腦は、他人の話を聞いたり、學習したり、讀書したりすることによつて、澤山の概念を詰め込まれる。そしてこれらのすべての概念に對する直観は、後になつてから経験が持つて來るのだと云はれて居る。然し、その時までこれらの概念は誤用せられるから、従つて事物と人間とは間違つた判斷を受け、間違つた見方をされ、間違つた取扱ひを受けるのである。そこで教育が

歪んだ頭を作ることになり、又青年時代にながく學び、ながく讀んだ後に、往々或部分は痴愚で或部分は扭けた考を以て世の中に出て、或時は小心翼翼として、又或時は大膽不敵に行動するやうな事が起る。これは頭腦のうちに一ぱいに概念を持つて居て、今やこれを實地に使用しやうと努力するけれども、其當儀がほとんど常に反對だからである。かくの如きは實際、順序を轉倒した結果で、精神の自然的な開展の順序に全く背反して、初めに概念を、後に直観を受取るからであり、また教育者が兒童の心のうちに、自己を知り、判斷し、思考する能力を發達せしめる代りに、其頭腦を他人の既成的の思想によつて充さうとのみ努める事にも因るのである。後になつて、概念の間違つた適用によつて生じた一切の判斷は、長い經驗によつて訂正されなければならぬけれど、此訂正が全然成功するのは稀である。全く無學な人々に於て屢見されるやうな常識を持てる學者の甚僅少なものは全く此理に依るのである。

この故に世界に對する智識を得ることは、教育の目標として指示され得るものであるが、此智識を得るためには、まづ、本當の末端から初めるのが教育の要諦であらう。この事は既に述べた通り、いかなる事物に就いても、直観が概念に先行し、また狭い概念が廣い概念に先んじ、

従つて教育全體は、事物の概念が互に相豫想するやうな順序で施される事を基礎とする。然し此順序のうちで或ものが省かれると、缺點ある概念が生じ、缺點ある概念から間違つた概念が生れ、遂に個人々々の流儀によつていろ／＼に扭れた世界観が出来上る。ほとんどすべての人は、この扭れた世界観を長い間——否、大抵の人は、永遠に頭腦のなかに入れて持ち廻るのである。自己自身をしらべて見ると、可成り單純な事物と關係とについての正しい・或は明瞭な理解は、随分年を取つてやつて來た事を、また折々は全く豫期しない時にやつて來た事を見出すであらう。此場合には、當該事項に關して、彼の世界に對する智識上に一黒點があつた譯である。此黒點は其人の最初の教育に於て、——それは他人によつての人工的教育でも、自己の經驗による自然的教育でも差別はない——對象物を抜かして教へたことに基づく。

だから人は智識の眞に自然的な順序を研究しやうと努め、一旦これを發見した以上は、此發見によつて方法的に授業し、兒童をして世界の事物と關係とを知らしめ、後になつては抜けがたいばかりでなく往々にしてどうしても追ひ出すことの出来ない誤れる觀念を得させないやうに努力しなければならぬ。此際まづ注意すべきのは、兒童をして、兒童自らが明瞭なる概念を結びつけてゐない言葉を使用させない事である。

(註) 子供のうちから既にわれらは、事物を理解しやうと欲する代りに、言葉で以て満足し、此言葉を暗記して、或事の起つた場合には、これによつて援助を得やうとする不幸な性向を持つて居る。此性向は後々まで残留してゐて、多くの學者の智識が單なる空言に過ぎない事の因をなすのである。

——(原著者)——

然し此場合に直觀が概念に先行する事は、いつでも要諦でなければならぬ。此反對のやり方は世間普通の事ではあるが、小兒が脚を先にして生れ、詩歌が韻律を先きにして書き下さると同じで、一個の不幸な場合たるを失はない。兒童の精神が直觀に於てはまだ甚貧弱な間に、人々は最早概念や判斷を——即ち本當の意味での『先入見』を教へ込む。そして元來、概念や判斷は、直觀と經驗とから初めて生ずべき筈であるのに、上述の如き教育を受けた兒童は、既製の装置を携へて、後で直觀や經驗に臨む事になり、順序は全く轉倒される。本來直觀は多方向的であり、且豊富である。それ故に短簡急速の點に於ては、萬事を直ちに仕末する抽象的概念と比べものにはならない。故に直觀は先入見を訂正することが出来ないか、或は出来るにしても、つと後になつてからであらう。如何となれば、直觀が、自己と既成概念との矛盾を指摘しても、此陳述は差當り一面的なものとして棄却され、或は一步をすゝめて否定され、これに對し

ては眼が閉される。かくして先入概念は何等の傷をも被らないのである。多くの人が其生涯の間、謬想や出来心や移り氣や妄想や、偏見などを持ち廻つて、遂にこれらが固定概念となるやうな事は、こんな譯で起るのである。即ちそれは根本的の概念を自己のために、直観と経験とから取り出さうと試みなかつた爲めであり、これを試みなかつたのは、また實に一切を既製品として他人の手から受取つた爲めである。世間の無数の人々が淺薄皮相であるのはこの故である。さればかゝる教育法の代りに、小兒期に於ては、智識が出来上る自然の順序に従つた教育法が採られなければならぬ。いかなる概念も直観に依るにあらずして輸入されてはならない。少くとも直観なしに信じられてはならぬ。かうすれば兒童は、少いけれど、根本的な・正しい概念を受取るであらう。而して事物を他人の尺度で測る代りに、彼自身の尺度を以て測量することを學ぶであらう。そして無数の出来心と偏見とを得ることがなくなり、従つて續いて來る經驗と生活の訓練との最良の部分、上記のものゝ驅逐のために浪費する必要がなくなるであらう。そして彼の精神は、永遠に精確・明瞭・自己より出づる判断、無偏見等になれるであらう。

一般に、小兒はいかなる點に於ても人生を實物から知るより前に、その寫しから知るやうな

ことがあつてはならぬ。此故に兒童の手に書物のみを與へることをいそぐ代りに、序を追ふて實物及人事關係を知せるがよい。特に彼等を導いて現實の純眞なる理解に至らしめ、彼等の概念をつねに直接に現實の世界から取り、またこれを現實に従つて構成し、決して他のものの、即ち書物・童話・或は他人の演説等から掬み取ることなく、従つてこれらのものから得た概念を既製品として、これを携へて現實界に臨む事などが無いやうに注意しなければならぬ。概念を先にした教育法は、頭腦に妄想を滿すが故に、或は現實の解釋をあやまり、或は自己の妄見によつて現實を變造すべく無益な骨折りをなし、かくして理論上の、或は進んで實際上の邪路に踏み込むのである。早く植ゑ込まれた妄見や、これから生じた偏見が齎す害は信じ切れぬほど大きいもので、後年になつてから世界と實人生とが吾人に與へる教育は、主としてこのものゝ除去のために用ゐられなければならないのである。ディオゲネス・ラエルティウスが傳へるところに依ると、アンティステネスは、或人の『學術のうちで何が一番必要なものであるか』と云ふ問に對して、『悪い事を忘れる事だ』と答へた意味は、こゝに基礎を置くのである。

夙い時代に吸収された誤謬は、大抵は消えがたきものであり、且人間の判断力は一番遅く成

熟するものだから、小供は十六歳までは、大きな誤謬のあり得べき學問から全く遠ざけられて居なければならぬ。一切の哲學と宗教と、またあらゆる種類の一般的意見とがそれである。其代りに彼等は、どんな誤謬もあり得ないか、或はいつれの誤謬も危険を齎らさぬものを修めなければならぬ。前者の例は算術で、後者の例は語學・自然科學・歴史等である。一般にいかなる年齢に於ても、そこで修めらるべき學問は、其年齢の智識の届き得る範圍内のもので、且全く理解さるべき資格あるものでなければならぬ。少年期と青年期とは材料を蒐集し、個々のものを特殊的に且根本から知るべき時代であつて、判断は一般にまだ止められてゐる。そして最後の説明もまだ將來に向つて延期されてゐる。判断力は、これから成熟の域に向ひ、経験を積んで行くものであるから、未だ休ましておかねばならない。偏見を刻みつけて、自身の判断に先立たしめることは心して避けなければならない。さうしないと、判断力は永久に足なへとなる。

これに反して、記憶力は若い時代に於て最大の強さと粘りを持つものであるから、此時期に主として使用されなければならぬ。然し記憶の對象は、行き届いた熟考から出る慎重な選擇を経ることを要する。何となれば、若い時分に覚え込んだ事は、永久に残留して離れないもので、

われらは此貴重な資質が出来得るだけ大きな利益を収めるやうに、巧みにこれを利用しなければならぬからである。われらがわれらの生涯の最初の十二年間に知つた人々が、いかにわれらの記憶に深く刻みつけられて居るかを思ひ、當時の出來事、特にわれらが當時経験したり・聞いたり・學んだりしたことは、大抵、消し難く印象深刻されてゐることを考へるならば、若い心の有する此受納性と強記力との上に、教育の基礎を置かうといふ考は、甚自然的な思ひつきと云はねばならぬ。此方法は、規則と規定とを嚴守して、方法的且體系的に、あらゆる印象を此受納性と強記力との上に導いて來ようとするのである。然し人間の若い時代は短くあり、且一般に記憶の能力はいつでも制限ある（個々人の記憶の力は尙更制限の多いものである）ものであるから、どの種類の學問に於ても、副次的な・價值の少ない部分を取りのけて、是主要で重大な個所を以て記憶を填充することが一番必要である。此選擇は最優秀なる頭腦を有する人々や、斯道の大家達によつて十分な熟慮を以てなされ、且其結果は確定されてゐなければならぬ。此選擇の根柢をなすものは、記憶の對象の分類で、これは二つに大別される。一は一般に人間としてこれを知る必要があり又重要な價值があるもので、他は特殊の職業又は部門に従事せる人に必要で又重大なものである。第一の種類の智識は、更にまた等級の異なるに従つて段々に廣

くなるいくつかの課程に（即ち幾種類かの百科全書に）分たれなければならぬ。而して此課程は各人の外的事情の如何によつて各人が持つと期待さるゝ一般的修養の程度に相應するものであつて、下は初步の教程に極必要な事だけに制限された狭いところから初まり、上は哲學科の一切の教程の總體にまで昇つて行く。第二の種類の智識は各専門に於ける大家達の選擇に委されて居る。此全體の組織は、知力的教育に對して特に念入りにつくられた法規を供給するであらう。そして此法規は十年毎に改正することを必要とするだらう。かゝる仕組を以てすれば、若い記憶の力は、出來得る丈けの利益を生ずるやうに利用せられ、後になつてあらはれて來る判斷力に、卓れた材料を與へることになるであらう。

認識の成熟とは、換言すれば、各人のうちに在る認識がそこに達し得る最完全な状態を指すのであるが、この眞義は、其人の抽象的概念と直觀的理解との間に精確な結合が出來た事に存する。そこで、彼の概念の各は、直接又は間接に、直觀的基礎の上に立つことになり、——これが概念に眞の價値を與ふる唯一のものである。——且彼はまた自己のすべての直觀をそれに相當する正しい概念の下に置くことが出来る。認識の成熟は經驗そのものゝみの生み出すもので

あり、従つてまた時の作り出すものである。蓋し、われらが自己の直觀によつて得る認識は、抽象的概念を通じて得るものと、大抵の場合相異つたものであつて、前者は自然的方法で得られるが、後者は他人の良い・または悪い教へや話しによつて得られるから、若い時代に於ては、單なる言葉によつて定められた概念と、直觀によつて得られた眞の認識との間の一致と聯結とは大抵はすくない。兩者は徐々に相近づいて互に訂正し合ふ。而して兩者が全く提携し合つた時、初めて認識は成熟する。此成熟は、各人の諸種の能力の他の成熟又は完成（これには大小高低があるが）とは全然無關係であつて、後者は直觀的認識と抽象的の認識との間の相應一致といふ事には關係なく、只兩者の強度によつて測定されるものである。

實際的人にとつて、最必要な研究は、世態の實相を知る事で、これについての精密にして且根本的な智識が最必要である。然しこの研究は、其終結を見ることなくして晩年まで繼續するから、あらゆる研究のうちで最退屈なものである。然し學問に於ては、人はまだ若いうちに既に其科の重要な點に通曉することが出来る。世間に就いての智識に於ては、人は若い時分に初心者として、其最初のまた最困難な課程を學ばなければならないが、成熟した年齢になつて

も、なほ且つ澤山學ばなければならぬ事が屢ある。此研究はそれ自身に於て既に著しく困難であるが、此困難は更に小説類によつて倍加される。小説類は事物と人間の行動との成行を、現實界にあり得べからざる有様で描寫する。此成行は然し若い心の輕信によつて受け取られて、精神のうちに合併される。かくして消積的の無識の代りに、積極的の誤謬としてあやまれる假定が入つて来る。此誤謬は後になつて經驗そのものゝ訓練をすら攪亂して、其教ゆるところを間違つた見方で示すのである。少年が今まで暗黒のうちに歩いて來たのなら、彼は今や此鬼火によつて邪路に導かれる。少女に至つて往々より以上に迷はされる。小説によつて、彼等の心には全然間違つた人生觀が注入せられ、決して實現され得ざる期待を持たせられる。これは大抵彼等の全生涯を通じて有害なる影響を及ぼす。此點では、若い時分に、小説を読むべき時間も機會をも全く持たなかつた人々、例へば手工業者の如きものが、遙かに有利な位置に立つて居る。但し上述の非難を蒙ることなき小説——むしろ反對に良好な影響を及ぼす小説も少しはある。例へば特によいのは、レサーヂ(佛の小説家一六六八—一七四七)のジル・ブラ及其他の作品(或はむしろこれらの小説の西班牙の藍本がよいだらう)で、次には『ヴィカー・オヴ・ウエークフィールド』やウォルター・スコットの創作の或部分がよい。『ドン・キホーテ』は上述の迷誤そのものを

諷刺的に描述したものだと思ふことが出来る。

心理的觀察

すべての動物、殊に人間は、世界に生存し且繁榮し得るために、其意志と其知力との間の或適合と釣合ひとを要する。自然が此適合と釣合ひとをより精密に・より正當にきめればきめるほど、人間はより容易に・より安全に・そしてより愉快に世を渡るであらう。此場合、眞に正當な點へ單に接近してゐる事だけですら、破滅に陥らぬやうに人間を保護するに足りるのである。従つて上述の割合の正當と適當との境界の内部には或一定の幅員がある。此際に用ゐらるべき標準は次の如きものである。意志の歩みの燈火となり、案内者となるのが、知力の職分であるから、意志の衝壓がいよいよ激甚であればあるほど、これに伴隨する知力も益々完全・明瞭でなければならぬ。かくてこそ、意欲と努力との猛烈や、激情の熾烈、情緒の激甚などによつて迷妄に陥ることなく、又無思慮・虚偽或は一身を滅ぼすやうな事をするやうに引きずられないのである。一般に意志が甚強烈で、知力が甚薄弱な場合には、間違ひなく上述のすべての弊害に陥るものである。之に反して粘液質的の性格、即ち纖弱無力な意志は、確かに僅少の知力と

調和兩立することが出来る。中庸な意志は中庸の知力を要求する。一般に意志と知力との間の不權衡、即ち上述の標準から生ずる釣り合ひから外れる事は、人間を不幸ならしめる。不權衡の割合が前述のものと反對な場合にも、同じ結果を生ずる。即ち知力の異常に強い・優勢な發達と、これから生ずる全く不權衡な知力の過重、――それは眞の天才の根本的性質を形作るものであるが――は、人生の必要と目的とに對して、只に餘計である計りではない。却つてこれらの妨害をなすものである。更にまた青春期に於ては、客觀世界を捕捉する過剰な勢力は、旺盛なる想像と缺乏せる經驗とに伴はれて、誇張せる觀念、或はまた怪奇な思想をも受納させ、又容易に此等の思想を以て若き頭腦を充填するのである。そして其結果は奇矯にして且空想的な性格の産出となる。後年になつて、經驗の教へが入り來つた後に、この状態が消失し終止した時でも、天才は普通人のやうに通常の世界と市民生活とにくはしくはなく、正當にこれと交渉し、樂たのしみに行動することは出来ない。むしろ屢奇妙な失錯をなすであらう。何となれば平凡な頭腦は、自己の概念と理解との狭い世界に於ては充分に精通してゐるので、此點では何人も彼をどうする譯にも行かない。彼の認識は常に其原始的の目的、即ち意志の用事を足すと云ふ目的に忠實であつて、決して過度に流ることなく、いつもこの目的に身を捧けてゐる。天才は

これに反して、畢竟『過剰による怪物』である。それは丁度反對に、激情的で性急な・理解力のない人物、即頭腦のない亂暴者が『缺乏による怪物』であるのと同じ譯である。

あらゆる生物の最奥深い核子を構成する「生きんとする意志」は、最高即ち最怜悯な動物に於て一番明晰にあらはれて居る。従つて其本質を彼等に於て最明からに觀察する事が出来る。何となれば、此階段以下の動物にあつては、「生きんとする意志」は未だかやうに明白にはあらはれて居ない。即ち意志の客觀化の程度が低いのである。然るに此階級以上の動物、即ち人類にあつては、理性と一緒に熟慮が來り、熟慮と共に伴^{いつは}る能力がやつて來て、意志の上に直ちに覆面をかけるから、矢張明白にはあらはれない。其故に生きんとする意志が、人間にあつて隠れなく現はれるのは、情緒又は激情が勃發した時に限られて居る。激情が表はれると、いつも信用されるのはこの譯であり、また至當である。激情は詩人の主要な題目であり、俳優の儀仗馬であるのも同じ理由からである。然しわれらが犬・猿・猫等を喜ぶのは、劈頭に擧げた理に基づくもので、彼等の一切の表出の完全なる天真爛漫が、われらを非常に喜ばせるのである。

自由な動物が、拘束されずに、其本領を發揮し、食物を索め、仔を養ひ、同種の他のものに

伍して居るところなどを見るのは、實際特殊の愉快を感ぜしめるものである。これは正にさうあるべき筈で、またあり得べき事である。そして若しそれが鳥であるなら、私はいつまでも満足^{はりつる}の念を以て眺めることが出来る。それが水鼠であつても、蛙であつても同様である。然し^{いんち}鼯鼠・鹿の如きものなら、更に結構である。——一體、動物を眺めて大に喜ぶ所以は、主として、われら自身の本性が、動物に於て非常に單純化されてあるのを眼前に見、事が喜ばしいからである。

地上には、嘘^{うそ}をつく生物は只一種しかない。それは人間である。其他の一切の生物は眞實であり・正直である。何となれば彼等はあるがまゝに、さらけ出し、感ずるがまゝに表出するからで、此根本的區別の標章的或は比喩的表出は、すべての動物が自然の姿で徘徊するのに、人間は衣服を着け、其ために醜い奇怪な姿になつてゐると云ふ事である。前の事實は、われらが動物を見た時に與へられる愉快な印象にあづかつて力あるもので、私自身は動物——特に自由な動物を見ると、非常に心うれしく思ふ。然るに人間の容貌は、衣服を着けることによつて既に不快の感じを與へる上に、人類の自然的の所有に非ざる白色や反自然の肉食・飲酒・喫煙・淫蕩及疫病などの忌むべき結果によつて、更らに一層醜化されるのである。人間は自然界裡に一つ

の汚點として立つてゐる。——希臘人が衣服を出來得るだけ制限したのは上述の事實を感得したからである。

精神的苦悶は心臓の鼓動を高め、心臓の鼓動は精神的苦悶を起させる。心の悲哀と憂苦と不安とは有機體の活動や生活機能を妨げ又困難ならしめるやうに作用する。即ち或は血液の循環に、或は分泌に、或は消化に影響する。反對に此活動が、或は心臓・内臓・門靜脈、若しくは精養^{せいじょう}其他の處に於て、肉體的原因によつて、妨げられ・阻まれ・もしくは他の方法で邪魔されるならば對象なき不安・憂慮・妄想及悲哀が生ずる。これ即ちヒポコンデリイと稱せらるる状態である。同様にまた、憤怒は人をして叫ばしめ、強く足踏みさせ、激烈な身振りをなさしめるものであるが、反對に、これと同様な肉體的表情は、それ自身の方から憤怒を増すやうに仕向け、或は極めて瑣細な原因に於てすら、憤怒の情を煽り立てる。これらの事が、意志と身體との統一と同一についての私の學説を——それに依れば肉體は、頭腦の空間的直觀のうちにあはれる意志に外ならぬものであるが——いかばかり確實ならしめるかと云ふ事を述べる必要はない。

習慣^{クセ}の力に依つてだと云はれてゐる事柄のうちで、實は原始的・生得的の性格の一定不變なる事に基づくものが許多ある。此一定不變の結果として同一の事情の下に於ては、われらはいつでも同一の事をする。従つて同一の事が同一の必然性によつて、第一回目も第百回目も同じ有様で起つた譯である。——習慣の眞の力はこれに反して、本來怠惰^{たいと}に基づくもので、人間の怠惰性は、新らしい選擇をする勞役と困難と危険とを、知力と意志とに課すまいとするもので、従つてわれらが既に昨日も行ひ、これまでは何百回も行つたことがあつて、これをすれば目的を達し得ることを熟知せる事柄を、繰返へして行はしめるものである。

然し、此事の眞理はもつと深いところに在る。何となれば、此眞理は最初に見えるよりも、もつと本來的な意味で理解され得るものであるから。一體、器械的原因によつてのみ動かされる物體に對して「惰性^{たいせい}の力」であるものは、動機によつて動かされるものに對しては「習慣^{クセ}の力」である。われらが單なる習慣から實行する行爲は、實際、特に此場合に對して働く・個性的・孤立的・特殊の動機なくして起つたもので、われらは此行爲をする際に、特に此行爲を考へることはないのである。習慣となつた行爲は最初の時だけ動機があつたが、爾後は動機を持たないのである。舊^{ふる}の動機の二次的餘響が、今の習慣であつて、其行爲を更に行はしめる丈けの力

は十分に持つて居る。それは恰も、或推衝おしよによつて動かされたる物體は、其運動を繼續するために、新しい推衝を最早必要としないばかりではなく、何物もこれを妨げなければ、永久に亘つて其運動を續けると同じである。此事は動物にもあてはまる。蓋し彼等の「仕付け」なるものは、強制されたる習慣である。例へば馬は驅逐されなくても、従容として荷車を曳いて行く。此運動は、初めに馬を驅逐した鞭鞭の餘響である。嘗ての鞭鞭は、惰性の法則に従つて、習慣となつて永久化したのである。今述べたすべての事には實際なる比喩より以上の意味が在る。これはたしかに當該事物——即ちこゝでは意志の同一性によるもので、意志そのものの客觀化の階級が非常に異なるのに相應して、同一の運動法則もかくの如く違つた形を探るのである。

『グイヴァ・ムウチョ・アーニョス』〔多くの年月を生きよ、〕と云ふのは、西班牙語の通常の挨拶であるが、長き壽命を祈る事は、全世界に於て極めて普通な現象である。此事は、生とは何ぞやと云ふ智識で以て説明することは出来ない。人間とは其本質上何であるかと云ふ事に對する智識——即ち人間は生きんとする意志であるといふ智識から説明が出来るのである。——

死後にも記憶されてゐたいと云ふあらゆる人の持つ願望、並びに高志ある人々に見られる身後の譽れを冀ふ心は、生に對する執着心から出るやうに思はれる。此執着心は、自己が現實的に生存する可能性の斷ち切られたのを見て、今やなほ殘存せる唯一つの生存を（たとへそれが單に理想的なものにすぎなくとも）、即ち一つの影法師を握まうとするのである。

程度に差こそあれ、われらは齊しく自己のなすすべての事に於て、終りの近づくを冀ひ、早く終らうとあせり、終れば喜ぶものである。只一般の終り、即ち一切の終りの終りだけは、出來得るだけ近づかないことを冀ふのが、通例である。

あらゆる別離は、死をあらかじめ味はしめ、すべての再會は、復活を前以て偲ばしめる。互に冷淡であつた人々すら、二十年或は三十年も経つた後で再會する時には、甚しく喜ぶものである。

親しきものの死に際してわれらが感ずる深い悲哀は、すべての個人のうちには、口で云ひあ

らはし得ざる或もの、其人だけに特有の或もの、夫れ故に全く取りかへしのつかぬ或ものが存在するといふ感じから生ずる。あらゆる個人には口で名状しがたいものがある。これは個々の動物にすら當^{あて}徹^{てつ}る。人が全く偶然に、自己の愛獸に致命的な傷を與へ、其爲めに動物が今や死に瀕しつゝあるのを見る時、其人は斷腸的の悲哀に打たれるものであるが、此際上述の感じは最判然と感ぜられる。

われらが、吾等の敵や反對者の死を——永い年月を経過した後ですら——われらの友人の死のやうに深く悲しむことはあり得る。——それはわれらが自分達の赫々たる成功の實見者として、彼等の居ないのを惜しむ時である。

突然告げられた・非常な幸福は、やゝもすれば其人を殺す。これは次のやうに説明がつく。一體われらの幸とか不幸とか云ふものは、單にわれらの要求とわれらに與へらるるものとの間の比例によつてのみ定まるもので、従つて既に自己の所有せるもの、或は所有すべき確かな見込のある財寶は、決して財寶とは感じない。蓋し一切の享有なるものは、實際單に消極的な性質

のものであつて、苦痛を除くだけであるのに、苦痛或は^{わざはひ}殃はこれに反して本來的に積極性のものであり、直接に感じられるからである。或物をわれらの所有とすると共に、或はこれを得べき確實な見込が立つと共に、われらの要求は直ちに昂進し、それ以上の財産と、より大なる見込とに對するわれらの受容力は増大する。これに反して持續的の不幸のために心が壓縮されて、要求が最小量まで押し下げられてゐると、突然に來た幸福を受容する能力を持ち合はせない。以前から存在せる要求によつて中和されることのないので、この幸福は今や明らかに積極的に、従つて其全力を以て作用するから、この爲めに其人の心を打破り、致命的の傷を負はせることにもなるのである。夫故に告げやうとする幸福を初めには希望させ、それから見込をつけてやり、其次にたゞ部分的に且徐ろに知らせて行くといふ熟知されたる用意は、甚結構である。何となれば、幸福の部分にも、各要求が先立つてゐるために、いづれの部分も其作用力を喪失し且より以上の事を容れる餘地を作る。かう考へて來ると『幸福に對するわれらの胃袋は底なしだが、其入口は甚狭い』と云つても差^さ間^まへはあるまい。——唐突の凶事となると、また別で、上述の言葉をすぐに適用する事は出來ない。此場合には希望がいつでもこれに反抗する。従つて凶事が人を殺すやうな働をするのは、ずつと稀である。恐怖が幸福の場合に於て同様の役割

を勤めないのは、人間が本能的に驚怖よりもつと多く希望の方に傾いてゐることに存する。それはわれらの眼が自ら暗黒に背いて光に向ふと同じである。

希望とは、或事の起れかしと願ふ心を、其事が起り相だと考へる心と混同する事によつて生れる。此愚かな心は、蓋然性ノロバビリテイに對する知の正當な評價を非常に狂はせて、或事の起る機會が千對一の如き稀な場合にも、これを容易にあり得べきものだと思惟せしめるのであるが、然し恐らく何人と雖、かかる愚かさを全然脱離しては居るまい。だが然し回復の望なき不幸は迅速な致命的打撃のやうなもので、いつも失敗しながら、なほ且ついつも復活して來る希望は、徐々に拷問して人を殺すやうなものである。

(註) 希望は、われらの本質全部——即ち意志と知力とが、これに参加する状態であつて、前者は希望の對象に達することを冀ひ、後者は對象に達する事を有り相だと算定する。後の要素の参加する部分が大きければ大きい程、そして前の要素のそれが小さければ小さいほど、希望は愈好況を呈し、これと反對の場合には愈不況に陥るのである。——(原著者)——

『絶望的』と云ふ言葉の意味は、希望にも見棄てられたし、恐怖にも見棄てられた人の心境

を指すものである。自分の冀ふものを信じ、又冀ふが故にそのものを信ずるのは、人間の自然である。これは人間に有益で且慰安的なものであるが、此自然的特質が、運命の大痛撃の度々繰返されたために勦滅され、加之自分の冀はざることが起るに違ひないと信じ、又自分が冀ふが故に其事は決して起り得ないと信ずるやうなところまで來ると、これぞまさしく絶望と名づけられた状態である。

随分度々他人を思ひちがへるのは、必らずしも常にわれらの判斷力の罪ではない。却てそれはパーコの所謂『悟性には光が缺けて居るわけではないが、只意志と激情との及ぼす勢力の下にそれが服従してゐるのだ』と云つた其状態から來るのである。何となればわれらは、何んにも知らないで居て、抑おさの初めから、つまらぬ事柄で人を好いたり嫌つたりするやうに動かされるからである。これはまた甚屢、われらが他人の人物に於て實際發見した性質だけに止まらずに、この性質から出發して、これと離れられぬもの、或はこれと相容れぬものとして考へられるやうな性質の有無を論定する結果でもある。例へば或人に寛大と云ふ性質があるのが認められると、今度は公正と云ふ性質も其人にありと推定する。こんな具合で、敬虔から正直を、虚偽から

詐偽を、詐偽から竊盜を推定するやうな事になるが、かゝる事は多くの誤謬に向つて門戸を開く所以である。何となれば人間の性格は特殊なものであると共に、われらの觀察の立脚點も一面的なものであるからである。無論性格なるものは、徹頭徹尾一貫せるもので、また内部的に相關せるものである。然し、これを構成する諸般の性質の根柢は甚深いから、與へられたる場合に於て個々の材料から、いかなる性質がこれと兩立し得、いかなるものがこれと兩立し得ざるかを決定し得るものではない。

すべての歐州語に於て個人をあらはすに、Person と云ふ言葉を以てする一般の習慣は、無自覺的だが凱切である。何となれば Persona は本來俳優の用ゐる覆面を指したものであるが、實際社會に於て何人も自分があるが、よゝに示さず、常に覆面を被つて、或役割を演ずるからである。——總じて社會的生活の全部は不斷の喜劇であつて、愚かな人々には非常に喜ばれるけれども、眞に價値ある人達には無味乾燥に感ぜられる。

まかりまちがうとわれらに危險を齎し相な事を、われらはしやべることが往々ある。然しそ

れを云へば物笑ひになり相な事には、われらは緘黙を守つて居る。後の場合には、結果が原因の後にすぐ附いて來るからである。

不正な行爲を加へられると、自然的な人間は復仇に對する渴望で燃える。又復讐は快きものであるとは屢云はれた言葉である。これによつて何の補償を得やうと企てるのでもなく、たゞ復讐そのものを樂しまむが爲めに費された多くの犠牲は、この言葉の眞なるを證明する。ケンタウル(中人半獸の傳說的怪物)のネススの傷ましい死を樂にしたものは、彼が其最後の瞬間を利用して非常に巧みに準備した復仇が必ず成功するといふ確實な見込であつた。ベルトロッティの作で、既に三ヶ國語に譯された「レ・トゥ・エ・ソレレ」と稱する短篇は、これと同一の思想を、近代的でまた尤らしい描寫で取扱つてゐる。復仇に對する人間の嗜好を、ウォルター・スコットは、正當にもまた力強く云ひあらはした。曰はく「復讐は地獄で料理された食物のうち、口に最甘美な品である」と。私は今復讐の心理的説明を試みやうと思ふ。

一體、自然・偶然又は運命によつてわれらの上に投げられた凡べての苦しみは、他の事情が盡く同一であるならば、他人の勝手な意志がわれらに負はせた苦しみと同等の苦痛を與へるも

のではない。されば、これらは自然及偶然を世界の根本的支配者と認め、これらのものからわれらの上に落ち來つた事は、同様に他のいづれの人のの上にも落ち來つたであらうと感ずるからである。さればわれらは、かゝる源泉から苦しみが來た場合には、われら自身の運命よりもむしろ人類共通の運命を、より多くなけくのである。之に反して他人の勝手な意志によつて、われらの上に苦しみ加へられると、其苦痛や損傷の外に、全く特殊な苦々しい附屬物がついて來る。それは、自分自身の無力に比べて、他人の優秀なこと——それが力に於てであつても、或は奸策に於てであつても——を感ずることである。受けた損害は、もし賠償が可能ならば、それによつて補填される。然し上述の苦々しい附屬物、即ち『貴様からこんなことをされても俺は甘んじて居なければならぬのだ』と云ふ情ない感じは、往々にして損害それ自身よりもより多くの害を與へるが、此感じはたゞ復仇によつてのみ取り除かれる。何となれば、われらは力なり・奸策なりによつて、曩の加害者に損害を仕返してやり、これによつて彼よりも自己の優越せることを示して、且曩の優越の證明を抹消し得るからである。かくて渴望せる満足がわれらの心に與へられる。従つて誇りや虚榮心の多いところには、復仇心もまた多く存在するであらう。然し、一切の願望は、それが充實されると、多かれ少なかれ、今迄の考が迷ひであるこ

とを教へるものであるが、復仇の後でもまた其例に洩れない。大抵は、期待されてゐたよろこびが、同情によつて打毀される。しかのみならず遂けられた復讐は、後になつて心をいたため、良心を苦めることが屢ある。何となれば此時は復讐の動機はもはや働かず、われらの前に残存するものは、われらの惡心の證左であるから。

遂けられざる願望の苦悶は、後悔のそれに比べれば小さい。何となれば前者は、いつも打開いた・廣漠たる將來の前に立ち、後者はとり返しがつかぬやうに完結せる過去の前に立つからである。

忍耐とは、精神の活動の反對なる黙從の状態である。故に活動が大きい場合には、忍耐とは一致し難い。由來忍耐は粘液質の人、精神的怠惰者・貧弱者並びに婦人の徳である。然るにこれが非常に有益で且必要だといふ事は、世界の悲しむべき或性質を指示してゐる。

金錢は人間の抽象的の幸福である。だから最早具體的に幸福を享樂する能力のなくなつた人

は、其全心を金錢に懸ける。

一切の我儘は、意志が認識の席へ押しよせたことに基づく

不機嫌と鬱憂メランコリイとは相互の距離が甚遠い。快活から鬱憂メランコリイへの道は、不機嫌からそこへ赴くより遙かに近い。

メランコリイは人を引きつけ、不機嫌はこれをはねつける。

ヒポコンデリイは、單に現在の事物に就いて理由なしに不快と憤懣とを感ぜしめて、自らを苦しめるのみならず、また強めて考へ出した未來の不幸に對する根據なき恐怖で自己をなやますばかりでなく、なほまた過去に於ける自己の行爲に就いての不當なる非難を以て自らを責めるのである。

ヒポコンデリイの直接の結果は、憤つたり心配したりすべきやうな事件を扱して見たり、ぼくづつ考へて見たりする事である。原因は内部の病的不興ホキダシとこれに加ふるに氣質から生ずる内的不安とである。若し両者が最高の程度に達すれば、人を自殺させるのである。

忿怒は、それが起るとすぐに、其動機を非常に擴大し且歪んで幻視させる。此幻視は今やまた忿怒を高め、高められたる忿怒は更にまた幻視を強くする。此交互作用は絶えず昂進して、終に暴怒が激發するに至るのである。

これを豫防する爲めには、元氣の旺盛な人々は、まだ怒り初めないうちに、其事件を一時忘却するやうに努めねばならぬ。何となれば其事が一時間後に歸來した時には、最早以前のやうにひどく彼等に思はれないであらうし、又恐らく間もなく、まらぬ事と考へられるであらうから。

憎悪は胸(感)のあづかることで、輕蔑は頭(性)の司るところである。自我には此兩者のいづれをも左右する力はない。何となれば彼の胸は不變であつて、動機によつて動かされる。彼の頭は恒久の法則と客觀的の輿料ダイリョウとに依つて判斷する。自我は單に此胸と此頭とを連結するだけのもので、即ち所謂結着材である。

憎悪と輕蔑とは全然反對するもので互に相容れない。加之、多くの憎悪の根源は、他人の長所に強らるる尊敬の念に外ならない。もし人がすべての憫むべき人々を憎まうと思ふなら、判

底其煩に堪えまい。然しさう云ふ人達を輕蔑すると云ふ事なら、彼等全體に亘つて、一人をも残さず、樂々と輕蔑することが出来る。元來眞正の矜持の裏面たる本當の輕蔑は、全く秘密なもので、決して外面にあらはれるものではない。輕蔑を外部にあらはす人は、既にこの事によつて自己が相手方をいくらか尊重してゐることを示すのである。何となれば、彼は此際他人に自分がどの位の少ない程度で相手を尊重するかを示さうと欲するからである。このことによつて彼は輕蔑を装つてゐるけれど、實は輕蔑とは全然別な・そしてこれとは氷炭相容れざる「憎惡」を懐いてゐることを發露するのである。眞正の輕蔑はこんなものではない。それは他人の無價値なことについての純眞なる確信で、寛大・容赦などの諸徳と結びつき居るものである。實際または自己の寧靜・安全のために、寛大・容赦等によつて、被輕蔑者の立腹を避けるのである。何となれば各の被輕蔑者は害を加へるかも知れないから。——然しそれでも純粹・冷靜・正直な輕蔑が表はれると、それは最酷烈な憎惡によつて酬られる、蓋し此輕蔑に酬るるのに同等のものを以てする事は、被輕蔑者の力のよくなし得べきところでないからである。

或不快な情緒をわれに起させる出來事は、たとへそれがごくつまらない事であつても餘響を

われらの頭腦のうちに殘し、それが持續する間、事物と狀況との明瞭なる客觀的理解を妨ぐるのみならず、一切のわれらの思想に影響を及ぼすもので、それは恰も、あまり目に接近させられた甚小さい物體が、われらの視野を局限し又歪めると同様である。

人間を無情ならしめる所以は、各人は擔ふべき自己自身の苦勞を十分に持つ事、又は持てりと思惟する事である。夫故にこれまで慣れて來たのとは異つた幸福な境涯に移された人は、大抵同情あり・悲慈深いものである。然し持續的にいつも存在して來た幸福な状態は、往々上記とは反對作用を、其境遇に居る人々に及ぼす。これは幸福な境遇が、其處に居る人々を苦しみから遠ざけるので、彼等は最早他人の不幸に同情する事が出事なくなつたからである。夫故に貧者の方が富者よりも往々にしてより仁慈な行をするやうな事が起る。

これに反して、人間を甚しく好奇的に——即ち例へばわれらが他人の行動を、すき見したり、探偵したりすることである。嫉妬も往々あつて力あるものではあるが。

或人物に對する自己の正直な意向を窺はうとする人は、其人から郵便で來た待ち設けない手紙が劈頭に自己に與へる印象に留意せよ。

折々、われらは或事を冀ふと同時に冀はず、従つて同一の事件について喜ぶと同時に悲しむやうに思はれる。例へば、われらが或方法又は或事件に於て、一つの大切な試験を通過しなければならぬし、此試験に於て勝利を得ることは、われらに對して非常に多くの價值を持つてゐるやうな場合には、われらは試験の時間の到着を且願ひ且恐れるものである。さてわれらが其時刻を待ち設けつゝある時に、其時刻が今回は延ばされたといふ事を知つたなら、われらは喜ぶと同時に悲しむだらう。何となれば延ばされた事はわれらの意圖に反するけれど、しかも一時的の安堵を與へるからである。われらが重要な手紙を期待して居て、しかもそれが延引する場合には、同様な心持が見出される。

實際かゝる場合には二つの異つた動機が働く。——強いけれど・遠いところにある動機は、試験を通過して・決定を得たいと云ふ願望で、も一つの弱いが・手近に在る動機は、現下の状態の懨懨で且煩はされるところなきことを希ふ心であり、且どうも來るらしい不幸な結末に達するより、まだ希望のうちにとよつてゐる不確定な状態の方が快いから、差當りは此好都合な位置に止まつてゐたいと云ふ願ひである。だから、われらの視野の内では、小さいけれど・近ところにあるものが、大きいけれど・遠くにある物體を蔽ひ隠すと云ふ物理的現象と同じ事が、精神方面にも起るのである。

理性はまた豫言者と呼ばれる價值がある。何となればそれは、われらの現在の行爲が未來に於て生ずる結果としての將來の事件を、われらに見せて呉れるからである。従つて理性は、淫慾・憤怒或は貪慾が、われらを誘惑して、將來後悔を感ずべき事をなさしめやうとする時、われらを制止するに最適當してゐる。

われらの個人的生活の経過と事件とは、其眞の意味と關聯との方面から見ると、モザイクの粗い作品に比べられる。人が其前に密接して立つ間は、表はされた物體を正しく認識することは出來ず、また其重要さも美しさも見ることが出來ないのである。若干の距離を置いた時に初めて、兩者が現はれて來るのであるが、それと同じく自己の生活に於ける重要な出來事の相互

間に於ける眞の關聯は、事件の進行しつつある間には理解されず、事件の終つて間もない時分にも同じく理解されないで、久しい時が経過してから、初めて明瞭になることが屢ある。

これはわれらが想像と云ふ擴大鏡を要する爲めであらうか？ 或は物の全體は、遠距離になつて初めて通觀されるものであらうか？ 若しくは情熱が冷却してゐなければならぬのか？ 將又われらの判斷力が成熟するのは、經驗といふ學校に於て初めてであらうか？——恐らくこれらすべてが協同してゐるのであらう。——然し、他人の行爲に就いては、のみならず自己自身の行爲についても、多年の後に漸く本當に理解されることが屢あるのは確實である。——而して自己の生活に於ける此事は、歴史に於ても同一である。

人間の幸福の状態は、大抵或種の樹木の群れに似た事情を有する。その群れは遠くから眺めると非常に美しく見えるけれど、これに近づき若しくはこれに入つて行くと、此美觀は全く失せてしまふ。何處にその美觀があつたかは全くもう分らなくなつて、人は只自分が木々の間に立つてゐるのを知るだけである。われらが甚屢他人の地位を羨むのも、かうした事情に基いてゐる。

鏡といふものが世の中に存在するにも係らず、どうして人は實際自己の外貌を知ることが出来ないものであらうか。従つて、何故に自己を、あらゆる知人のようにはつきりと想像のおもてに表はすことが出来ないのだらうか？ これこそ既に初めから、『汝自身を知れ』と云ふ詞に對立する困難な問題である。

疑もなく、これは或部分まで、人が鏡に向つて自己の姿を眺むる時、視線を眞直に目凝然と鏡面に向つて着けることに基づくのである。このために、眼の意味深い運動と、同時にまた眼着の眞の特征的なところが大部分まで失はれる。此物質的に不可能ならしめる原因の外になほ、倫理的に不可能ならしめる原因が働くやうに見える。人は鏡に映つた自己の像に對して、隔離的の視方(他人的の視方)をなすことは出来ない。然るに此視方は自己の姿を客觀的に理解する事の條件をなすものである。何となればかゝる見方は畢竟、深く感ぜられたる「非我」といふ觀念を有する道徳的主我主義の上に基づくものである(倫理の根本問題)第二版二七二頁参照。かゝる考方はあらゆる缺點を、純粹に客觀的に且掛價なく見んが爲めに必要である。かくして初めて鏡面の姿が眞正にあらはれて来る。然るに自己を鏡のうちに見るときには、主我主義が、いつで

も豫防的の言葉を耳にさゝやく「これは自分でないものではない、自分だぞ」。此言葉は、恰も「ノーリー・ミー・タングレ」(他からの干渉を許さぬ又)のやうな作用をなし、純客觀的の理解の妨害をする。かゝる理解はまた、少し許の惡心の醸母がなければ(人が少しくわ)、とても不可能であるかのやうに思はれる。

苦惱と行爲とに對して、各人がいかなる力を持つて居るかは、或機會が來て此力を働かして見るまでは解らない。それは丁度滑らかな鏡の如き表面を示して池中にやすらへる水を見た時、それがいかなる怒號咆哮を以て安全に岩から飛び下り、或はいかに高く噴泉となつて昇り得るかを想見し得ざると同じく、また寒冷な水のうちに在る潜熱を豫知し得ざると同様である。

オヴキツドの、

『他の動物は身を地にかゝめてゐるけれど』と云ふ句は、其本來的・物的の意味に於ては、單に動物のみに當符まるけれど、其譬喩的・精神的の意味では、遺憾ながら大抵の人間に恰當する。彼等の思惟と希求とは、全く物的の享樂と物的の幸福とに對する努力に向ひ、若しくは個人的利害の

問題に向つて居る。後者の範圍は、往々多趣多様のものを包含してゐるけれど、それらは畢竟前者に對する關係上から其重要性を得てゐるもので、それ以上は出づるものではない。この事は、單に彼等の生活法や會話が立證するばかりでなく、彼等の單なる外貌・彼等の人相・表情、彼等の歩容、彼等の身振等もまたこれを證明する。彼等に於けるすべては叫ぶ『地にかゝんで！』——だから、前掲の句に續ける下の二句は、實はかう云ふ人達には當符らない。それは只、より高い天賦を有する・より高貴な人々、即ち思索し、且眞に自己の周圍を觀察する人達にだけ該當する。そしてかゝる人達はたゞ除外例として人類の間に現はれる計りである。其句に曰はく、『彼は人類に直立の姿勢を興へ、空をながめるやうに、また舉げたる眼を星辰に注ぐやうに命じた。』

『普通』と云ふ言葉は、何故に輕蔑をあらはすものであり、『異常』『非凡』『特別』など云ふ言葉が、どうして稱揚のあらはれであるか？ 普通一般のものはすべて輕蔑すべきものであるとは一體何故であるか？

『普通』とは、其原始的の意味に於ては、凡べてのものが——換言すると其種族全體がこれ

を特有し且共有するものを指して云ふので、種族と共に置かれたるもの、種族が生得的に具有するものを指すのである。従つて人類一般が持つより以外のいかなる性質をも持たない者は、普通人である。『通常人』と云ふのは、ずつと穩かな、そして寧ろ知的方面に向けられた言葉であつて、『普通人』の方は寧ろ道德的方面を目ざして使用される。

(註) こゝで『普通』と譯したのは、獨逸語で Gemein といふ形容詞、『通常』としたのは gewöhnlich の、

とである。従つて『普通人』は gemeiner Mensch 『通常人』は gewöhnlicher Mensch である。然し邦

語で云ふ『普通人』と『通常人』との間には、上述のやうな差異のないことは勿論である。——(譯者記)

幾百萬の同族と些の勝るところもないものが、果して如何なる價值を持ち得やうぞ？ 否、幾百萬では云ひ足りない。自然が其波めどもつきぬ泉から永遠に亘つてこれを湧出せしめ、鍛冶工が鐵砧の廻りに鍛屑を飛ばすやうに夥しくこれを迸出する無限の數の同族が持つよりも以上のものを持たざる人が、果していかなる價值を持ち得やうか？

のみならず、其種族の性質より以外のいかなる性質をも有せざるものは、種族のうちに閉ざれ、種族によつて規定される生存より以外のいかなる生存をも要求すべき権利のないのが正當だといふ事は、何人にも容易に感知されたことではないか。

動物は只種族的性質を有するに止まるけれど、人間だけには眞の個性が與へられてあるといふ事を、私はこれまで度々説いた。(『倫理の根本問題』四十八頁。『意志と表象としての世界』第一卷三百五十三頁、第三版参照)。然し大抵の人には眞の個性なるものが甚少ない。彼等は個別されることが出来ない、それはたゞ類別されるばかりである。即ち彼等は類別的のものである。彼等の意欲と思惟とは、其相貌と共に、全種族の意欲と思惟とであるか、或は兎も角彼等の屬する人間的階級の意欲と思惟とに過ぎない。だから彼等の欲するところも考ふるところも、くだらなく・平凡で・卑俗で・ざらにある類のものである。また彼等の云ふ事も行ふ事も、大抵は可なり精密に豫言され得るものである。彼等は他と峻別さるべき何等の特徴的な印しを持たない。彼等は工場製造品である。

既に彼等の本性が種族のそのうちに没入してゐるなら、彼等の生存もまた種族のそれを出ないのは當然ではなからうか？ 凡俗の咀ひは人間を動物に近づける。何となれば此咀ひは人間に許すに種族のうちに没入せる本性と生存とを以てするに止まり、それ以上に進出させないからである。

卑しむべきもの・忌むべきものを云ひあらはすためには、『通常世の中にある物事』を云ふた

めに用ゐる『ゲマイン』と云ふ言葉より以外に、もつとよい云ひ現はしの存しないやうな世界に於ては、あらゆる高いもの・偉大なもの・高貴なものが、其性質上孤立の位置に立つのは、素より當然な次第である。

(註)『ゲマイン』と云ふ言葉は、事實『普通』と云ふ意味と『卑俗』と云ふ意味と兩義に使用されてゐるので、原著者はこゝを捉へて、自己の感想を述べたのである。

意志は、物ディンク、アンジヒ自爾として萬物の共通的要素であり、すべての物の元素である。さればわれらはこれを凡べての人間と共に有するばかりでなく、すべての動物と共通にこれを持ち、進んではまた動物以下の一切のものとさへ、これを共有するのである。意志といふ點では、われらはいくらゆるものと同じである。——すべてが意志によりて満され、意志に横溢して居る點から見てであるが。——之に反して或ものを他のものの上に置き、或人を他の人の上に高めるものは、認識である。夫れ故にわれらは自己を發表するに際して、出來得るだけ認識のみを働かせ、認識のみがあらはれるやうにしなければならぬ。何となれば全く共通的なものとしての意志は、實にわれらの凡庸な部分だからである。されば意志の激烈な發現は卑俗であつて、言ひ換へる

とそれはわれらを貶して種族の單なる一例證となすものである。何となればかゝる際にはわれらはたゞ種族の性格を示すに止まるから。此故に一切の憤怒・無拘束のよろこび・憎惡・恐怖——換言すればあらゆる情緒、即ち意志の運動は、若しそれが意識裡に於て明白に認識に打克ち、人間を認識する者よりも寧ろ意慾するものとして現はすほどに強烈になると、それは卑俗である。かゝる種類の情緒に身を委ねることに於ては、最大の天才と雖も最卑俗な人間と同等の位置に來るものである。これに反して眞に非凡で——即ち偉大であらうと欲するものは、いかに誘惑されても、意志の優勢な運動をして彼の意識を全然占領せしめるやうな事があつてはならない。例へば彼は、自己に對する他人の惡意を、靜かに認識し得て、自己に惡意の起るを感ずるやうなことがあつてはならぬ。實際、偉大な精神の最確實な徵證は、その人が自己に對する他人の侮辱的な表出を、他の多くの缺點と同じやうに、直ちに話者の知識の缺乏に歸し、この表出を心に感ずることなくして只これを觀察するに止まることにある。グラシアーン(西班牙十六世紀末の著述家)が、『自己が人間であることを人に示すが、一番男たるものに相應はぬ事だ』と云つた眞意は、また上述の事から理解し得られる。

斯の如きが故に、人は自己の生殖器を隠すが如くに、自己の意志を隠さねばならない。勿論

両者はわれらの存在の根本ではあるけれど。また人は自己の顔貌だけを他人に見せるやうに、認識のみをあらはさなければならぬ。これを犯せば卑俗と云ふ罰をまぬかれない。

戯曲の取扱ふところは全く本然的に激情と情緒とであるが、戯曲に於てすら、両者は較もすれば、卑俗の姿であらはれる。此傾向は特に佛蘭西の悲劇作家に認められる。彼等は激情の描寫より以外にもつと高い目的を抱かなかつたので、或は高慢けな、笑ふべき動感グロテスクのうしろに、或は警句的皮肉の背後に、事件の卑俗性をかくさうとする。私は有名な俳優のラハル嬢がマリア・スチユワルトを演ずるのを見たことがあるが、マリアがエリザベスに對して激怒した時——成程それは上手に演ぜられたけれど——ふと一漁婦を想起せしめられた。彼女の演技に於てはまた、最後の訣別の場に、一切の高揚性が、即ち一切の眞の悲劇的性質が全然失はれて居た。尤此性質については佛人それ自らが一般に何等の概念をも持たないのであるが。——伊太利婦人リストリイは、此役を比較にならぬほど上手に演じた。これは伊太利人と獨逸人とは、多くの點に於て非常にちがつてはるるが、藝術に於ける熱誠・眞摯・眞實等に對する感情に於ては互に一致するからであつて、かゝる感情を全く有せざる佛人とは、此點に於て好箇の對照を形作る。此事實はまた何かにつけて現はれる。

(註) こゝを讀むには、戯曲『マリア・シュツワルト』がシルレルの作なることを記憶して置かねばならぬ。——譯者——

卑俗の否定たる高貴或はまた崇高は、意志の反對たる認識によつてまづ戯曲に入つて來る。何となれば認識は意志のあらゆる運動に超絶して自由に翱翔し、これを自己の觀察の材料にさへするからである。特にこの事を一般に示したのは沙翁であるが、ハムレットはとりわけこれを明瞭に示して居る。認識が向上して一切の意欲と努力との空虚なることが其眼に映するやうになり、其結果として意志が自己を撤退するところまで行くと、戯曲は眞に悲劇的となり、從つて本當に崇高となつて、自己の最高の目的を達成するのである。

知力の縮力エネルギイが緊張せりや、弛緩せりやに從つて人生がわれらの目に映する姿がちがふ。一は人生が短かく・小さく・須臾で、そのうちにあらはるるいかなるものも、われらを動かす價値なく、快樂でも富でも名聲でも、すべてはつまらないものであつて、人がどんな過失を犯しても其爲めに失ふところの多い事はあり得ぬやうに思はれる。然るに一はこれと反對に、人生はわれらが其財寶の分配にあづかり、其勝利賞を占有し、われらの計畫を實行することなどのため

には、全心を傾けて熱中する價值がある位に、永久で偉大で、此上もなく大事なものであり、意味は長で且むづかしいのであるやうに知力の眼にうつる。後の見方は内在的のもので、グラシーンの「人生は全く眞面目に取らるべきものである」と云つた言葉の意味するところであり、前者は過境トランス境シット的のもので、オヴキットの所謂「そう價值があるものではない」と云ふ言葉が、これに對する良い云ひ現はしであるが、プラトーンが「人生に於ては何ものも大なる骨折に價せず」と云つた言葉は、更に上乘な表現である。

第一の心的状態は、意識の裡に於て、認識が優勢を占め、單に意志に奉仕することから離れて、人生の現象を客觀的に理解し、生の空虚にして無益なる所以を明瞭に洞察してあやまらざる事から生ずる。第二の心的境地にあつては、意欲が主宰的の位地に居て、認識はたゞ意欲の對象を照して、そこへ赴く道を明あかるくするために過ぎない。——此二箇の人生觀のうち、いづれが主宰するかに従つて、人間の大小が定まるのである。

各人は自己の視界の終るところを以て世界の終るところだと思惟する。視覺方面に於て、天と地とが地平線上で接觸するやうに見える事が避け難いと同じく、知力的方面でも同様の現象

が避け難い。人生に於ける多くの事は此理に基づくけれど、殊に各人がわれらを測るに、裁縫師の卷尺にも比べつべき自己の尺度を用ひ、われらもこれに甘じなければならぬと云ふ事實はこれに基づくのである。各人が自己のちいさ小ささをわれらに負はせ、其假説がきつぱりと承認されるのも同じ譯に依るのである。

世には、だれの頭腦の中にも明晰確實に存在することはほとんどなく、唯其名前によつてのみ生存を保てる若干の概念がある。例へば「慧智」の概念は此種のものである。此概念はいかばかり漠然たる状態ちいさで、ほとんどすべての人の頭腦のうちにあるであらうか！ 試みに哲學者達の説明を見るがよい！

「慧智」とは、單に理論的完全ばかりではなく、實行的の完全をも云ひあらはすものであると私は思ふ。私ならばこれを次のやうに定義するであらう。慧智とは、事物全般に互つての完成された・正しい認識であつて、それが其人の行爲を到るところに於て指導し、いかなる行動にもそれがあらはれる位に、其人に充分に浸徹したものであると。

内心に於けるすべての獨創的な・従つて純粹なものは、自然力のやうに無意識的にはたらく。意識を通過したものは、これによつて一個の表象になつたもので、従つてこのものの發表は云はゞ一個の表象の報告である。されば性格と精神との一切の純粹にして堅實なる諸性質は、根源的には無意識なものであり、また無意識なものとして深い印象を與へるのである。此種のもので既に意識的になつたものはすべて訂正されたもので、故意的であつて、従つて最早矯飾し即ち欺瞞に移り行いたものである。人間が無意識になすことは、何等の骨折をも必要としない。然しまたいかなる骨折によつても代理されるものではない。一切の眞の事業の根底に横はり、その根本核子をなす原始的考想の發生もまた此種に屬する。夫故に只眞に生み出されたもののみが、純正にして堅牢である。されば或事をなさんとする人は、いかなる事件に於ても、行動に於ても、執筆に際しても、描現ビズに際しても、規則を知らないで、しかもこれを遵奉しなければならぬ。

多くの人は、愉快な微笑を有し、これによつて人心を獲るといふ事情に生涯の幸福を負ふのは疑ふべからざる事實である。——然し相手の人々は用心して、ハムレットの覺え書きから

『人は微笑し得て、同時に惡漢であり得る』と云ふ言葉を取り出して考へて見るがよからう。

偉大にして光輝ある諸性質を有する人には、自己の缺點や弱點を承認したり見せたりする事を何とも思はない。彼等はこれらを、既に支拂済のものと考へ、或は一步をすゝめて、これらの弱點が彼等に不面目を與へるよりも、寧ろ彼等の方から、弱點に光榮を與へることになるであらうと思つてゐる。これらが所謂『必須的制約』として、彼等の偉大な性質と直接に關聯してゐる場合には、特にこれが事實としてあらはれる。デョオルヂ・サンドの言葉に依ると、各人は自己の徳の缺點を持つのである(勇氣ある人には、勇氣のある爲めの缺點があると云つたやうな意味)。

これに反して、良い性格と非難されるところなき頭腦とを有する人々の中に、自分の少數な而して輕微な弱點を承認せず、むしろこれを祕しがくしにかくして、一寸でもこれに關係したことに觸れると、おそろしく敏感に感受する人達がある。これは彼等の尊敬される理由が、無過失・無缺陷といふことにあるので、若し缺點が暴露すると、其尊敬を受ける程度が直ちに低められるから、それを恐れることに由るのである。

中庸な能力を有する人にあつての「謙遜」は、純然たる正直であるけれど、大なる能力を持つて人達の「謙遜」は偽善である。されば前者には「謙遜」が似つかはしいやうに、後者には異常な力の自覺を公けに示し、此自覺を隠すところなくあらはす方が似つかはしい。これに就いての甚よい例を、ヴァレリウス・マクシムスは「自信について」といふ章に掲げてゐる。

調教され得る資格(仕込まれ得る、教へ込まれ得る資格の義)に於ても、人間は一切の動物を凌駕する。マホメット教徒は、日に五回メツカに顔を向けて祈禱するやうに教へ込まれると、壞こぼちがたき習慣としてこれを行ふのである。基督教徒は一定の場合には十字を切り・稽首することなどを教へ込まれて居る。蓋し宗教は一般に調教の眞の傑作であつて、思考能力を調教するものだからである。そして調教することは、人々の知れる通り、いくら早くから初めても早過ぎることはない。どんなに譯の分らぬ理窟でも、六才以前から絶えず嚴かな眞面目さで説き聞かされて頭腦に刻みつけられるならば、しつかりと頭のうちに收まり得るもので、此手段を用ひてもなほ納得されぬやうなものはない。これは動物の調教と同じく、人間の調教もまた若い時代に於て完全に行はれるからである。

貴族は、自己の誓言を神聖に守り、騎士たる名譽についての奇怪な掟おきてを、全然眞面目に、堅苦しく且確實に信奉し、必要な場合には死を以て此掟を守り、國王をより、高い種類の人間として心から認めるやうに仕込まれて居た。彼等の受けた調教はこの外に出なかつたのである。——鄭重な禮儀を示すことと御世辭、特に淑女に對する恭しい懇勲振りは調教に基づくもので、門地・地位・稱號等に對する尊敬も同様である。われらに對して向けられた或言葉にきちんと釣合つてわれらの心のうちに生ずる不快感も同様である。英國人は紳士でないと非難される事を、死刑に償する罪を犯したと云はれると同じやうに考へるやうに、但し嘘をつくと云ふ非難はそれ以上に考へるやうに教へ込まれてゐる。佛蘭西人は卑怯未練だと云ふ非難を、獨逸人は馬鹿だと云ふ非難を、英人が非紳士的だと云はれたと同程度に重く取るやうに教へ込まれてゐる。——多くの人々は、或種類の事柄に於ては、堅い正直を守るやうに教へ込まれてゐるが、其外の事に於ては正直を示すことが甚少ない。だから多くの人は金錢なら盗まないけれど、間接に享樂を與へるものなら竊み取るやうな事が随分ある。又多くの商人は躊躇せず嘘をつくれど盗むことは全然しないのである。

醫師は人間をその全體の弱所に於て見、法律家は其の惡に於て、神學者は其痴愚に於て見る。

私の頭腦のうちには、常在的の反對黨があつて、私がなした又は決定したすべてのことに對して後になつて論駁する。熟考を経てしたこと決して對しても同様である。然し論駁するからと云つていつも正理をその側に持つてゐるのではない。これは思ふに訂正をする試験的精神の一つの形に過ぎないものであるが、然し往々私に向つて無理な非難を加へる。この事は他の多くの人々にもあらうと私は推する。何となればだれが自己に向つて下のやうに云つてはならないであらうか？

『その事を成就しやうと努める熱心が、おんみを後悔せしむることなき位に幸福なるどんな仕事をおんみは思ひつくか？』

活動し始める爲めには、必ずしも常に感覺の興奮を要とせざる位に強い直觀的な頭腦の働きを有する人々が、多くの想像力を持つのである。

之に相應して、外部の直觀が感覺を通して内界に輸入されることが少ければ少ないほど、想

像力はいよいよ其活動を増して来る。牢獄または病室に於ける永い孤獨や、一般に靜寂・薄明・暗黒等は想像力の活動に必要である。これらのものの影響の下に、想像力は自發的に其活動を開始する。反對に直觀に對して現實的材料が澤山に與へられると——例へば旅行中とか、世間の雜沓裡とか、白日とかに於けるやうに——想像力は休止して、いくら要求されても活動を初めない。これは想像力が、時機の非なるを知らからである。

然し想像力の貯藏室を充たすものは、外界から来る材料だけであるから、其豊かな活動を示さんがためには、この材料を澤山に攝取しなければならない。また想像力の食物は肉體の食物に於けると同じである。肉體に多くの消化すべき食物が外界から入れられた時は、あらゆる仕事に最不適當な時であつて、仕事を休みたがるものである。然し肉體が後になつて適當な時機が來ると、そこにあらはして來る一切の力は、實に此食物のお蔭であるが、想像力に就いても全く同一な事が云はれる。

『意見』といふものは振子の振動の法則に従ふ。振子は、一方の方向に於て重心を越えて進んだだけの長さを、他の方向に於て進まなければならぬ。そして或時間を経過した後、初めて

眞の靜止點を發見してそこに停止する。『意見』もさうである。

「空間」に於て、「距離」が一切の事物を收縮せしめ、其大きさを縮めて見せ、これによつて其缺點と短處とが眼に映らなくするやうに——従つて收縮鏡や暗箱に於ては、一切が實際に於けるより、つと美しくあらはれるやうに——これと同じ働きを「時間」に於てなすものは「過去」である。遙かに過ぎ去つた光景と事件とは、それに參加せる人々と共に、記憶裡に於ては甚愛らしく見える。蓋し記憶なるものは一切の非主要的なもの及不快を起さしめるものを剝落せしめるからである。かゝる有利な條件を缺ける『現在』は、いつも缺點だらけに見えるのである。

また空間に於て、小さい物體が近いところでは大きく見えるやうに、また甚近いところに置かれると、われらの全視野をすら占領するに至るけれど、いくらか遠ざかると、小さく且見窄らしく見えるやうに、時間にも全く同じ關係がある。われらの日常の生活や行爲に於て生ずる小さい出来事や不幸や事變やも、それが現在のものとしてわれらの眼前に横はる間は、われらに大きく、重要で大切に見え、従つてわれらの情緒・憂慮・不満・激情を喚起するけれど、疲れる事なき『時』の流れが、これらの事件をほんの少しでも遠ざけると、——今まで大きく見える

たのは近いからであるが故に、——すぐにつまらないものになつて、いかなる注意をも引く價値がなくなり、そして間もなく忘却せられる。

『よろこび』と『悲しみ』とは表象ではなくて、意志の感動であるが故に、記憶の圈内に存するものではない。われらはわれらの嘗つて經驗した『よろこび』と『悲しみ』を喚び返す事は出来ない——換言すればこれをまた新に喚起する事は出来ない。われらはたゞ當時この感動に隨伴して居た表象を思ひ浮べ得る丈けである。特に然しわれらはこれらの感動によつて叫び出された言葉は、これを想ひ出し得るもので、これによつて其『よろこび』と『悲しみ』とがいかなるものであつたかを測定するにすぎない。夫故に『喜び』と『悲しみ』に就いてのわれらの記憶は、いつも不完全なものであつて、それが過ぎ去ればわれらには無關心なものとなるのである。だからわれらは、過去の歡樂または悲痛を、再び潑瀾と想ひ浮べやうと努めても無効に止まる譯である。これは兩者の本質が意志の圈内に存することに依るからで、意志はそれ自身に於てまたそれ自身として、何等の記憶を持つものではない。抑記憶なるものは、知力の一作用であつて、知力は其性質上單なる表象より以外の何物をも與へずまた何物をも有せざる

ものである。而して表象は上掲の場合には問題となるものではない。——不仕合な時には、過ぎにし幸福の時代を甚明瞭に思ひ浮べるが、この反對に仕合な時には不幸な時代を甚不完全に且冷淡に想起し得るに止まるのは甚不思議である。

記憶のために憂慮すべき事は、學びたる事項の混亂や混同であつて、眞の「詰め過ぎ」は心配すべきものではない。記憶力が、學習された事項のために減せらるる事のないのは、砂に形を與へる型を何度連續して用ゐても、形を與へるといふ能力を少しも減じないのと同である。此意味に於ては記憶は底なしである。然し智識が澤山になり且多方面になると、突然に要求された事項を記憶裡から見つけ出すために、時間が段々餘計にかゝつて来る。何となれば其人は恰も大きい且多種多様のものが入つてゐる倉庫から、丁度要求された商品を捜し出さねばならぬ商人の如くであるからで、或は又本來的に云ふと、彼は自己のなし得る多くの思考過程のなかから、以前の練習のお蔭で、丁度今要求されたるものへ導くところの思考過程を呼び起さなければならぬからである。蓋し記憶は保管する容器ではなくて、單に精神力の練習能力にすぎないからで、従つて頭腦は其一切の智識を常に只潜在的に所有してゐるに止まり、決して現存的に所持してゐるのではない。

折々、私の記憶は、他國語の或單語或は私の熟知せる或名前又は或藝術用語を思ひつかない事がある。かゝる場合に、私はこれを思ひ出さうとして長い間又は短い間、苦んで見るが、しかも何の効もなかつた時には、私は此事件を全然思ひ切つて仕舞う。然るに一二時間のうちに或は稀れにはもつと後れて、又折々は四週間乃至六週間の後に、捜された言葉が、全く別種な思想の間に挿まつて突然頭に浮んで来るやうな習慣が私にはある。その状態も外部から私語さごかれたかのやうである（其折は記憶術的標號によつて、暫くの間これを心のうちに確持して居て、それが本來の記憶に再び刻みつけられるやうにするがよい。）私は、づつと前から、此現象を度々觀察し且驚嘆して居たが、今では次のやうな説明が本當だと思はれるやうになつた。私の意志は、苦しい・然し無効な搜索をやつた後で、なほ其言葉に對する熱望を保持し、此言葉に對する一人の見張番を知力のなかに立てておく。後になつて私の思想が進行し活動してゐるうちに、同じ人の見張番を知のうちに置く。さて後になつて、私の思想の進行し活動してゐる間に、同じ起首きしゆの文字を持つた言葉、または前の言葉に類似せるものが、偶然にあらはれると、見張番は飛びかかつてこれを襲ひ、求められた言葉にこれを補填する。かくして彼は所要のものを捕獲し、突

然に凱歌をあけて曳摺つて来る。然し私自身としては、どこで而してどうして彼が此言葉を捉へたかは知らない。だからその來たことが他から私語（さしご）れたかのやうに思はれるのである。それは丁度單語を暗（くら）で云ふことの出來ない子供に、教師がその第一又は第二の文字を一吋與へると、直ぐにその言葉が出て来るやうなものである。——此成行が生じないと、仕舞ひには組織的に、アルファベートのあらゆる文字に當つて見て、此言葉を捜すこととなるのである。

直觀的の形象は、單なる概念よりも、堅く記憶のうちに止まる。だから想像力の天賦ある頭腦は他の人々よりも、容易く外國語を學習し得るのである。それは彼等が新しい言葉と直觀的の形象とを直ちに結びつけるからである。然るに他の人々にあつては、自己の國語の同意語をこれに結びつけるだけである。——

記憶に編み込まうとするものあらば、出來得るだけそれを直觀的の形象に還元しやうと試みるがよい。それが直接であらうと、或は事物の例としてであらうと、或はまた單なる比喩又は類似としてでも、または其他の方法に於てでもかまはない。蓋しすべての直觀的なるものは、單に抽象的に考へたもの、或は又單なる言葉よりも、ずつと堅固に記憶のうちに止まるものだからである。夫故にわれらは讀んだことよりも、経験した事の方を遙かによく保留してゐる。

直接保持を機智によつて間接保持に變ずる術を、記憶術と名づけるのは不適當である。寧ろ記憶の一切の特性を説明し、又此特性を記憶そのものの根本的な性質から、續いてまた特性相互間の關係から誘導して解説する系統的の理論を指す方が適當である。

學ぶのは折々に過ぎないが、忘れるのは一日ぢうである。

われらの記憶は節のやうなもので、年月を経過して使用される度数が多くなると、節に残る部分が段々少くなる。われらは年を取るにつれて、今記憶に託したのも、記憶から消え失せることが段々早くなる。然し若い時代にしっかりと頭に入つたものは、いつまでも殘留する。此故に老人の記憶は、事件が遠い過去に關すれば關するほど、愈明瞭になり、現在に近づけば近づくほど明瞭の度が減じて来る。恰も其眼の如く記憶も遠視になつたのである。

人の生涯には或瞬間があつて、其時にはわれらの受容力が高昇して——此高昇には然し特に外的の機縁はなく、寧ろ其瞬間から生れ出たもので、たゞ生理的にのみ説明されるものである

心理的觀察

——外界や現在の感覺的理解が高い而して稀有な程度にはつきりして来る。このために該瞬間は後になると記憶裡に消えがたいやうに刻みつけられて殘留し、其全個性を保存してゐる。然しわれらは何の爲めに然るやを知らないし、また類似せる瞬間が幾千とあるなかで、何故此の瞬間のみがいつまでも保留されるのか解し得ないのである。恐らくこれは全く偶然な事であつて、たとへば今では滅絶した動物の個々の標本が岩石の層のうちに保存されてゐると同じであり、または本を閉す際に間に挿まれて押しつぶされた昆蟲のやうなものであらう。此種類の記憶はいつでもうれしく又快いものである。

ずつと前に過ぎ去つた出来事が、一見するところ、何等の機縁もなく、突然に且活潑に記憶裡に浮び來ることが折々あるのは、多くの場合、次の事情から來るのであらう。即ち、輕微な・ほとんど明瞭な意識にまではならない匂ひが、嘗つて或事件に隨伴したと同じやうに、今も亦感得されるといふ事情によつて、其事件が突然浮んで來るのであらう。何となれば、匂ひは人の熟知する通り、特に容易く記憶を喚び起すものであり、一面また「聯想」なるものは、一般に極めて僅かの刺戟によつて起り得るものだからである。序でに曰ふと、眼は悟性の感覺

であり、耳は理性の感覺であり、匂ひは記憶の感覺である。觸覺と味覺とは、接觸といふ事に固着せる現實主義者で、理想的方面を少しも持つてゐない。

記憶の特質の一つは、また次の事である。輕い酔は過去の時代と場面との思ひ出を、屢甚しく高めるもので、しらふの状態でなし得るよりも、より完全にそれらの有様を思ひ出させる。これに反して酩酊中に自分の云つた事・した事の記憶は、通常よりも不完全なものであつて、甚しい酩酊の後では、全然存在しないのである。されば酔は思ひ出を高めるけれど、これに材料を給することはほとんどなきものである。

非常に大きな能力を有する人々は、尋常の頭腦を持つ人達とよりも、非常に劣等な頭腦の人とより多く和合するのが通常である。これは暴君と愚民、祖父母と孫とが、自然的の同盟者であるのと同じの理に基づく。

人間は内部に向つての活動がないと、外部に向つての活動を要求する。之に反して内部的活

動が行はれる時には、外部的活動は甚厄介な・また往々忌々しい攪亂と妨害とを與へるものとなる。仕事のない人のせかせかした態度と目的のない旅行癖とは、前者によつて説明される。彼等をしてかやうに諸國をうろつかせるものは、國內に於ても笑止なほど彼等を群つて走らせたり・押し合ひをさせたりするものと同一物で、『退屈』が即ちそれである。此見方の誤らざる事に對する選りぬきの確證を、或時私の知らない五十歳ばかりの人が私に與へた。其人は遠い國々と他の大洲とを漫遊して暮した二年間の旅行に就いて私にいろいろの話をしたが、私が彼に向つて、其折にはたしかに大きな困難や缺乏や危険などを凌いだらうと訊ねた時、彼は直ちにそして何等の序説もない所謂『省略推理法』の前提の下に、極めて素朴な返事をした。「私は一瞬間も退屈しなかつた」と。

人々が孤獨で居る時に退屈を感じるのを自分は別にあやしまない。彼等は獨りで笑ふことは出来ない。のみならず、かゝる事は彼等には馬鹿けた沙汰と思はれるのである。——一體『笑』は單に他人に對する信號であり、言葉の如く單なる符徴に過ぎないであらうか？——彼等が孤獨で居る時に、其笑を防遏するものは、實は想像の缺乏であり、精神一般の活潑さの缺乏である。

動物は獨りで居ても、群居しても笑はない。

人間ぎらひのミゾンが獨りで笑つて居た時、或人によつて不意に見つけられた。其人は、何故彼が一人で居る時に笑ふかと質問した。——『それだから(一人で居るから)こそ笑ふのさ』と彼は答へた。

劇場に行かないものは鏡なくして化粧する人と同じである。然し友人に相談もしないで自分の事件の決定をなす人はそれよりなほ悪い。蓋し人は萬事に最正しい・最適切な判断を持つことは出来ても、自分自身の事件だけではさうは行かない。何となれば此場合には、意志が直ちに知力を混亂させるからである。だから人は、自分の事に就いては、友人などに相談して見なければならぬ。それは醫師が誰れをも療治するが、自分だけはやらないのと同じの理由からである。

あらゆる活潑な會話に伴ふ如き、日常の自然的な身振・手眞似は、一個の特別な言葉であつて、しかも言語を以てする言葉から離れて、すべての國民に於て同一である限り、言語の言葉

よりもより一般的な言葉である。然し各國の國民は、其性質の活潑不活潑の度に應じて、身振手真似をするものであり、且個々の國民（例へば伊太利人）にあつては、自然の身振りが二三の僅少な・單に傳襲的な身振によつて——従つてたゞ地方的にしか通用しない身振によつて増されてゐる。かゝるものに普遍性のないのは勿論である。

本來身振り・手真似の普遍的性質は、論理や文法の普遍性に似たもので、其度々の談話の資料を云ひあらはすのではなくて、單に其形式を表現することに基礎を持つてゐる。然し論理や文法の普遍性と違ふところは、身振手真似が、單に知力的方面に關係するばかりではなく、また道德的方面にも——換言すれば意志の活動にも——關係する事である。されば身振りは丁度正しく進行する主調低音がメロディーに伴隨して其の効果を高くする如く、談話に伴隨して、その効果を高める役を勤めるのである。こゝで興味のある事實は、談話の資料的方面即其材料が——換言すれば其時々的事件がいかにか異つて居やうとも、話しの形式的方面が同一であるならば、身振はいつでも全く同一だと云ふ事である。夫故に私は、例へば窓から、或活潑な會話を見物すれば、一語をも聞かないで居て、しかも其一般的な——換言すれば單に形式的・典型的な——意味を非常によく理解する事が出来る。何となれば、私は誤りなく次の事を認めるか

ら。即ち話者が今や議論しつゝあつて、理由を陳述し・限定し・主張し而して勝ちほこつて其結論をなす有様や、話者が今報告しつゝあつて、例へば自己に加へられたる不正な行爲を明白に説明し、相手方の頑固・愚昧・剛愎などを、ありありと且非難的に描述しつゝある有様や、或はまた彼自身が巧みなる計畫を案出し且これを實行した顛末を物語り、次いで意氣揚々として其成功を説明しつゝある状態、又はそれにも拘らず運命の冷遇によつて一敗地に塗れた事を啣つたあるさま、または此場合に自分が意氣地なくも途方に暮れた次第を告白し、若しくは自分が他人の奸策を丁度適當な時に發見し洞察し、自己の權利を主張することによつて、或はまた自己の力を用ゐることによつて、此奸策を水泡に歸せしめ、其創案者を懲らしめた顛末を語る有様などを、間違もなく認めるのである。其他これに類似せることはいくらもある。然も本來的に云へば、單なる身振がわれらに示すものは、全談話の道德的又は知力的方面の主要なる内容の抽象化されたものであつて、従つてそれは會話の精髓であり眞の實體であるが故に、會話の機縁がいかにか違つて居やうとも、従つてまた材料がいかにか異なつて居らうとも、常に同一であつて、これと材料との關係は、概念が、それに包攝されたる個々のものに對する關係と同一である。身振りに關して最興味あり且最面白い事は、既に述べた通り、同一の事情を云ひあらは

すためには、其使用者がいかにより異つてゐても、身振は同一であり固定してゐること、恰も或國語の單語は誰れの口から出て同一であると同じである。尤も言語は個人の發音法や教育の僅少の相違によつて變化を受けるものであるが、これと同意味の變化を、身振りもまた個々人によつて受ける事はある。——此固定せる・一般に遵奉せらるる身振の方式は、決して協定されたものではなく、自然的且原始的で、本當の自然の言葉である。勿論模倣や習慣によつて強められてゐることはある。——身振の詳細な研究は、人も知る通り、俳優にとつては必要であり、次いで、——それより少し範圍は狭いが、——公開演説家に必要である。然しそれは主として觀察と模倣とから成り立たねばならぬ。何となれば、身振りについては、或二三の全然一般的な指導原理（例へば身振は言語の後から離れて行つてはならぬ、むしろ言語を通告したこれによつて相手の注意を喚び起しつ、いつも言葉に先んじて行かねばならぬといふが如き原理を指す）を除いては、蓋し抽象的の規則に還元されるものではないからである。

英吉利人は身振りに對して、一種獨特の輕侮を有し、これを下品でまた卑俗なものと考え。——然し私の考に依ると、これは正しく英國流の『似而非謹慎』の愚劣な偏見にすぎないのである。何となれば、身振りは自然が各人に賦與し、そして各人がこれを理解する言葉だからで

ある。夫故に例の御評判の紳士感情の爲めだと云ふ以外に何の理由もなくして、これを廢止したり禁遏したりしやうとするのは、思はざるの甚しい事であらう。

生存空虛の説

生存の空虛なる事は、生存の全形式に於て、『時』と『處』とに於ける個人の有限なるに比べて此兩者それ自身が無限なることに於て、現實の唯一の生存法式としての刹那的現在といふ現象に於て、或は一切の事物は相關聯し相依憑するものなることに於て、または、世にかつて常住するものあることなく、凡ては絶えず流轉し變化するものなることに於て、或はまた滿つるを知らざる望蜀の念に於て、最後にまた人間の努力には常に妨礙が加へられ、人生はこれを克服するまで、これと戦ひ、これを切り抜けて進まねばならない事に於て、明らかにはあらはれてゐる。『時』と、『時』のうちに於ける・また『時』によつての萬物の轉變とは、單に形式に過ぎないものであつて、此形式の下に於て、『生きんとする意志』は——物ダイングランズイヒ自爾として不滅・恒久なる『生きんとする意志』は、自己の努力の空しきことを示されるのである。——『時』なるものは、その力を以てすると、すべてのものが如何なる時にも、われらの手のうちに於て『無』になるものであり——従つて萬物は此力のためには其眞の價値を喪失する。

嘗つて存在したものは、今は最早存在しない。今存在しないと云ふ點では、丁度嘗つて存在しなかつたものと同一である。然し現在存在するすべてのものは、次の瞬間には既に存在したとなる。だから現在、それがいかにつまらぬものであらうと、最價値ある過去よりもすぐれてゐる。前者が現實だからである。そして前者が後者に對する關係は、『有』が『無』に對すると同じである。——

人は幾千年か生存して居なかつた後に、突如として、生存のうちに表はれ來つて自らも驚くのであるが、間もなくまた非生存の境に入つて幾千年かを過すのである。かう云ふ見方に對して、感情は反抗して曰ふ、『これは決して正しくはない』と、粗野な悟性すら此種の事を觀察して『時』は其性質に於て或理想的なものではないかと豫感する。思ふに『時』の理想性は『處』の理想性と共に、一切の眞の形而上學の秘庫を開くべき鍵鑰である。何となれば、此理想性のあるによつて、事物の自然的秩序とは全然異つた別種の秩序の存在する場所がつけられるからである。カントの偉大な譯はこゝに在る。

われらの生涯のどの出來事についても、われらが『あるイスト（現にあ）（るの義）』と云ひ得るのは、只の一瞬

間に過ぎない。其後は永遠に『あつた』と云ふ言葉でこれを云ひ現はさなければならぬ。宵々毎にわれらの生涯は一日丈け乏しくなるのである。若し、永久のつきせぬ泉がわれらの有に屬してゐて、われらはいつでも其うちで生命の時を新に得ることが出来ると云ふ隠れたる意識が、——われらの本質の最深い根底に横はれる此意識が、存在しなかつたなら、われらはわれらの短かい生命の時間が刻一刻と過ぎて行くのを見て、恐らく亂心せざるを得ないであらう。

この觀察を土臺として、次のやうな説を立てることもたしかに出来る。眞實なものは現在だけであつて、他の一切のものは單に思想の遊戯に過ぎないから現在を享樂し、これを生の目的となす事こそ最も大きな眞理だと云ふ考へである。然し此考へ方もまた最大の愚見たるを免れない。何となれば次の瞬間に最早存在せざるもの、夢の如く全く消え失せるものは、決して眞摯なる努力の對象たる價值を持ち得るものではないからである。

われらの生存は、消え行く現在より外に、その上に立脚すべき何等の基礎をも持たない。それ故にわれらの生存は、其本質上、不斷の運動を其形とするもので、われらの常に追求する安靜は何等の可能性をも持つてゐない。さればわれらの生存は、例へば山を走り下る人の如く、

止しやうとすれば、倒れざるを得ないから、只走りつゞけることによつて倒れないで居るのである。——或は指頭に載せて均衡を取られた棒にも似て居るし——或はまた絶えず運行する遊星にも似て居る。遊星は其運動を止めるや否や、太陽のうちに墜落するものである。——されば『不安』が生存の形である。

いかなる種類の安定も、いかなる持続的の状態もあり得ないで、一切は小休みなき旋轉と變化とをつゞけ、急ぎ・飛び、綱の上で絶えず歩いたり・動いたりして自分を支へて居るやうな此世界に於ては——『幸福』といふことは想像すら出来ないものである。プラトーンの所謂『不斷の變化のみあつて、決して常住のなき』ところには、幸福は住み得るものではない。まづ第一に、誰れも幸福ではない。人は一生を通じて、想像上の幸福を追求する。しかもこれに達する事は稀れで、よし到達しても直ちにあてがひの失望を感じる。だが通常は、何人も最後には、船破れ橋折れて、港のうちに走り込むのである。然し變轉常なき現在から成り立ち來つて今や其終りにやつて來た生涯に於て、これまで幸福であつたか不幸であつたかと云ふ問題の如きは、もはや最後の港に入つた以上は、結局全く同じ事となるのである。

更にまた、人間の世界に於ても動物界に於ても、かの偉大にして多様な・休みなき運動が、

饑餓及性慾なる二箇の簡単な衝動によつて起され又維持されて行くのは——恐らくは「退屈」の感じも少しくこれに加はつて働くだらうが、——實際驚異に價する事ではないか。なほまたこれらのものが、人生と云ふ變化多き人形芝居を繰つる複雑極まる器械に向つて主要な動力を供給し得るといふ事も、同じく驚異に價する事ではないか。

今これを少しく詳細に觀察すると、まづわれらの眼に映するのは、無機物の存在が、絶えず化學的の力によつて攻撃せられ、遂には消滅せしめられるのに對して、有機物はこれと反對に、物質の斷へざる代謝によつて其生存を可能ならしめられて居る事、及此代謝そのものは絶えずる流入を、——従つて外部から救援を得ることを必要とする事象である。それ故に有機的生活は、それ自身に於て既に、手の上で均衡を取られてゐる棒に酷似する。かかる位置に据えられたる棒は、常に動搖せざるを得ない。この故に有機的生活は、絶えざる需要であり、常に反覆してやつて來る缺乏であり、而してまた終りなき窮困である。然し此有機的生活のおかげを以て、初めて意識が可能となるのである。——従つてすべての有機的生活はまた有限の存在であるが、この對偶として無限の生存が考へられる。それは外界からの攻撃に曝されず、外部からの救助をも要せず、此故に恒久に自己を變せず、永遠に靜止するものであつて、本來發生した

ものではないから減びることもなく、轉變することもない。これには「時」なく、「多數」もなければ「多樣」もない。——このものに對する消極的の認識が、プラトーンの哲學の根本基調をなすものである。「生きんとする意志」の否定は、この状態に向つて道を開拓する。

われらの生活の有様は、粗細工のモザイクの畫に似て居る。近いところで見ては、何等の効果をも持たない。これを美しく見るためには、遠ざかつて立たねばならぬ。だから熱望した或ものを手に入れることは、とりもなほさず其價值なきことを見出す意味である。而してわれらは、常により良きものを期待して生活するが、同時にまた過去の事柄に對して悔悟的憧憬を懷くことが屢在る。たゞ然し現在の事件のみは、一時的のものとして理解され、目的に達する道程であるとか考へられない。夫故に大抵の人は、最後になつて、自己の過ぎして來た生活を回顧すると、其一生を通じて一時的の暮らしを續けて來たことを發見し、氣にも留めず・味ひもしないで過ぎて來たものが、即ちこれ彼等の生涯であり、且彼等がそれを期待して生活して來たものは、實は此生活に外ならなかつた事を見出して愕然とするであらう。故に人間の生涯は希望によつて愚化されつつ、死の腕のうちに跳り込むものである。

個人的意志はまた、足るを知らざるものである。このために願望の満足は、更らに新らしい願望を生じ、其慾求は永へに充足されることなく、無限に向つて進んで行く。これは畢竟、意志をそれ自身として考へて見ると、一切世界の主権者であつて、すべてのものが隷屬するのであるから、意志に満足を與へ得るものは、『部分』ではなくて、『全體』でなければならぬのに、『全體』は無限だからである。——われらが今、此世界の主権者が個々の現象となつてあらはれて來た時、いかに僅少のものしか與へられないかを見る時、——大抵は個人的の肉體を支へるに足りるだけしか與へられないのを見る時に、同情の念を禁じ得ないのである。人間の深き悲しみはかくして生ずる。

現代は、精神的に無能無力であり、あらゆる種類の惡を崇拜することにかけては頗卓越せる時代であつて、實に夫の自讚的で街揚的で且語調の不快な『現時』^{イェットツァイト}と云ふ言葉と甚よく適合してゐるやうに思はれるが——『現時』と云ふ言葉の示す『今』は、最すぐれた『今』であつて、此『今』を生ぜんがためにのみ、すべての他の『今』があつたのだと豪語するかのやうに響いて來る)——此現代に於ては汎神論者すら、人生は所謂『自己目的』であると公言するのを憚

らないのである。然し若しわれらの生存が世界の究極の目的であるなら、それこそ昔往今來世のなかに存在した目的のうちで、——これを樹てたものがわれらであつても、他人であつてもそれに論なく——最愚劣な目的であらう。

人生は、まづ一個の仕事としてあらはれる。自己の生命を保持する仕事がそれである。此仕事が遂げられると、得られたものは重荷となる。つゞいて第二の仕事があらはれる。それは虎視眈々たる猛禽のやうに、安全なる域に入つた生活を見つけると、直ちに襲ひ來る「退屈」を防ぐがために、得られたものを適當に處理する事がそれである。されば人間の第一の仕事は或ものを得ること、第二の仕事は、其得たものを忘却する事にある。さうしなければ人生は一個の重荷となるのである。

人生が迷誤の一種であることは、人間が慾望の複合物であつて、其充足は容易に得らるべきものではないが、たとへこれを満足し得ても、それは單に苦痛なき状態を與へるだけであり、此状態はまた人間に『退屈』の感じを與へるに過ぎない事を考へて見さへすれば十分に解る。此退屈の感じは人生そのものの空虚の感じであるから、また直接に生存そのものの無價値を證明するものである。若し生が——われらの全存在はこれに對する要求から成つてゐるが——積

極的で且眞實な價值をそれ自身のうちに持つてゐるとしたら、決して退屈の感じを與へる筈はない。却つて、單に生存してゐるといふ事それ自身が、既にわれらに充足と満足とを與へなければならぬ。然るにわれらは或何物かを得んとして努力するか、或は純粹に知力的な仕事に没頭するかでなければ、生をたのしまないのである。前者にあつては、目的へまでの距離と、其途中に存する障碍とが、目的そのものを、われらに満足を與へるものとしてわれらの眼に映らしめる。然し此幻影は目的に到達した後には消え失せる。——後の場合に於ては、棧敷に居る觀客の如く、人生を外部から見るために、人生を脱出するのである。感覺的の享樂すらも不斷の渴望のうちに存するもので、その目的が果されるや否や忽ち消失する。二者のうちのいづれか一つに従事するとなくして、生存そのものの上へ投げ出されると、われらは生の無價値と空虚とを^{しみじみ}と感悟する。これが即ち『退屈』である。——また、驚異すべき事象に對するわれらに内在する、滅ほしがたき欲求は、いかにわれらが事物の成り行きの退屈で且自然的な順序の中斷せらるるを好むかを示すものである。——夫の華美な生活をなし、堂々たる城廓に住む貴人の贅澤も、所詮はわれらの生存の本來的な貧弱さを超脱せんとする無益な努力に外ならない。冷頭靜思するならば、寶石・珠玉・羽毛或は多くの蠟燭に照さるる赤天鵲絨、舞踏者

輕業師・假裝や假裝行列の如き、そもそも何物であらうか？

人體と云ふ極めて巧みに錯綜せる機關のうちにあらはれた『生きんとする意志』の最完全な顯現も、遂には塵に歸らざるを得ないものであり、其全存在も全努力も、最後には明らかに絶滅の手に委ねられると云ふ事は意志の全努力も畢竟空虚な・果敢なきものである事を、常に眞實で正直な『自然』が、素朴な方法でわれらに陳述するに外ならない。若し生がそれ自身に於いて何等かの價值あるものであり、絶對的のものであるならば、『無』を目的として持つ筈はない。——この事についての感じは、次に掲げるゲエテの美しい詩の根底をなして居る。

「古塔の上高きところに、勇者の氣高き心はあり。」

『死の必然』は、人間が單に一個の現象であつて、決して物^{もの}爾^{それみづから}自^{みづか}ではなく、従つて眞に存在するものではないと云ふ事から、直ちに抽出し得る命題である。然しかゝる種類の現象のうち

にのみ、其根底に存する物爾自^{ものみづから}があらはれ得るといふ事は、物爾自^{ものみづから}の性質の結果である。われらの生涯の初めと終りとの間には、いかなる差異があるであらうか！前者は熱望の迷想と樂慾の歡喜とから成り、後者は一切の機關の破壊と死屍の腐敗とから出來て居る。健康と

生の享樂との二つの方面から見ると、生涯の始と終との間の道は、常に下り坂の觀を呈して居る。たのしく夢見る小兒期と、愉快な青年期、困難の多い壯年期と、虚弱なる・また往々憐れむに堪えたる老年期、最後の疾病の苛責と臨終の苦悶。かう觀じて來ると、生存そのものが既に一個の失錯であつて、その結果は漸次に、且益多く現はれて來るやうに思はれないであらうか？

人生を幻滅だと理解するのが一番正しい。凡べてはさう觀するやうに出來てゐるのは、十分明白なことである。

* * * * *

若し人が其眼を世態の成行きを大觀することから轉じ、特にまた人間生死の急速な連續や、其須臾な假現的存在を觀察することから轉じて、例へば喜劇にあらはれるやうな人生の細部を眺めると、世と人との姿は、かの滴蟲類の群れる水滴や、肉眼には映ぜざる乾酪蛆の群れなどが、顯微鏡にうつし出さるゝ有様に髣髴する。此等の動物の熱心なる活動や鬭争は、觀察者を笑はせるが、人生とてもこれと比較し得ざるものではない。何となれば、かゝる狭い場所に於ける偉大にして且眞面目な活動が、滑稽感を起さしめると同じ理屈で、人間の生涯の如き短か

い時間に於ける同じやうな活動も、當然同様の感じを與ふべきものだからである。――

人生は顯微鏡的性質のもので、分つべからざる一個の點である。われらはこれを時と處との二つの強いレンズによつて引伸ばすが故に、著しく擴大されてわれらの眼に映るのである。

『時』とはわれらの頭腦のうちに在る一装置であつて、『持續』と云ふ事によつて、物とわれら自身との全然空虚な存在に、現實の外觀も與ふるものである。――

過去に於て、或幸福を獲、或享樂を捉へ得べかりし機會を利用せず逸した事を、後で悔しがつたり・啣つたりするのは馬鹿けたことである。――たとへ其機會を利用したからとて、今になつて何が残つて居やうぞ？ 記憶の枯燥せる木乃伊だけではないか。われらに與へられたすべてのものはみな斯の如きものである。されば『時』と云ふ形式は、どうそれが見積られやうとも、實は一切の地上の享樂の空虚なことをわれらに教示する手段に外ならない。

われらの存在とすべての動物のそれとは、共に確立せる、而して少くとも時間的に定止せるものではなく、單なる流轉の存在に過ぎない。それはたとへ推移によつて存立するもので、渦巻ける水に比較することが出来る。尤肉體の形はしばらくの間はほど不易である。然しそれはただ、物質が不斷に代謝して、舊きものは棄てられ、新らしきものが輸入せられると云ふ條件の

下に於てある。されば此輸入に適當せる物質を絶えず供給する事が、あらゆる生物の主な仕事である。彼等は同時にまた彼等のかゝる生存が、上述の如くほんの僅かの間である事を自覺して居る。夫故に彼等は其退去するに當つて、彼等の代りに來るべき他の生物に、彼等の生存を譲らうと企てる。此企圖は自意識のうちには性的衝動となつてあらはれ、他物の意識、即ち客観的の觀方に於ては生殖器の形に於てあらはれる。此本能は例へて云はば眞珠を貫ける糸のやうなもので、急速に相續いであらはれる個體は丁度眞珠が相追ふてあらはれるのに似て居る。若しわれらが想像のうちにて此繼續の速度を早くし、且其順序全體に於ても、個々の眞珠に於ても常に同一の形を保ちて、しかも其材料を絶えず變へるのを想見する時には、われらの生存なるものは、單に一個の似而非生存に過ぎないのを知るであらう。存在する唯一つのものは觀念であつて、これに對應する事物は影の如き性質のものたるに過ぎずとなすプラトーンの學說の根底にはかゝる見方が存するのである。――

われらは、物爾自に對して單なる現象に過ぎざる事は、營養料として常に要求せらるゝ物質の不斷の流出と流入とが、われらの生存の必須的要件をなすことによつて確められ例證せられ且明示される。われらは煙とか・焔とか・瀑布などに比ぶべきもので、他からの流入がなくなる

や否や直ちに衰へ又は停止する。――

『生きんとする意志』は、結局虚無に終るべき純粹の現象のうちに現はれるものだと言ふことが出来る。然し現象そのものと共に、此虚無は『生きんとする意志』の内部に止まつてゐて、

其基礎を上述の意志の上に置くものである。然しこれにはいくらか不明な點もあるが――人類世界の全體を一目のうちに集めて、これを大觀しやうと試みるならば、眼に映じ來るものは、そもいかなる光景であらうか。到る處でわれらが目睹するものは、いかなる瞬間にも生じ來る・脅威的の一切の危険と殃とに對して、人々が自己の命と存在とを擁護せんがために、肉體と精神との全力を鼓して、絶えず戦闘し・猛烈に力爭する有様である。――若しわれらにして、これらすべてが價する價格即ち生命と存在そのものとを考へて見るなら、苦痛を離脱せる生存の若干の空隙の存在を見出すであらう。然し此空隙も直ちに『退屈』の襲ふところとなつて、新らしい要求のために速かに狭められる。――

新らしい要求の後ろには、直ちに『退屈』の存する事は、――此退屈はまた怜悯な動物をも襲ふものである――生そのものがいかなる眞止の價値をも有せず、單に必需と幻迷とによつて運動せしめられるに過ぎざる事の結果である。此運動が停止すると、生存の絶對的の不毛と空